

県道関係埋蔵文化財発掘調査概報

平成13年度

原 間 遺 跡
上 林 遺 跡
鎌 野 西 遺 跡
三 谷 中 原 遺 跡
北 野 遺 跡
川 岡 遺 跡
今 津 中 原 遺 跡
北原2号墳・北原遺跡
本 村 中 遺 跡

2 0 0 2 . 3

香 川 県 教 育 委 員 会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

例 言

1. 本書は、県道改良事業に伴い平成13年度に実施した原間（わらま）遺跡、上林（かんばやし）遺跡、鎌野西（かまのにし）遺跡、三谷中原（みたになかはら）遺跡、北野（きたの）遺跡、川岡（かわおか）遺跡、今津中原（いまづなかはら）遺跡、北原2号墳・北原遺跡（きたはら2ごうふん・きたはらいせき）本村中（ほんむらなか）遺跡の計9遺跡の発掘調査の概要を記録したものである。

2. 本調査は、香川県教育委員会文化行政課が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3. 本年度の財団法人香川県埋蔵文化財調査センターの調査組織は、次のとおりである。

総 括	総 務	調 査
所 長 小原 克己	参 事 河野 浩征	参 事 梅木 正信
次 長 川原 裕章	副主幹 大西 誠治	主任文化財専門員 廣瀬 常雄
	係 長 多田 敏弘	主任文化財専門員 藤好 史郎
	主 査 山本 和代	文化財専門員 木下 晴一

(原間、川岡遺跡)

文化財専門員 山元 素子
主任技師 石原 徹也
調査技術員 松田 朝由

(上林、鎌野西、三谷中原遺跡)

主任技師 長井 博志
文化財専門員 川原 和生
調査技術員 武井 美和

(北野遺跡)

文化財専門員 木下 晴一
文化財専門員 柏 徹哉
調査技術員 大塚 純司

(今津中原遺跡)

文化財専門員 増井 泰弘
主任技師 小林 明弘
調査技術員 中村 文枝

(北原2号墳・北原遺跡、本村中遺跡)

文化財専門員 森 格也
主任技師 松岡 晶
調査技術員 漆原 啓悟

4. 調査に際しては、次の機関の協力を得た。記して謝意を表したい（順不同敬称略）。

香川県土木部道路建設課、香川県長尾土木事務所、香川県高松土木事務所、香川県善通寺土木事務所、香川県観音寺土木事務所、地元各自治会、地元各水利組合

5. 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

SA：柵列 SB：掘立柱建物 SD：溝状遺構 SE：井戸 SH：竪穴住居
SK：土坑 SP：ピット SR：自然河川 SX：性格不明遺構

6. 本書で用いている方位の北は国土座標第IV系の北である。

7. 本書の執筆、挿図の作成・浄書は、調査各担当職員が分担して行った。執筆者は目次に記した。また、編集は木下が担当した。

本文目次

I. 調査の経緯と概要（藤好）	1
II. 原間遺跡（山元）	3
III. 上林遺跡（長井）	18
IV. 鎌野西遺跡（長井）	24
V. 三谷中原遺跡（長井）	26
VI. 北野遺跡（木下）	31
VII. 川岡遺跡（山元）	39
VIII. 今津中原遺跡（増井）	46
IX. 北原2号墳・北原遺跡（森）	49
X. 本村中遺跡（森）	52

挿図目次

第1図 収録遺跡位置図 …………… 2	
原間遺跡	
第2図 原間遺跡及び周辺遺跡図 (1/25,000) …………… 3	第10図 I区SH03、II区SH04・05出土 遺物(1/4、1/2) …………… 9
第3図 I区SH04・05・09出土遺物 (1/4、1/2) …………… 4	第11図 I区SH06・02出土遺物 (1/4、1/2) …………… 10
第4図 I区SH07出土遺物(1/4) …… 4	第12図 II区SK25、SK28 出土遺物 (1/4、1/2) …………… 11
第5図 遺構配置図(1/200) …… 5・6	第13図 II区SH03平・断面図(1/80) …… 12
第6図 II区SH01平・断面図(1/80) …… 7	第14図 II区SH07平・断面図(1/80) , 土坑内土器出土状況(1/10) …… 12
第7図 II区SH01出土遺物(1/4、1/2) …………… 8	第15図 II区SH07出土遺物(1/3) …… 13
第8図 II区SH02出土遺物(1/4) …… 8	第16図 II区SB01平・断面図(1/80) …… 14
第9図 II区SH08・09出土遺物(1/4) …………… 9	第17図 土壌墓等出土遺物(1/2) …… 15
上林遺跡	
第18図 遺跡位置及び周辺の遺跡 (1/25,000) …………… 18	第21図 SD06断面図(1/20)及び出土遺 物(1/3) …………… 20
第19図 SD05・06平面図(1/200) …… 19	第22図 遺構配置図(1/500) …… 21・22
第20図 SD05断面図(1/20)及び出土 遺物(1/3) …………… 20	第23図 SX01平・断面図(1/60・1/80) 及び出土遺物(1/3) …………… 23
鎌野西遺跡	
第24図 SD03断面図(1/20)及び出土 遺物(1/3) …………… 24	第25図 遺構配置図(1/500) …… 25
三谷中原遺跡	
第26図 調査区割図(1/4,000)及びI、II 区遺構配置図(1/400) …… 27	第28図 IV区SD01、02、18断面図(S=1/40) 及びSD01出土遺物(1/3) …… 29
第27図 IV～VII区遺構配置図(1/400) …… 28	
北野遺跡	
第29図 遺跡周辺の旧地割 …… 32	第31図 層序模式図 …… 34
第30図 調査区割図及びグリッド図 …… 33	第32図 遺構配置図 …… 35・36
川岡遺跡	
第33図 遺跡位置図及び周辺の遺跡 (1/40,000) …………… 39	第35図 遺構配置図(1/250)および周辺 地割図(1/10,000) …… 43・44
第34図 予備調査トレンチ位置図及び本調 査区位置図(1/2,000) …… 41	
今津中原遺跡	
第36図 遺跡位置及び周辺の遺跡 (1/50,000) …………… 46	第39図 調査区位置図(1/2,500) …… 48
第37図 SD04断面図(1/40) …… 47	第40図 I区遺構配置図(1/400) …… 48
第38図 SD01断面図(1/40) …… 47	第41図 II区遺構配置図(1/400) …… 48

北原2号墳・北原遺跡

第42図 遺跡位置と周辺の遺跡
(1/25,000) 49

本村中遺跡

第43図 遺跡位置と周辺の遺跡
(1/25,000) 52
第44図 遺構配置図 (1/400) 53

第45図 2区SR01出土土器 (1/4) 55

写真目次

原間遺跡

写真1 II区全景 (北から) 5・6
写真2 I区全景 (南から) 5・6
写真3 II区SH01全景 (南から) 5・6
写真4 I区SH04~06全景 (北から) 5・6
写真5 II区SH02土器出土状況
(北西から) 9
写真6 II区SH03 (北から) 9
写真7 II区SH05炉内土器出土状況
(東から) 10

写真8 I区SH02 (西から) 10
写真9 II区SK28土器出土状況 (北から)
..... 11
写真10 II区SH01、03、07、SB01
(西から) 11
写真11 II区SH07内土坑土器出土状況
(西から) 15
写真12 II区SB01 (西から) 15

上林遺跡

写真13 調査区全景 (北から) 19

写真14 SK05~08完掘状況 (東から) 19

三谷中原遺跡

写真15 I区SR01土層断面 (I区西壁南
端部、南東から) 27
写真16 IV区SD01完掘状況 (北から) 29
写真17 V区SD01完掘状況 (北から) 29

写真18 VII区SK02完掘状況 (東から) 30
写真19 VII区SR01完掘状況 (北から) 30

北野遺跡

写真20 遺跡付近空中写真
(昭和23年撮影) 31
写真21 SK07遺物出土状況 (東南から)
..... 34
写真22 I区南 下層完掘状況 (北から) 34
写真23 SD24ほか完掘状況 (北から) 37

写真24 SD24上層遺物出土状況 (南から)
..... 37
写真25 SR03、SD19完掘状況
(西北から) 38
写真26 SB02、06ほか完掘状況 (東から)
..... 38

川岡遺跡

写真27 I区全景 (南から) 43・44
写真28 II区全景 (南から) 43・44

写真29 II区SD①06土器出土状況
(北から) 43・44

今津中原遺跡

写真30 調査区遠景 (西から) 46
写真31 SD04全景 (西より) 47

写真32 SD01全景 (東より) 47

北原2号墳・北原遺跡

写真33 北原遺跡 S H01 (北西から) 50
写真34 北原2号墳全景(手前は周溝)
(南から) 50
写真35 第1石室(右)と第2石室(左)
(北東から) 51

写真36 第1石室(羨道から玄室を見る)
(東から) 51
写真37 第1石室遺物出土状況(南から) .. 51
写真38 第2石室遺物出土状況(北から) .. 51

本村中遺跡

写真39 1区全景(南東から) 54
写真40 1区旧河道(S R01)土層断面
(北西から) 54
写真41 S B01(北西から) 54

写真42 S A01、S B02(南東から) 54
写真43 2区全景(南東から) 55
写真44 2区S D02木樋出土状況
(南西から) 55

表 目 次

第1表 平成13年度県道関係発掘調査一覧
..... 2

北野遺跡
第3表 調査工程表 33

原間遺跡

第2表 出土遺物観察表 17

I. 調査の経緯と概要

1. 発掘調査

平成13年度の県道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、香川県教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターとの間で平成13年4月1日付けで締結した「埋蔵文化財調査契約」に基づき実施した。発掘調査を実施した遺跡は、県道観音寺善通寺線善通寺市の北原2号墳・北原遺跡、県道多度津丸亀線丸亀市今津町の今津中原遺跡、県道中徳三谷線高松市三谷町他の上林遺跡・北野遺跡・鎌野西遺跡・三谷中原遺跡、県道紫雲出山線三豊郡詫間町の本村中遺跡、県道大内白鳥インター線の大川郡大内町の原間遺跡、地域高規格道路の高松市岡本町の川岡地区である。

観音寺善通寺線の北原2号墳および北原遺跡は、善通寺市善通寺町に所在する。平成13年4月から6月にかけて1,260㎡の発掘調査を実施した。県教育委員会の調査で、北原古墳は前方後円墳ではなく2基の円墳であることが判明し、その内の南部の2号墳を今回発掘調査した。北原遺跡は古墳が立地する丘陵上に重複して存在した弥生時代の集落跡である。北原2号墳は古墳時代後期の横穴式石室をもつ円墳で、墳丘内に小型の石室を別に1基、計2基の石室をもつ円墳であることが判明した。古墳時代後期の有岡古墳群の様相を解明する上で重要な成果が得られた。

多度津丸亀線の今津中原遺跡は丸亀市今津町に所在する。平成13年4月から6月にかけて1,530㎡の発掘調査を実施した。弥生時代前期および後期の灌漑用水と考えられる溝を検出した。遺跡の南西方向には弥生時代前期の中の池遺跡があるが、弥生時代前期段階でかなり広範囲において水稻耕作が行われた可能性が高くなってきた。

中徳三谷線の発掘調査は、高松市上林町の上林遺跡、および三谷町の北野遺跡・鎌野西遺跡・三谷中原遺跡で実施した。上林遺跡は昨年度からの継続で463㎡の発掘調査を4月から5月にかけて実施した。北野遺跡は4月から9月にかけて、3,020㎡の発掘調査を実施した。中世の集落跡と弥生時代前期の溝を検出している。鎌野西遺跡は上林遺跡に引き続いて5月から9月にかけて1,502㎡の発掘調査を実施した。中世の溝を検出している。三谷中原遺跡は鎌野西遺跡と平行して発掘調査を実施した。調査面積は当初2,039㎡の調査を実施する計画であったが、高規格道路の用地取得の遅れたことから、高松土木事務所等と協議の結果、10月から11月の間1班を三谷中原遺跡で2ヶ月間の追加調査に置き換えることになったため、2,180㎡の発掘調査となった。三谷中原遺跡は推定南海道を含む調査対象地となっているが、今年度の調査区は用地の関係で推定南海道部を除く南北の対象地の調査を実施した。調査では南北方向の比較的規模の大きな条里坪界溝を検出した。南海道との関係が注目される。

原間遺跡は、横断道大内白鳥インター部の調査とアクセス道路である大内白鳥インター線の調査に分かれる。ここで報告するのは今年度のアクセス道路部の調査である。今回の原間遺跡の調査区は前回の調査対象地の南に隣接する箇所である。7月から11月中旬にかけて1,680㎡の発掘調査を実施した。今年度の対象地は原間遺跡の調査を実施した集落跡の中で最も地形的に安定した扇状地形の微高地部で弥生時代後期から古墳時代にかけての集落と土坑墓群を検出した。遺跡はどの時期も堅穴住居群が密集し、中でも作りつけ竈と考えられる焼土部をもつ5世紀後半代堅穴住居や布基礎構造建物跡など注目される遺構を検出している。

高規格道の高松市岡本町川岡地区の調査は、11月から予備調査を実施し、その内遺跡の存在が確認さ

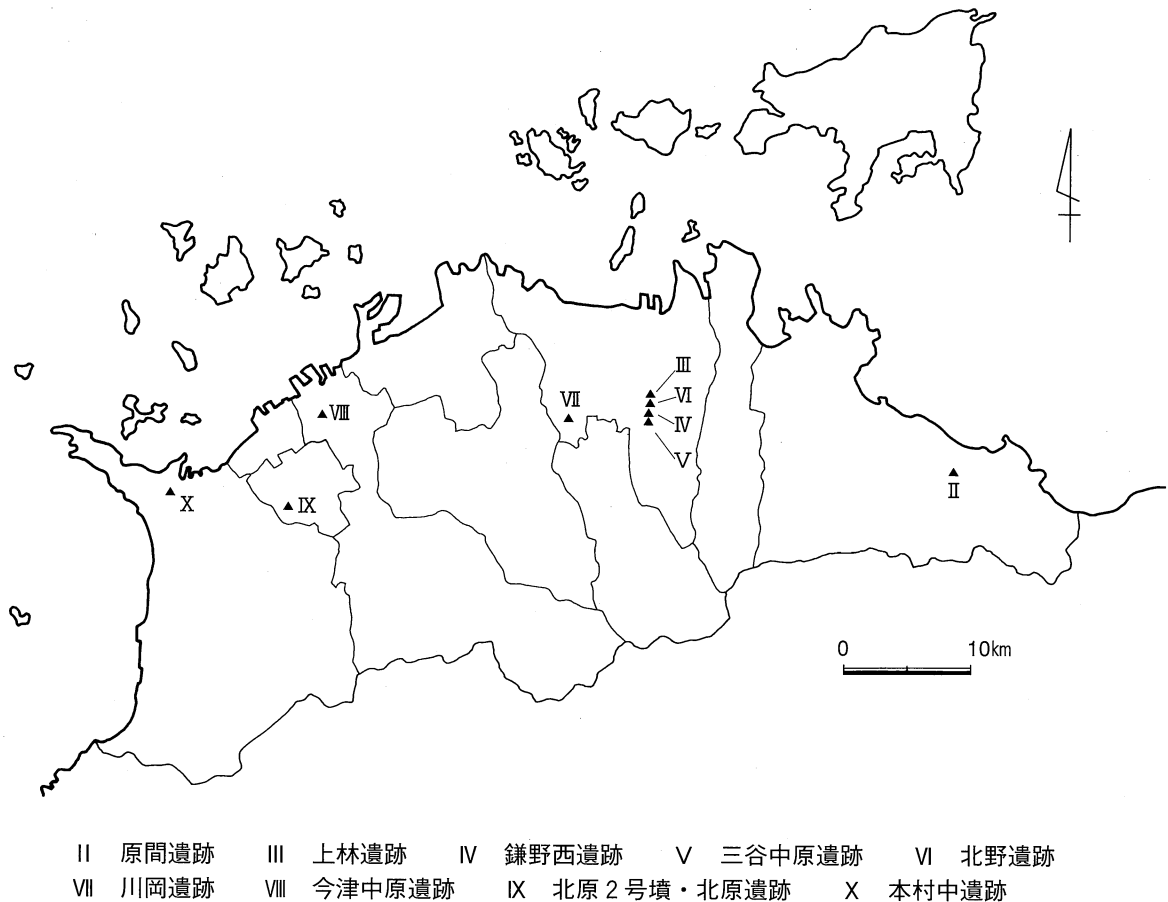
れた2,954㎡について12月から3月まで引き続き本調査を実施した。調査面積は予備調査と合わせ3,454㎡である。当初2班を10月から延べ11ヶ月投入する計画だったが遺跡の広がりが少なかったため、1班が担当した。12月から残りの1班は北原2号墳、北原遺跡の整理業務にあたった。川岡地区の調査では、縄文時代のサヌカイト素材剥片の集中箇所や弥生時代後期後半の灌漑用水と考えられる溝、香川郡条里の坪界溝を検出した。

2. 整理作業

平成13年度の整理作業は大川郡大川町の寺田産宮遺跡、木田郡三木町の南天枝遺跡の報告書作成に伴う整理作業を実施した。

番号	路線名等	遺跡名	所在地	調査面積 (㎡)	調査期間	遺構	遺物
1	紫雲出山線	木村中	三豊郡詫間町	1,520	H 13.7～H 13.9	中世掘立柱建物	土師器、縄文土器
2	観音寺普通寺線	北原2号墳・北原	普通寺市普通寺町	1,260	H 13.4～H 13.6	古墳時代円墳、横穴式石	須恵器、鉄器
3	多度津丸亀線	今津中原	丸亀市今津町	1,530	H 13.4～H 13.6	弥生時代溝	弥生土器
4	中徳三谷線	北野	高松市三谷町	3,020	H 13.4～H 13.9	弥生時代溝	弥生土器
5	〃	鎌野西	高松市三谷町	1,502	H 13.5～H 13.9	中世溝	土師器
6	〃	三谷中原	高松市三谷町	2,180	H 13.5～H 13.1	古代～中世溝	土師器
7	〃	上林	高松市上林町	463	H 13.4～H 13.5	弥生時代溝	弥生土器
8	大内白鳥インター線	原間	大川郡大内町	1,680	H 13.7～H 13.1	弥生・古墳時代竪穴住居	弥生土器、鉄器
9	地域高規格道路	川岡	高松市岡本町	3,454	H 13.11～H 14.3	弥生時代溝・中世溝	弥生土器、サヌカイト剥片
		合計		16,609			

第1表 平成13年度 県道関係発掘調査一覧



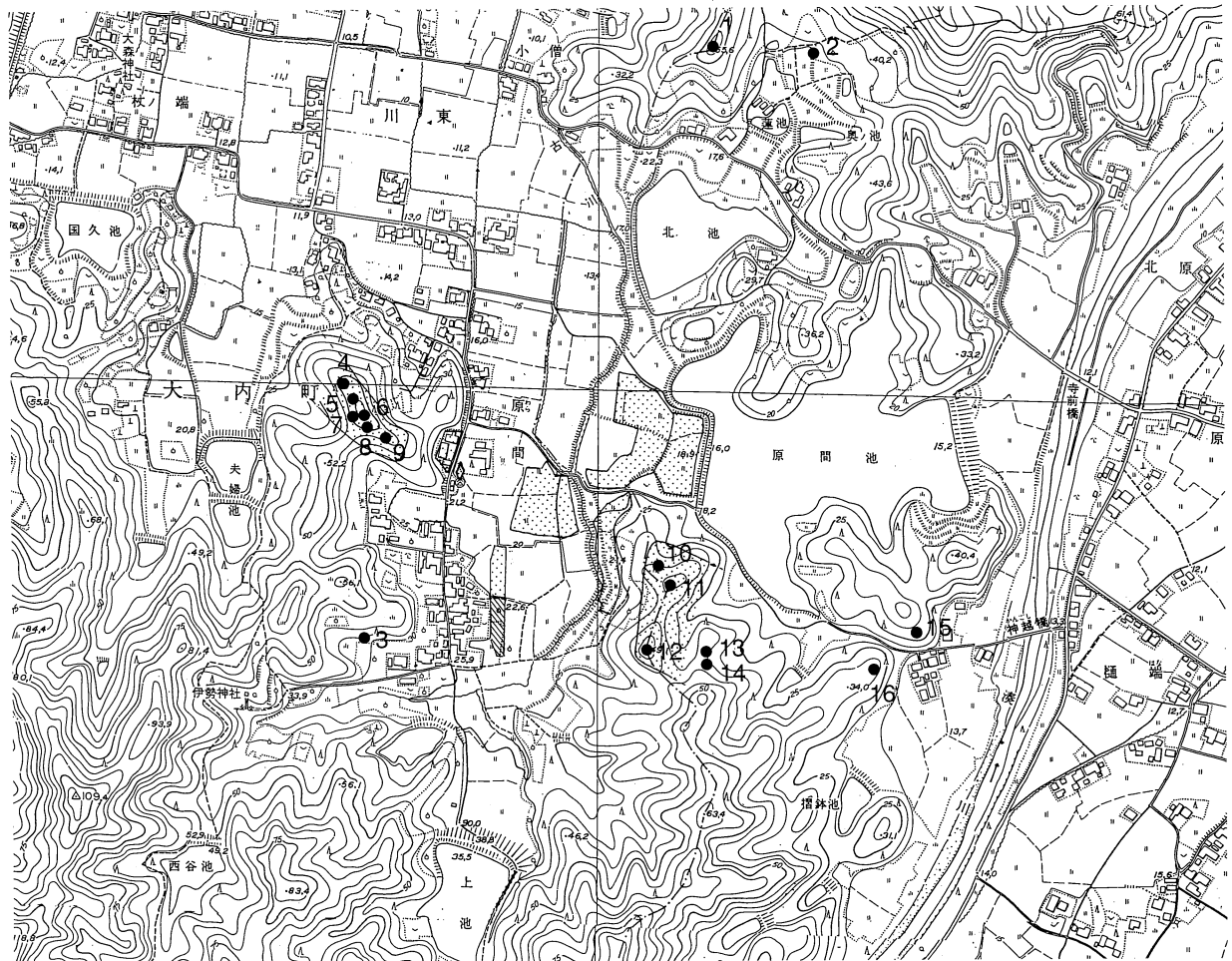
第1図 収録遺跡位置図

原間遺跡

1. はじめに

原間遺跡は大川郡大内町川東原間に所在する。阿讃山脈の分脈である矢筈山系の山裾部に立地し、南側には平野が広がる。これまでに原間遺跡は平成9・10年度に四国横断道建設に伴い、平成9・11年度には県道大内白鳥インター線建設に伴い、平地部分とその両側の丘陵部の発掘調査を実施してきた。その結果、おもに平野部からは弥生時代後期～近世の集落を、また丘陵部からは、古墳時代中期の古墳群を検出した。

弥生時代は主として微高地上に中心に小集落が展開することがわかり、弥生時代後期後半～終末期にかけて継続して集落が営まれていることが判明した。集落構成の最小単位である単位集落は、約60mの範囲で竪穴住居2～3棟、掘立柱建物1棟、土坑墓等で構成されていることも判明した。さらに平成9年度に実施された県道原間遺跡ではほとんど弥生時代の遺構を検出していないことから、原間遺跡の弥生時代の集落の北限は、おおむね横断道原間遺跡の微高地上であることを確認し、その北側は生産域で



平成13年度調査地
 平成9年度～11年度調査地

- | | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|------------|-----------|-----------|
| 1. 大日山古墳 | 2. 高松廃寺 | 3. 原間1号墳 | 4. 原間3号墳 | 5. 原間4号墳 | 6. 原間7号墳 |
| 7. 原間8号墳 | 8. 原間9号墳 | 9. 原間10号墳 | 10. 原間2号墳 | 11. 原間5号墳 | 12. 原間6号墳 |
| 13. 樋端1号墳 | 14. 樋端2号墳 | 15. 神越2号墳 | 16. 神越桃山古墳 | | |

第2図 原間遺跡及び周辺遺跡図 (S=1/25,000)

あることを推定した。また、微高地部分を復元する段階で、弥生時代の集落の中心部が平成11・13年度に実施した県道原間遺跡の調査区になると推定したが、2年度にわたる発掘調査でそれが実証された。

古墳時代中期には原間遺跡の西丘陵と東丘陵で古墳群が築造される。西丘陵で6基、東丘陵で3基を検出し、西丘陵のものはおおむね5世紀中葉である。東丘陵では、特に西丘陵の古墳より時期がわずかに下る、甲冑や刀とともに三累環頭太刀が出土した原間6号墳が、渡来人との関係から注目される。

その他横断道原間遺跡の調査では古代～近世の集落跡を検出している。

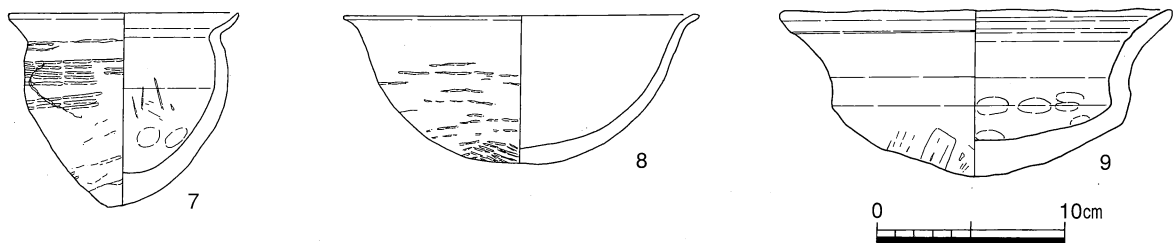
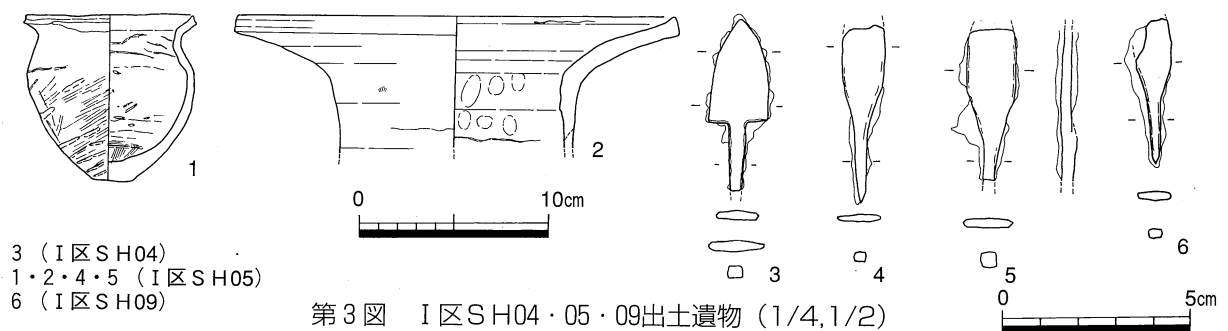
今年度の発掘調査では弥生時代後期後半～古墳時代の集落跡、古墳時代後期の土坑墓群を検出した。古代以降の遺構は検出されなかった。

2. 弥生時代後期後半～古墳時代前期の遺構・遺物

今回の発掘調査では、この時期の竪穴住居を15棟、土坑2基を検出した。竪穴住居は円形のもの7棟、方形のもの8棟で、いずれの形状のものも地形に制約されたように緩く東側へ弧を描くように配置される。遺構の切り合い関係や主軸方位、出土遺物から少なくとも3期には分けられるが、それぞれの細かい時期の比定は今後の課題としたい。

I区SH04(第3図) I区やや北寄りで見出した円形の竪穴住居である。直径8.5m、深さ約55cmである。中央に炉を持ち、柱穴は7穴確認した。欠落するピットもあるが、おおむね円形に巡ると考えられる。壁溝は部分的に確認されたが、明確ではなかった。この竪穴住居はSH05・06に切られる。埋土中からは良好な状態の遺物は出土しなかったが、弥生土器の他、鉄鏃が出土した。この竪穴住居の時期は弥生時代後期後半と考えられる。

3は鉄鏃。有茎の三角形鏃。錆が著しかったが、X線撮影をしたところ、鉄鏃であることがわかった。I区SH05(第3図) I区やや北寄りで見出したSH04の東側で見出した竪穴住居である。方形で主軸はN2°Wである。東側は調査区外へ延びるが、見出した炉を中心と想定すれば、隅丸長方形で長辺8.2m、短辺約6m、深さは54cmと考えられる。中央には炉が確認され、柱穴は8穴確認した。明確な壁溝は確認できなかった。床面には炭化材が多く残り、埋土中にも炭化物が多く堆積していた。焼失家屋と考え



第5図 遺構配置図 (S=1/200)

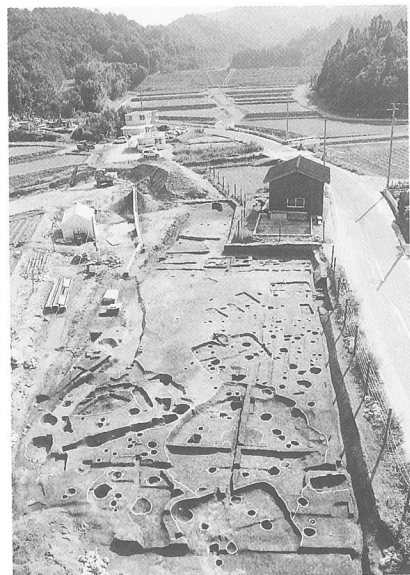


写真1 II区全景 (北から)



写真2 I区全景 (南から)

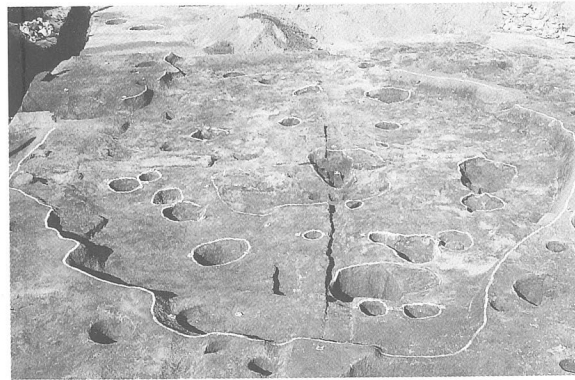


写真3 II区SH01全景 (南から)



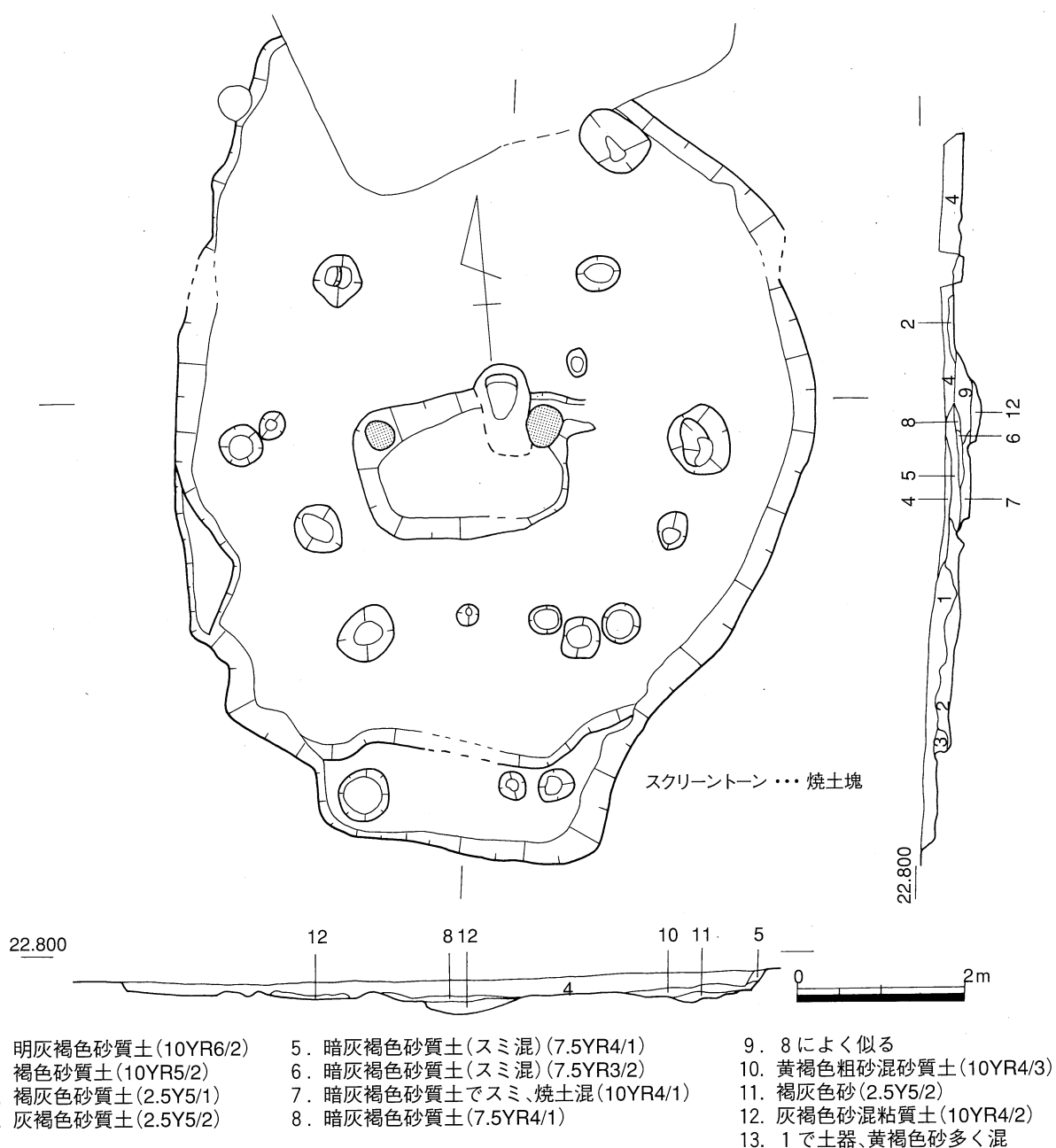
写真4 I区SH04~06全景 (北から)

られる。また、埋土中からは大量の土器が出土した。住居が廃絶した後ゴミ捨て場として利用されたと
 思われる。時期はS H04よりやや下の時期であろう。

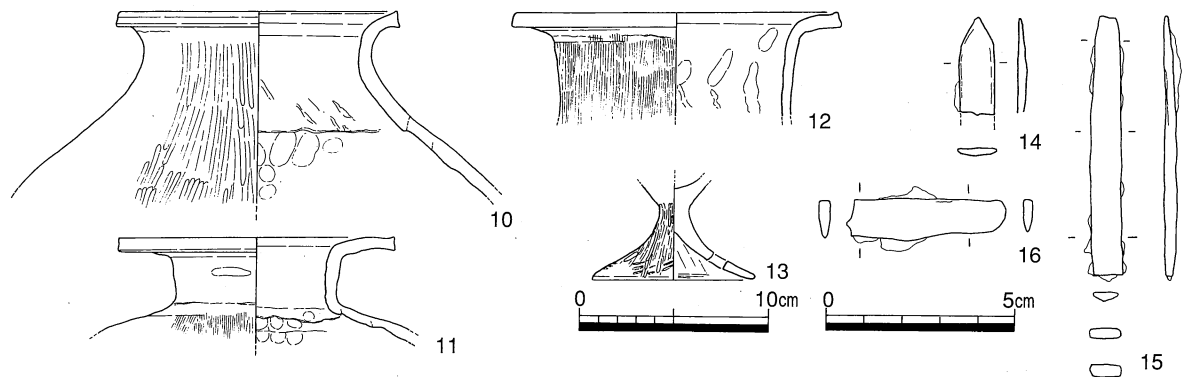
1は小型甕。2は広口壺口縁部。胎土中に結晶片岩を含み、東阿波型土器である。4・5は鉄鏃。
 ともに柳葉式。

I区S H07 (第4図) I区中央付近東よりで検出した竪穴住居である。円形と考えられるが、大部分
 は調査区外へ延びるため規模は不明である。残っている弧の長さから推定すればおおむね8 m程度、深
 さは52cmである。竪穴住居に付属する支柱穴・壁溝などは確認できなかった。この竪穴住居はS H05に
 切られる。床面上からは弥生土器甕、鉢が出土した。時期は弥生時代後期後半と考えられる。

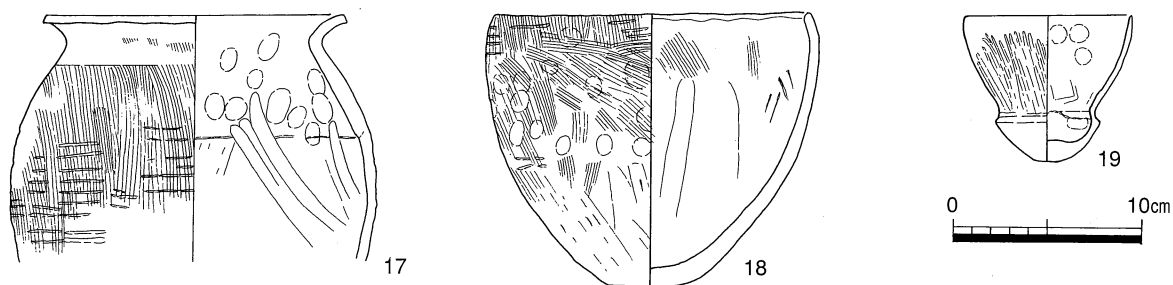
7は小型甕。外面にはタタキ、内面には縦方向の工具圧痕を残す。8・9は鉢。9は胎土中に角閃石
 を含み、下川津B類土器の形態と似るが、色調は橙色を呈し、厚手で野暮ったい。



第6図 II区SH01 平・断面図(1/80)



第7図 II区SH01 出土遺物 (1/4,1/2)



第8図 II区SH02 出土遺物 (1/4)

I区SH09・10(第3図) SH07の南側で検出した竪穴住居である。当初同一の竪穴住居として掘り下げを行っていたが、掘り下げの結果、2棟が重複していることがわかり、壁面の土層観察の結果、SH10の方が新しいことがわかった。SH09は円形または隅丸方形で、大部分が調査区外へ延びるため全体の規模は明かではない。深さは74cmを測る。支柱穴と思われるピットを1穴確認した。竪穴住居の埋土中から鉄鏃が出土した。SH10は隅丸方形と考えられ、そのコーナーを検出したが、大部分は調査区外へ延びる。深さは79cmを測るが、規模は不明である。

6は鉄鏃。4・5と同様柳葉式である。

II区SH01(第6・7図) II区の北部で検出した竪穴住居である。やや不定形の円形で、南側に明確な張り出しを持つ。北側はSH07に切られる。張り出し部分を除く長軸が8.4m、短軸7.5m、深さは25cmを測る。中央部分には、広い範囲で炭の堆積層が広がり、それを除去した後、その北側部分で土坑を確認した。炭の堆積層の北辺部の東側と西側の2箇所に直径35~40cm程度の焼土塊を検出した。支柱穴は円形に並び、5穴検出した。壁溝は確認できなかった。床面上からは弥生土器壺、甕、高坏の他、鉞、刀子、細い延べ棒状のものを環状に折り曲げたような鉄製品が出土した。張り出し付きの特殊な形態で、床面上に炭の堆積層や焼土塊があるため、住居内で鍛冶を行っていた可能性を考慮し、炭の堆積層を持ち帰り、磁石による鍛造剥片や粒状滓の抽出を試みたところ、わずかに鉄片が抽出できた。鉄片の量はごくわずかであり、この住居で鍛冶を実際に行っていたかどうかは今後検討していく必要がある。竪穴住居の時期は弥生時代後期後半と考えられる。

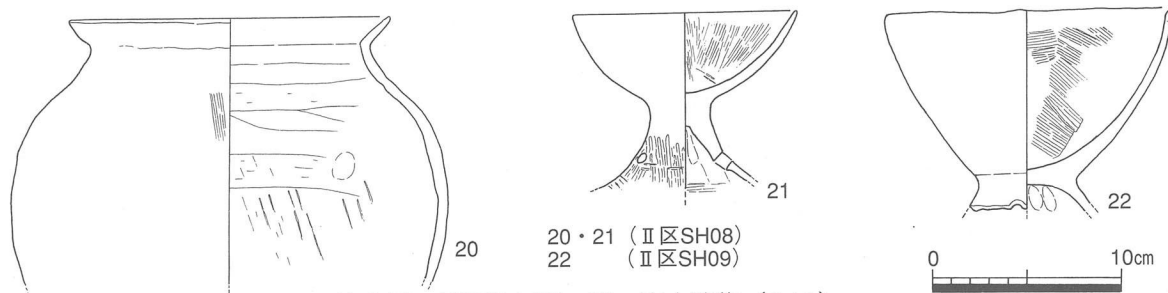
10~12は壺。10は外面をヘラミガキで、11・12はハケで調整する。13は小型の高坏。14・15は鉞。16は刀子。

II区SH02(第8図) SH01の東側で検出した円形の竪穴住居である。後世の遺構などで破壊されている部分も多い。規模は直径約6.4m、深さ30cmである。床面上には炭化物が多く堆積しており、焼失

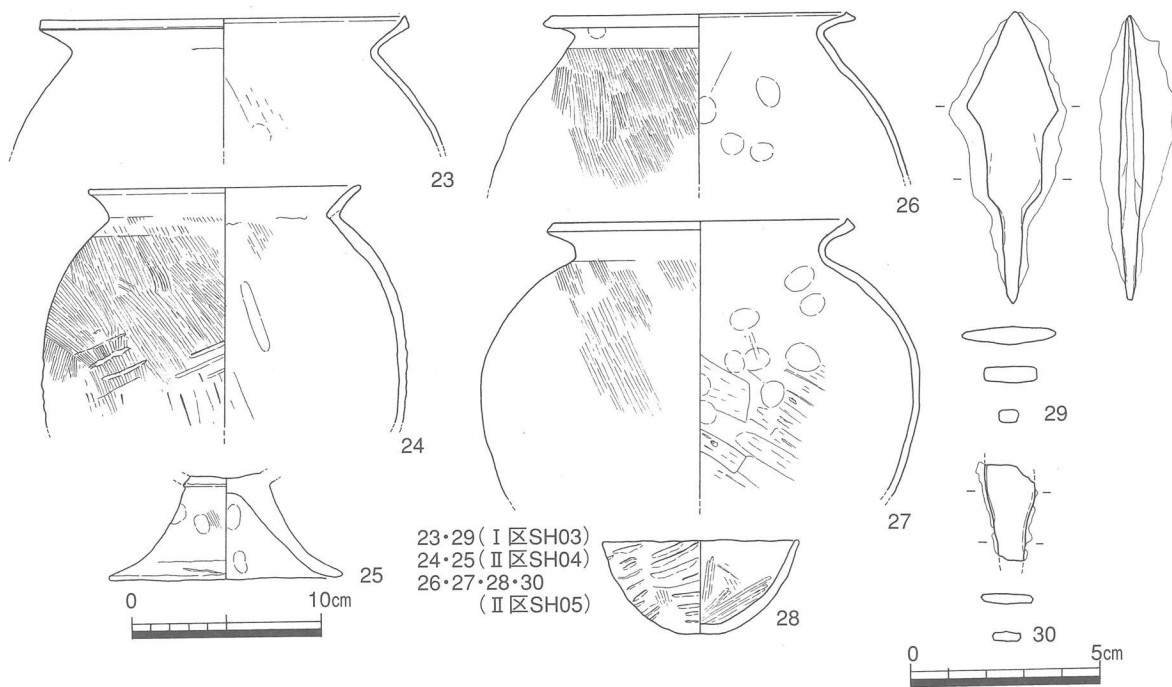
家屋であると考えられる。炭化材は部分的に放射状に認められ、屋根材の垂木がそのまま焼け落ちたものと考えられる。中央付近では炉が検出され、主柱穴はおおむね方形に4穴検出できた。床面上からは弥生土器甕、壺、鉢などが出土した。竪穴住居の時期は弥生時代後期後半と考えられる。

17は甕。18は鉢。19は小型丸底壺。

Ⅱ区SH08（第9図） Ⅱ区南西部で検出した竪穴住居である。南部・西部は調査区外へ延びる。この竪穴住居の南側は古川の氾濫源にあたり、微高地の縁辺部に立地する。形態は隅丸方形又は円形と考え



第9図 Ⅱ区SH08・09 出土遺物（1/4）



第10図 I区SH03 Ⅱ区SH04・05 出土遺物（1/4, 1/2）

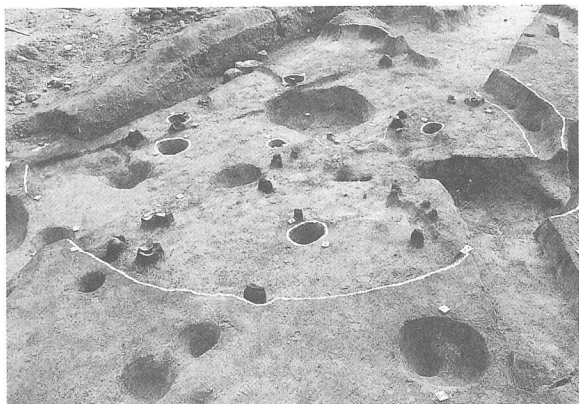


写真5 Ⅱ区SH02 土器出土状況（北西から）

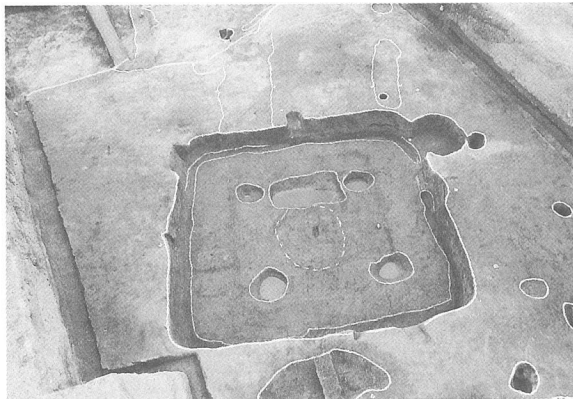


写真6 Ⅱ区SH03（北から）

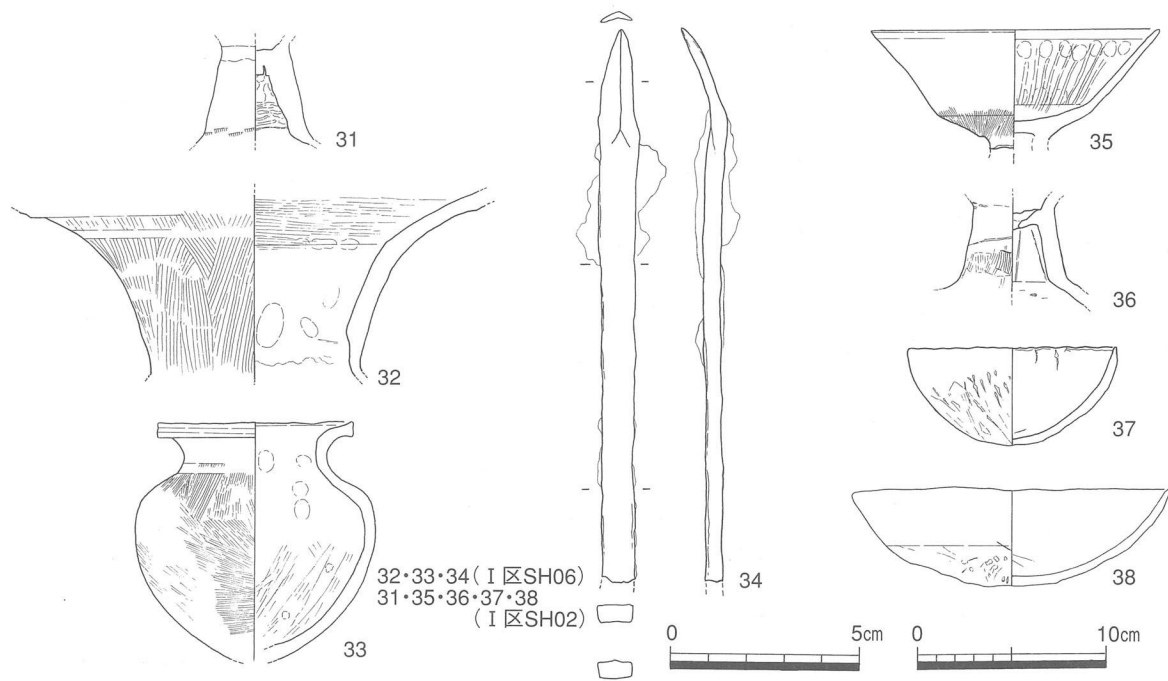
られ、炉を中心とすれば、1辺または直径がおおむね6.4mに復元できる。深さは25cmを測る。柱穴は6穴を確認した。主柱穴は方形に配したと考えられ、2穴を確認した。その内側には炉を検出した。壁溝は検出できなかった。この竪穴住居はSH05に切られる。床面上からは弥生土器甕、高坏などが出土した。時期は弥生時代終末期～古墳時代初頭と考えられる。

20は甕。外面はハケで調整する。21は高坏。

II区SH09(第9図) SH08の北側で検出した竪穴住居である。大部分は調査区外へ延びるため、全体の規模・形状は不明である。深さは70cmを測る。検出部分がわずかのため、床面上ではピットが1穴検出できたのみである。壁溝は確認できなかった。床面上からは弥生土器鉢などが折り重なって出土した。この竪穴住居はSH04に切られる。時期は弥生時代後期後半～終末期と考えられる。

22は台付鉢。脚部に透かし孔をもつ。脚部の下部は欠損する。

I区SH03(第10図) I区北部で検出した竪穴住居である。方形で1辺5.5m、深さは60cmで、主軸方位はN8°Eである。四周には壁溝を巡らせ、ベッド状遺構を持つ。主柱穴は4穴で方形に巡らせる。中央には炉と、その南側には長方形の土坑を配する。床面上には、わずかに炭化材が残されており、焼



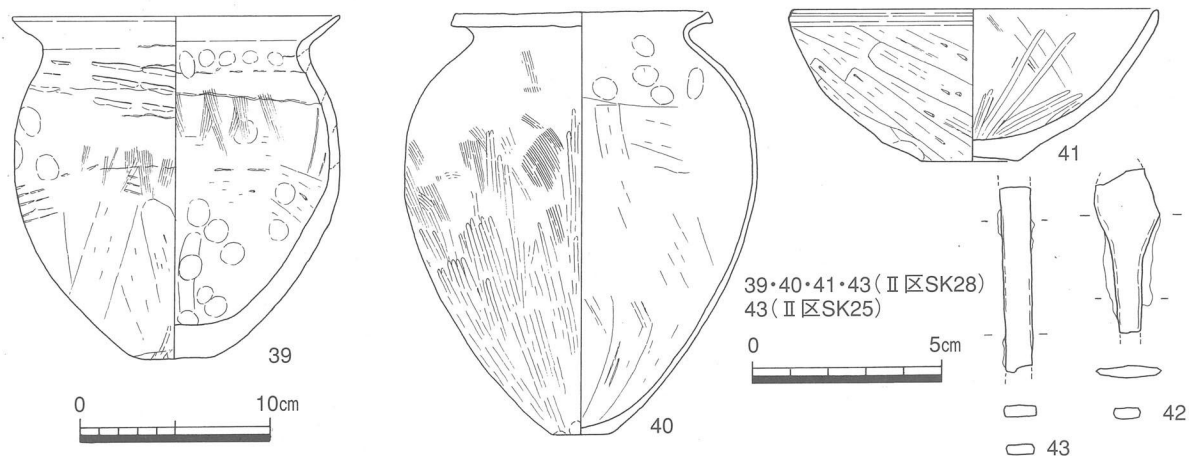
第11図 I区SH06・SH02 出土遺物(1/4, 1/2)



写真7 II区SH05 炉内土器出土状況(東から)



写真8 I区SH02(西から)



第12図 II区SK25, SK28 出土遺物 (1/4, 1/2)



写真9 II区SK28 土器出土状況 (北から)



写真10 II区SH01・03・07・SB01 (西から)

失家屋であった可能性もある。床面上からは甕、鉢などが出土した。時期は古墳時代初頭と考えられる。

23は甕。磨滅が著しい。29は鉄鏃。定角式のもの。錆が著しい。

II区SH04 (第10図) SH09を切る位置で検出した方形の竪穴住居である。やや小型の竪穴住居で、1辺3.65m、深さ13cmで、主軸方位は真北である。四周に壁溝を巡らせ、4隅に主柱穴を検出した。中央付近には焼土や炭化物の広がり認められた。時期は弥生時代終末期と考えられる。

24は甕。25は高坏脚部。

II区SH05 (第10図) SH08の南側で検出した方形の竪穴住居である。1辺4.9m、深さ20cmで、主軸方位はおおむねSH04と同じN2°Wである。床面からは炭化材が出土し、焼失家屋と考えられる。主柱穴は方形に配され、柱穴は9穴検出した。中央付近では炉を検出した。炉の内部および床面上からは弥生土器甕、鉢などとともに鉄鏃が出土した。時期は弥生時代終末期～古墳時代初頭と考えられる。

26・27は甕。ともに外面はハケで調整し、内面はヘラ削りする。28は小型鉢。30は鉄鏃。柳葉式。

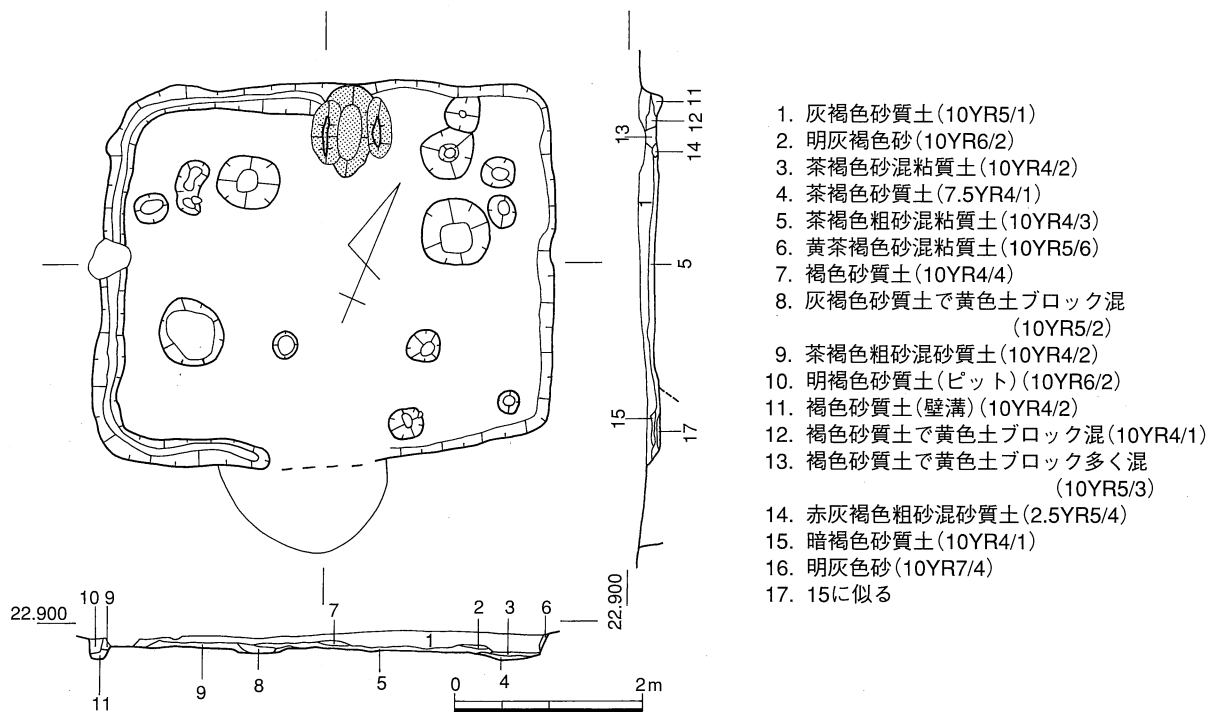
I区SH01 I区東部で検出した竪穴住居である。東半部は調査区外へ延びる。1辺6.2m、深さは15cmで、主軸方位はN19°Wである。柱穴は12穴検出したが、主柱穴は確定していない。壁溝は検出できなかった。床面上からは土師器高坏などが出土した。時期は古墳時代初頭と考えられる。

I区SH06 (第11図) SH04・05の西側に接して検出した。大部分は西側の調査区外へ延びており、全体の規模・形状は不明であるが、おそらく隅丸方形を呈するものであろう。深さは40cmを測る。壁溝は確認できず、柱穴を1穴検出した。この柱穴からは土師器壺の口縁部(32)が出土した。その他、床面

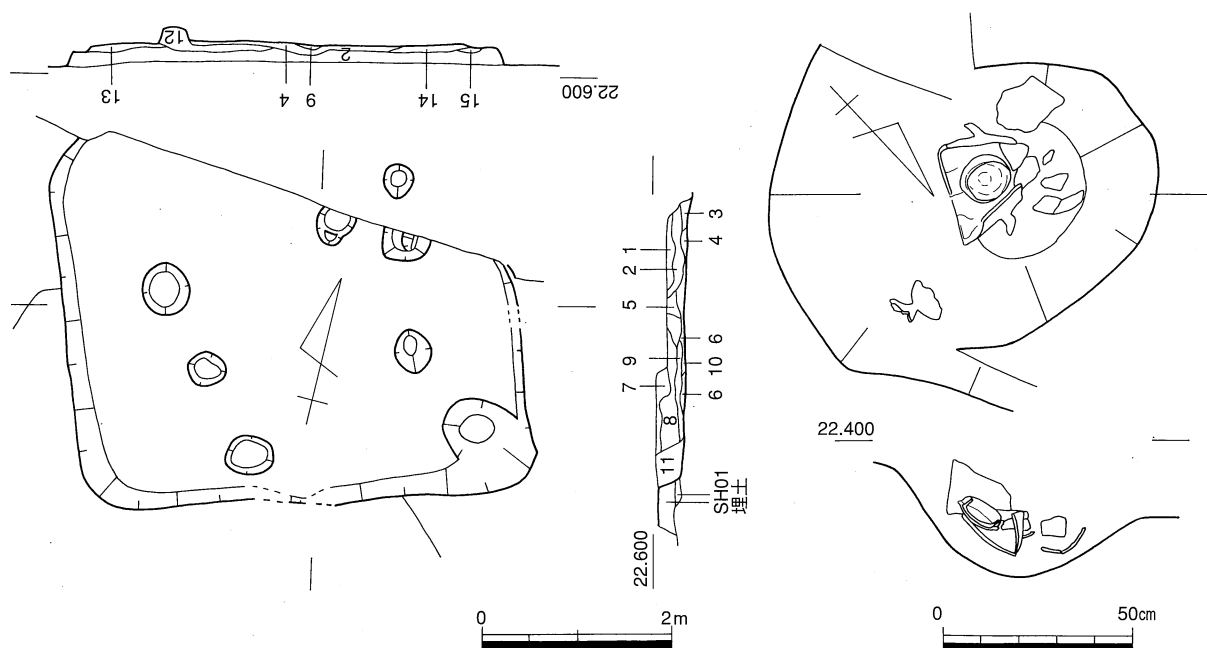
上からは小型の壺、埋土中からは鉋が出土した。

32は壺口縁部。口縁端部は欠損する。胎土中に角閃石を含む。下川津B類土器である。34は鉋。下部は欠損する。刃の部分は鑄が入り、片側は使用により刃が磨り減っている。

I区SH02 (第11図) SH01の南西部に接して検出した方形の竪穴住居である。1辺4.9m、深さ25



第13図 II区SH03 平・断面図(1/80)



- | | | |
|-----------------------|------------------------|--------------------------|
| 1. 茶褐色粗砂混砂質土(10YR3/3) | 6. 褐灰色砂(2.5Y6/2) | 11. 灰褐色粗砂混砂質土(10YR4/2) |
| 2. 茶褐色砂質土(10YR3/3) | 7. 暗灰褐色粗砂混砂質土(2.5Y4/2) | 12. 灰褐色砂(2.5Y4/1) |
| 3. 暗褐色砂質土(10YR3/1) | 8. 暗灰褐色粗砂混砂質土(2.5Y3/2) | 13. 褐色砂(2.5Y5/3) |
| 4. 黄褐色砂混粘質土(10YR6/8) | 9. 暗灰色砂混粘土(10YR3/1) | 14. 茶褐色粗砂混弱粘質土(10YR3/3) |
| 5. 褐色粗砂(10YR5/3) | 10. 暗灰色砂(N3/2) | 15. 黄茶褐色粗砂混弱粘質土(10YR4/6) |

第14図 II区SH07 平・断面図(1/80), 土坑内土器出土状況(1/20)

cmで、主軸方位は真北である。中央付近ではやや広めの範囲で炭化物の広がりが見られた。住居の西側と東側でやや幅広の落ち込みが検出されたが、壁溝として認められるかどうかは検討を要する。柱穴は炭化物の広がり東側と西側で小規模のものを確認した。床面上から土師器高杯、鉢が出土した。時期は古墳時代前期と考えられる。

31・35・36は高杯。35は内面にヘラミガキ、外面にはハケを施す。37・38は鉢。いずれも外面に粗いヘラ削りをするだけで、クラックを明瞭に残す。

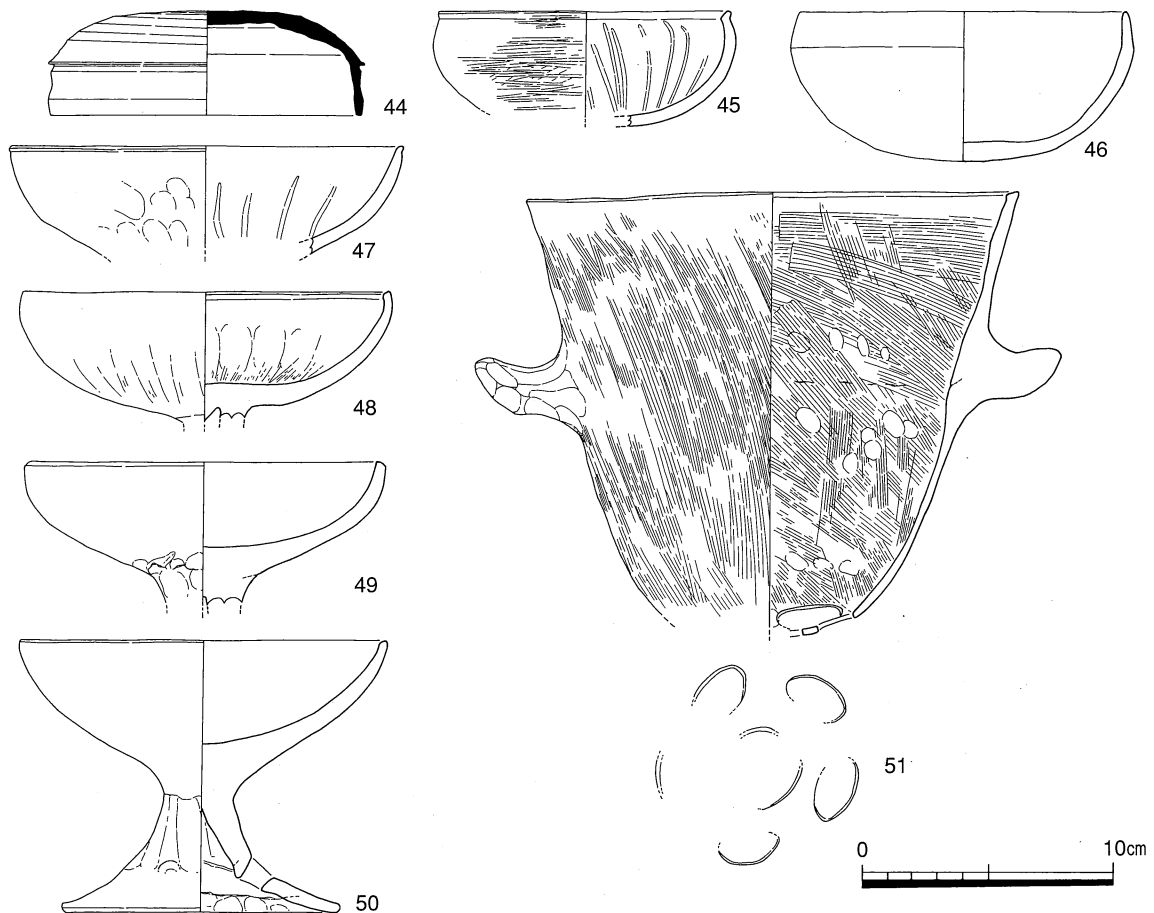
Ⅱ区SK25・27・28（第12図） SK28はⅡ区SH02を切り込む円形の土坑である。直径1.5m、深さ70cm程度で断面形は逆台形に近く、埋土は暗灰褐色～暗褐色砂質土である。埋土中からは弥生土器甕・壺・鉢などが多量に出土した。また、SK28の北西約3mの位置では、直径1.3m、深さ30cm、断面逆台形で暗褐色～暗褐色砂質土の埋土を持ち、多量の土器が出土したSK27を検出している。ともにに廃棄土坑であったと考えられ、時期は弥生時代終末期と考えられる。

39～42はSK28の出土遺物である。39・40は甕。41は鉢。42は鉄鏃。柳葉式。

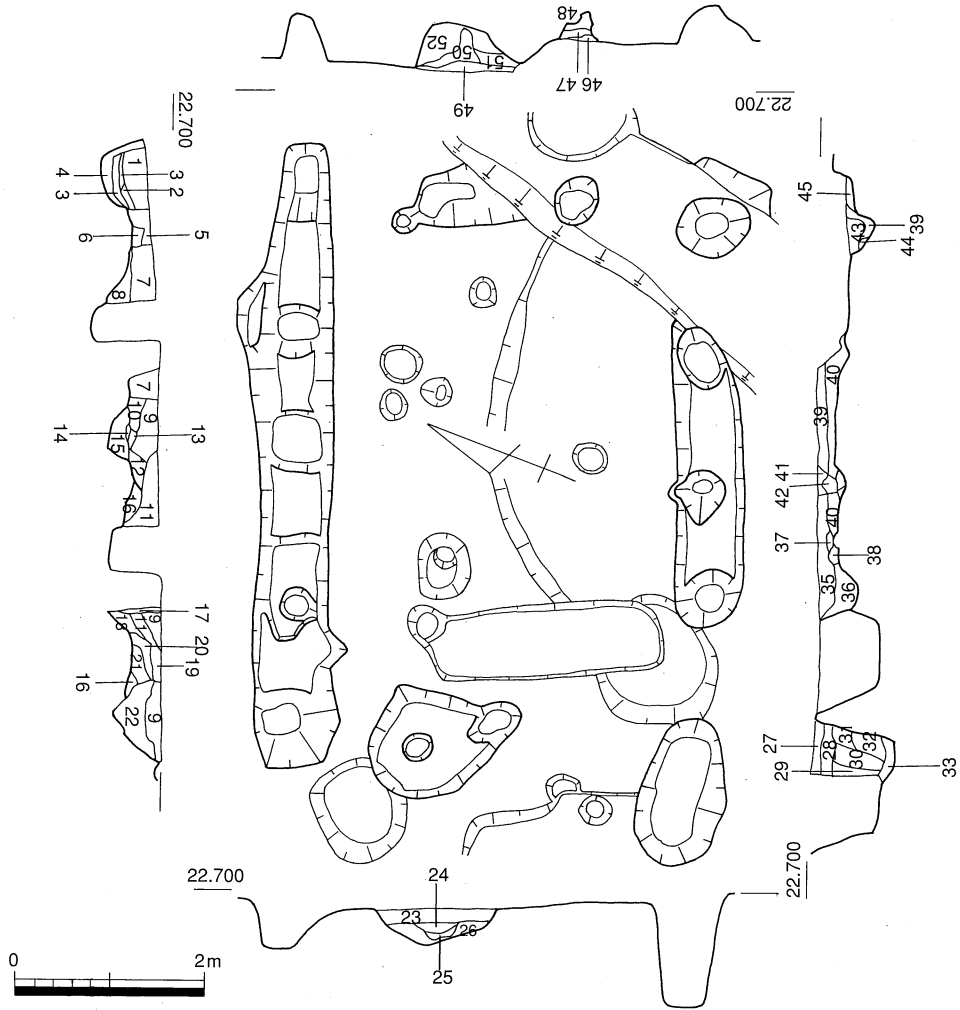
SK25はⅡ区南東部で検出した土坑である。長方形の土坑で、北西端に方形の土坑が取り付くような形状であるが、明確な切り合い関係は認められなかった。長さ5.5m、幅1m、深さ35cm、埋土は黄褐色～灰褐色砂質土、性格は不明である。

3. 古墳時代中期～後期の遺構・遺物

この時期の遺構としては竪穴住居2棟と掘立柱建物1棟が挙げられる。いずれもⅡ区北部付近で検出



第15図 Ⅱ区SH07 出土遺物 (1/3)



- | | |
|--|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 暗褐色粗砂混砂質土(2.5Y3/1) 2. 褐色粗砂混砂質土(10YR4/3) 3. 暗灰褐色粘土混砂質土(10YR3/1) 4. 暗褐色砂質土(2.5Y3/1) 5. 暗灰褐色砂質土(10YR3/1) 6. 暗褐色砂質土(10YR3/2) 7. 茶褐色砂質土(10YR4/2) 8. 灰褐色粗砂混砂質土(10YR5/1) 9. 灰褐色砂質土(10YR3/2)(よく締まる) 10. 褐色砂質土(10YR4/2) 11. 暗灰褐色粗砂混粘質土(10YR3/1) 12. 黄褐色粗砂混砂質土(10YR5/4) 13. 12で黄色土ブロック混 14. 灰褐色砂質土(10YR4/1) 15. 明褐色砂質土(10YR5/2) 16. 15に似る 17. 暗褐色粗砂混粘質土(2.5Y3/1) 18. 暗灰褐色砂質土(10YR3/1) 19. 灰褐色粗砂混砂質土(10YR4/2) 20. 褐色砂質土(10YR4/2) 21. 褐色砂質土(10YR4/1) 22. 10で黄色土ブロック混 23. 褐色粗砂混砂質土(10YR4/2) 24. 褐色砂質土(10YR4/2) 25. 明褐色砂質土(10YR5/2) 26. 明黄褐色砂(10YR7/4) | <ol style="list-style-type: none"> 27. 明褐色粗砂混砂質土(10YR4/2) 28. 27で黄色土混 29. 暗褐色砂質土(2.5Y3/1) 30. 灰褐色砂質土(5Y4/1) 31. 茶褐色砂質土(濁りあり)(10YR4/2) 32. 暗茶褐色砂質土(濁りあり)(10YR3/1) 33. 明褐色砂質土(2.5Y5/1) 34. 土杭埋土 35. 褐色粗砂混砂質土(10YR5/3) 36. 褐色砂質土(10YR3/2) 37. 明褐色砂(2.5Y8/3) 38. 褐色砂(2.5Y7/3) 39. 茶褐色粗砂混砂質土(10YR3/5) 40. 暗褐色粗砂混弱粘質土(2.5Y3/2)
(ベースブロック混)(10YR3/2) 41. 茶褐色粗砂混砂質土(10YR4/2) 42. 暗褐色粗砂混砂質土 43. 黒褐色砂質土(2.5Y3/1) 44. 灰褐色砂質土(ベースブロック混)(5Y4/1) 45. 褐色砂質土(ベースブロック混)(2.5Y4/1) 46. 褐色砂質土(10YR4/1) 47. 明灰褐色砂(10YR5/1) 48. 暗褐色粗砂混砂質土(10YR3/2) 49. 灰褐色粗砂混砂質土(2.5Y4/2) 50. 暗灰色砂質土(粗砂混)(5Y3/1) 51. 明黄褐色砂(褐色土混)(2.5Y7/4) 52. 暗灰色砂混粘質土(7.5Y3/1) |
|--|--|

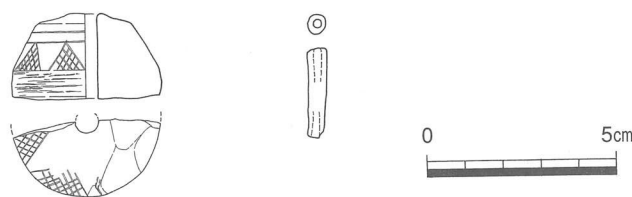
第16図 II区SB01 平・断面図(1/80)

している。これまでの原間遺跡の調査ではこの時期の古墳は確認されていたものの、集落は検出されおらず、丘陵地の古墳群との関わりが想定できる貴重な成果となった。

Ⅱ区SH03 (第13図) Ⅱ区北部で検出した竪穴住居である。方形で1辺4.75m、深さ20cm、主軸方位はN22°Wである。壁溝は西側と北・南側の西半で確認できたものの、東側と北・南側の東半では検出できなかった。支柱穴は方形に巡る4穴と考えられる。竈は住居の北側の中央付近で検出した。壁体は下部が遺存していただけであったが、焚き口部分の赤化は明瞭であった。天井はおそらく崩れたものと思われ、内部に焼土が残されていた。竈の内部に粗製の土師器碗が残されていたが、支脚などはなかった。竪穴住居の埋土中からは良好な土器は残されていなかったが、須恵器甕片、杯蓋の口縁部片が残されていた。

Ⅱ区SH07 (第14・15図) Ⅱ区で、Ⅰ区との境付近で検出した竪穴住居である。北部では水田高低差による削平を受けているものの、平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長軸4.78m、短軸は推定4.05m、検出面からの深さは18cmを測る。主軸方位はN21.5°Wである。北辺部分が削平を受けているために竈の有無は確認できないが、中央部に炉の痕跡が確認されないこと、南東コーナー部で検出した土坑内から甑が出土していることから、おそらく北辺部分に竈を持っていたものと推定できる。支柱穴は4穴と考えられ、そのうち3穴を検出している。床面直上から土師器碗・高坏が、土坑内からは須恵器杯蓋、土師器甑が出土した。床面直上の遺物はいずれも竪穴住居内周の壁際に想定される場所で出土している。時期はTK23併行期、5世紀末頃と考えられる。

44は須恵器杯蓋。天井部と体部の境には鋭く突出した稜線を持つ。口縁端部は四角くする。天井部外面には5~10mm程度のヘラ削りをていねいに施し、天井部に占める範囲も広い。このヘラ削りは中心がずれており、丁寧の中にも粗略化の傾向が認められる。45・46は土師器碗。45は体部外面に横方向のヘラ削りの後、横方向のヘラミガキが施され、口縁部外面にも横方向のナデの後ヘラミガキが施される。内面には横ナデの後内定面から口縁部へ放射状のヘラミガキが粗く施される。46はやや大振り、ヘラミガキは行わない。47~50は高坏。いずれも杯部は椀形で、かなり器高の浅いものや、体部が直線的になるものがある。51は甑。口縁部が両側の把手方向に広い楕円形状を呈している。底部は丸く収め、中



第17図 土墳墓等出土遺物 (1/2)

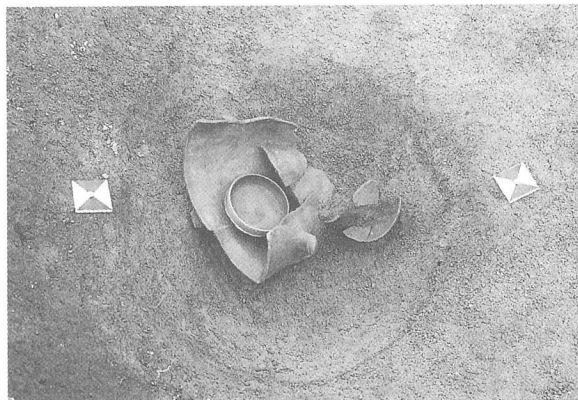


写真11 Ⅱ区SH07 内土坑土器出土状況 (西から)



写真12 Ⅱ区SB01 (西から)

心部分に隅丸方形または円形の透かしをいれ、その周囲に楕円形状の5つの透かしを配する。内外面ともハケで調整する。

Ⅱ区S B01 Ⅱ区東北部、S H02に重複して検出した。桁行6.5m、梁間4.3m、4間×3間で主軸方位はN69° Eである。ただし、西側の柱穴列は不明確で、構造が今ひとつ明らかでない。この掘立柱建物は柱掘方に特徴を持つ。まず桁行の柱掘方は、北側・南側ともまず長方形の土坑状に全体を掘り下げた後、いったん全体を埋め戻し、その後に柱掘方を掘り下げている。土坑状掘方の規模はいずれも幅70～80cm、柱穴のない部分の深さが20～30cm、柱穴部分の深さが50cm程度で、長さは柱穴が5穴並ぶ北側が6.53m、西端の柱穴を欠く南側は4.82mである。東側の梁間においては、おそらく中間の2穴のみを土坑状に掘り下げた後、柱穴を掘り下げし、両端は布堀状にしない。西側の梁間の柱穴列ははっきりしない。西南隅の柱穴があるべき位置には長径1.6m、短径0.9m、深さ90cmの、規模の大きい柱穴がある。この柱穴は長方形の土坑を切っている。また、その一列東側の柱穴列、それは南側の柱穴列が終わっているラインの近くでもあるが、そのライン上のわずかに西側で、長方形の土坑を検出している。これらの土坑は、その幅や深さが、桁行部分の柱穴を伴う土坑とも似通っており、これら土坑や大規模な柱穴は、この掘立柱建物に伴うものとも考えられる。これらの土坑および柱穴からは、紛れ込みと思われる弥生土器の小片とともに、須恵器甕片、杯片などが出土した。

土壙墓群（第17図） I区中央部～Ⅱ区中央部付近で検出した。平成11年度の調査でも古墳時代後期の土壙墓群を検出しており、それらに連続するものと考えられる。大雑把に分けると、I区S H04～06の南側に、尾根線に直交する位置に2基、Ⅱ区S H03の南側に、尾根線に直交する方向に4基、Ⅱ区S H04と重なる位置で調査区に平行する方向に2基、Ⅱ区S H01に重複する位置で、調査区に直交する方向に3基検出している。I区のものはいずれも長さ2.7m、幅1m、深さ30～50cmでしっかりした掘方も持つ。Ⅱ区のもは長さ2～2.5m、幅0.9～1.1m、深さは10～15cm程度で、遺構の遺存状態は悪い。木棺痕跡は、Ⅱ区S H01を切る位置で検出した1基を除いて検出できなかった。土壙墓の埋土は水洗選別を行ってみたが、骨や玉類などは検出できなかった。土壙墓の中の1基からは6世紀後半頃の須恵器杯身片が出土した。このことと昨年度の調査の成果を考えあわせれば、土壙墓群の時期はおおむね6世紀後半頃と考えられるであろう。なお、Ⅱ区S K04からは碧玉製の管玉が出土した。

5. その他

その他、今回の調査では掘立柱建物、方形または長方形の土坑、焼けた痕跡のある土坑などを検出した。掘立柱建物はI区S H03の北側とⅡ区S H03と04にはさまれる位置で検出し、I区S H02付近でも掘立柱建物が建つ可能性がある。これらの掘立柱建物の時期はまだ特定できず、弥生時代後期後半～古墳時代前期にかけての集落構成を明らかにするうえからも、今後の課題として残った。

土坑のうちで、長方形または方形を呈し、遺構の肩が直線的に上がり、底が平らであるものが数基検出された。これらは土壙墓よりも平面規模が大きく、異なった機能が考えられよう。また、Ⅱ区S H03に切られる位置で、円形の土坑を検出した。この土坑は、遺構の側面の一部が焼けて赤変しており、底付近では炭化物が出土した。鍛冶に関連する遺構の可能性も考え、底付近の土を持ち帰り、金属片の抽出を試みたが、なにも抽出できなかった。性格は不明である。

6. まとめ

今年度の調査では弥生時代後期後半～古墳時代の集落と古墳時代後期の土壙墓群を検出した。弥生時代後期後半～古墳時代初頭の集落の様子はこれまでの原間遺跡の調査の結果、2つの微高地上にそれぞれ

れ直径約60mの範囲に竪穴住居・掘立柱建物・土壌墓の集落の小単位が形成されていることがわかってきた。今回の調査区は微高地のほぼ中心部分に位置し、弥生時代後期後半～古墳時代初頭までで合計14棟の竪穴住居を検出している。この場所で連続と小単位を形成していたのであろう。今後はこれらの時期と同時併存した掘立柱建物を抽出し、集落の構成を明らかにする必要がある。また、これらの竪穴住居からは鉄鏃や鉈など数多くの鉄器が出土した。その中には大型の鉈などもあり、集落の性格を考える上で重要な鍵となろう。

今回の調査では、Ⅱ区で古墳時代中期の竪穴住居SH07を検出した。確実にこの時期のものはこれ1棟だけであるが、これまで丘陵地に築造された古墳群と重なる時期の住居は検出されておらず、古墳群の主を考える上で重要な手がかりがえられた。この住居よりわずかに古いのが、原間6号墳からは渡来人との関連が強かったと考えられる遺物が出土しており、今回調査した原間遺跡もそのような観点からも考えていく必要がある。

遺物番号	器種	遺構名	胎土	色調	調整	その他
1	弥 甕	I区SH05	1~2mmの長石・石英	黄橙(10YR)	外面:タタキのちハケ目・ケズリ 内面:ケズリ	
2	弥 壺	I区SH05	緻密・石英・結晶片岩	にぶい黄橙(10YR7/4)	外面:ナデ 内面:指押え	東阿波型
7	弥 甕	I区SH07	1~2mmの長石・石英・くさり礫や多い	橙(5YR7/8)	外面:タタキ 内面:ヨコナデ・マメツ	
8	弥 鉢	I区SH07	1~3mmの長石・石英・くさり礫含む	淡黄(2.5Y8/3)	外面:タタキ 内面:ナデ	
9	弥 鉢	I区SH07	1~2mmの砂粒多い、角閃石・雲母含む	橙(5YR6/8)	外面:ナデ・ヘラ削り 内面:ナデ	
10	弥 壺	Ⅱ区SH01	1~2mmの長石・石英くさり礫含む	浅黄橙(7.5YR8/6)	外面:ヘラミガキ 内面:ナデ	
11	弥 壺	Ⅱ区SH01	1~2mmの長石含む	浅黄橙(10YR8/4)	外面:ハケ・ナデ 内面:ナデ・指押え	
12	弥 壺	Ⅱ区SH01	1mm程度の長石・金雲母含む	橙(5YR6/8)	外面:タテハケ 内面:ナデのち指押さえ	
13	弥 高杯	Ⅱ区SH01	1mmの長石・石英含む	黄橙(7.5YR7/8)	外面:タタキのちミガキ	
18	弥 鉢	Ⅱ区SH02	1~5mmの長石・石英粒含む	明赤褐(2.5YR5/6)	内面:ハケのちナデ 外面:ハケ	
19	弥 小型丸底壺	Ⅱ区SH02	0.5mmの砂粒含む・5mmの石英あり	浅黄橙(10YR8/4)	外面:ヘラミガキ 内面:ナデ?	
20	弥 甕	Ⅱ区SH08	4~5mmの長石・石英を多く含む	橙(5YR7/6)	外面:ハケ・板ナデ 内面:ヘラ削り	
21	弥 高杯	Ⅱ区SH08	1~2mmの長石・石英	にぶい橙(7.5YR7/4)	外面:ヘラミガキ 内面:ハケ	
22	弥 台付鉢	Ⅱ区SH09	2~5mmの長石・石英粒多い	橙(2.5YR7/8)	外面:マメツ 内面:ハケ	脚部の3ヶ所に透かし残存
23	弥 甕	Ⅱ区SH03	1~2mmの長石・石英やや多い	橙(5YR6/8)	外面:マメツ 内面:ケズリ	
24	弥 甕	Ⅱ区SH04	2~3mmの長石・石英・金雲母	橙(7.5YR7/6)	外面:タタキのちハケ・ケズリ 内面:ハケ・ナデ	
25	弥 高杯	Ⅱ区SH04	2~3mmの長石・石英	浅黄橙(10YR8/4)	外面:ハケ 内面:指押え	
26	弥 甕	Ⅱ区SH05	4~8mmの結晶片岩・長石・くさり礫	明黄橙(10YR7/6)	外面:タタキのちハケ 内面:ハケ	
27	弥 甕	Ⅱ区SH05	1~2mmの長石・石英・結晶片岩含む	橙(5YR7/6)	外面:横方向のハケ目 内面:ケズリのち指押さえ又はナデ	
28	弥 鉢	Ⅱ区SH05	1~2mmの石英・長石	にぶい黄橙(10YR7/3)	外面:タタキのちナデ 内面:ヘラミガキ	
31	弥 高杯	I区SH02	1~2mmの石英・長石	浅黄橙(7.5YR8/6)	外面:ハケ 内面:しぼり目	
32	弥 壺	I区SH06	1mmの砂粒・雲母・角閃石を含む	橙(5YR)	外面:ハケ目 内面:横ナデのち指押さえ	B類
35	弥 高杯	I区SH02	1mmの砂粒・雲母	橙(5YR6/6)	外面:ハケ 内面:ヘラミガキ	
36	弥 高杯	I区SH02	1mmの石英・砂粒・くさり礫含む	にぶい橙(5YR7/4)	外面:ハケ 内面:板ナデ	
37	弥 鉢	I区SH02	3mm程度の長石含む	橙(7.5YR7/6) 内面:一部赤(10R5/6)	外面:ケズリ 内面:ナデ	
38	弥 鉢	I区SH02	クサリ礫・長石	浅黄橙(7.5YR8/4)	外面:ケズリのちナデ 内面:ケズリのちナデ	
39	弥 甕	Ⅱ区SK28	長石・石英	淡黄(2.5Y8/3)	外面:タタキのちハケ・ヘラ削り 内面:ハケ・ヘラ削り	
40	弥 甕	Ⅱ区SK28	2mm程度の石英・長石	灰白(10YR8/2) 内面:褐灰(10YR6/1)	外面:ハケ 内面:ヘラ削り	
41	弥 鉢	Ⅱ区SK28	1~2mmの石英・長石	にぶい黄橙(10YR7/4)	外面:ヘラ削り 内面:ナデ	
44	須 杯蓋	Ⅱ区SH07	1mm以下の砂粒を含む	明灰色~灰色	外面:ヘラケズリ 内面:横ナデのち指ケズリ	濃緑色の自然釉
45	土 椀	Ⅱ区SH07	0.5~2mmの石英・長石粒	黄褐色	外面:横方向のヘラケズリのちヘラミガキ 内面:横ナデのちヘラミガキ	
46	土 椀	Ⅱ区SH07	0.5~1mm程度の石英・長石粒	褐色	指ナデ	
47	土 高杯	Ⅱ区SH07	細かい石英・長石粒	茶褐色	放射線状のヘラミガキ	
48	土 高杯	Ⅱ区SH07	0.5~1mm程度の石英・長石粒、細かい金雲母	明褐色	外面:板ナデ 内面:指ナデのち板ナデ	
49	土 高杯	Ⅱ区SH07	0.5~2mm程度の石英・長石粒	淡黄褐色	外面:指ナデ 内面:板ナデ	
50	土 高杯	Ⅱ区SH07	0.5mm以下の細砂粒の石英・長石粒	淡黄褐色	外面:縦方向の板ナデ 内面:粘土紐の接合痕	
51	土 甌	Ⅱ区SH07	0.5~2mmの石英・長石粒	橙	斜め方向のハケ目	

第2表 土器観察表

Ⅲ. 上林遺跡

1. 立地と環境

上林遺跡は高松市上林町に所在する。高松平野南部に位置し、標高約16mを測る。県道中徳三谷高松線改良工事に伴い、平成12、13年の2カ年に渡り、調査を行った。

以下では遺跡付近の歴史的環境について述べる。縄文時代では晩期に属する柱穴群が林・坊城遺跡で検出されている。弥生時代前期にはさこ・長池遺跡、さこ・長池Ⅱ遺跡で水田跡が、中期には松林遺跡、日暮松林遺跡などで竪穴住居跡、掘立柱建物跡が検出されており、生産域、居住域の状況が窺える。弥生時代後期になると空港跡地、日暮松林、宮西・一角などで集落が、空港跡地、林・坊城、日暮松林、凹原で周溝墓、土器棺墓などの墓が確認されている。本概報で報告する上林遺跡、鎌野西遺跡はこの時期に属し、付近で遺跡数が増加した時期に該当する。古墳時代では空港跡地遺跡で複数の集落を検出している。また居石遺跡では旧河道から分岐する溝の取水口で古墳時代前期の小型鏡3面が出土している。古代では本概報で報告する三谷中原遺跡をはじめ、多くの遺跡で条里地割と方向を一致させる溝が見られる。特に松縄下所遺跡では条里地割に乗る2本の溝が幅約2mの間隔を開けて200m以上も見られる。

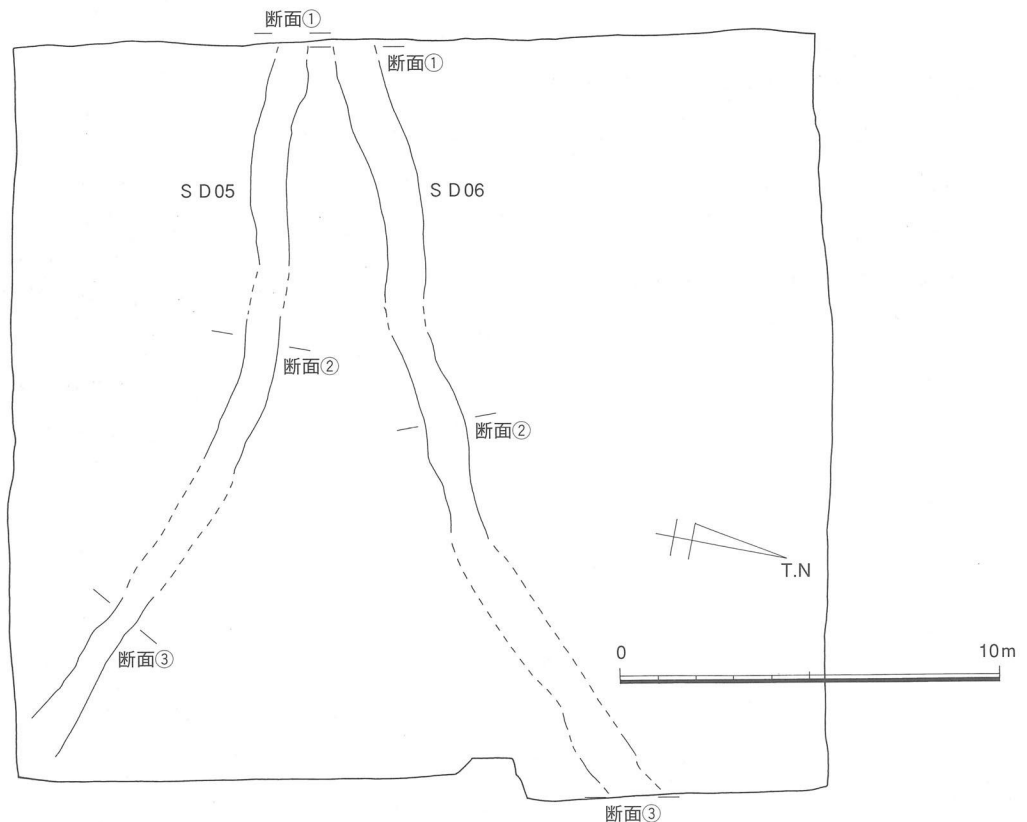


第18図 遺跡位置及び周辺の遺跡 (1/25,000)

また、溝の沿線に並ぶ掘立柱建物も5棟検出されており、道路状遺構とされている。三谷中原遺跡内で検出が期待される古代官道である南海道について考える上でも注目される遺跡である。中世には空港跡地遺跡で居館と付近に展開する集落群が検出されている。これらはやはり条里地割の方向に規制されている。また上林城、鎌野城といった城館が築かれる。

2. 調査の成果

昨年度調査が行われなかったH区について実施し、上林遺跡の調査を終了した。基本層序は宅地に伴う造成土、旧耕作土、旧床土があり、暗褐色粘土の遺構面に至る。B、C、E、F区で見られた中世包含層、近世以降の耕作土は認められず、削平を受けている度合いが大きい。だが、遺構面レベルはD、H区の方がやや高く、微高地であると考えられる。A～C区では遺構面を2面確認したが、H区では1面である。検出された遺構は弥生時代後期を中心としており、土坑、柱穴、溝状遺構などがある。



第19図 SD05・06平面図 (1/200)

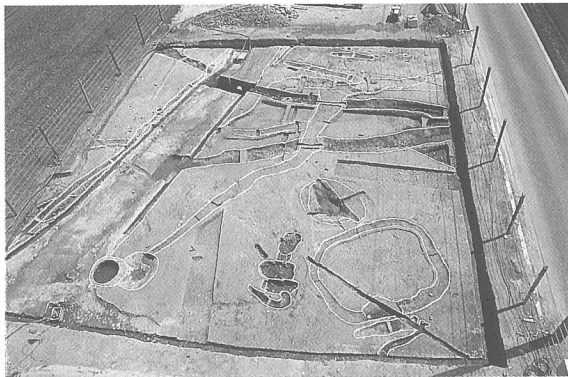


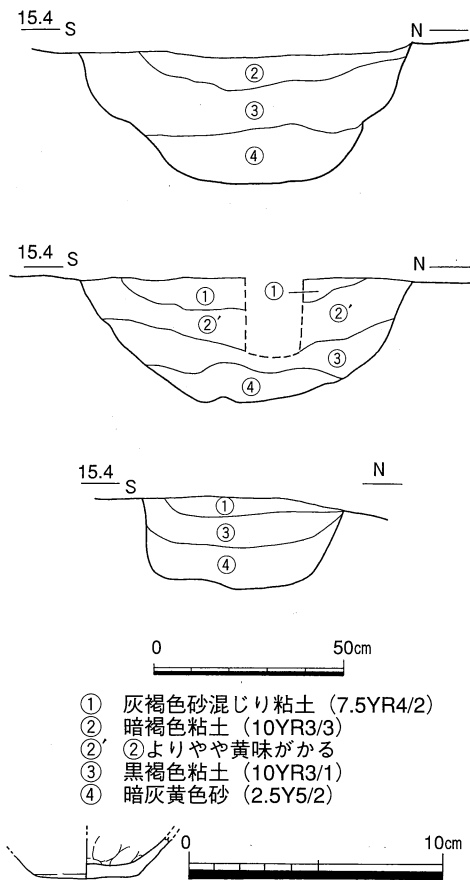
写真13 調査区全景 (北から)



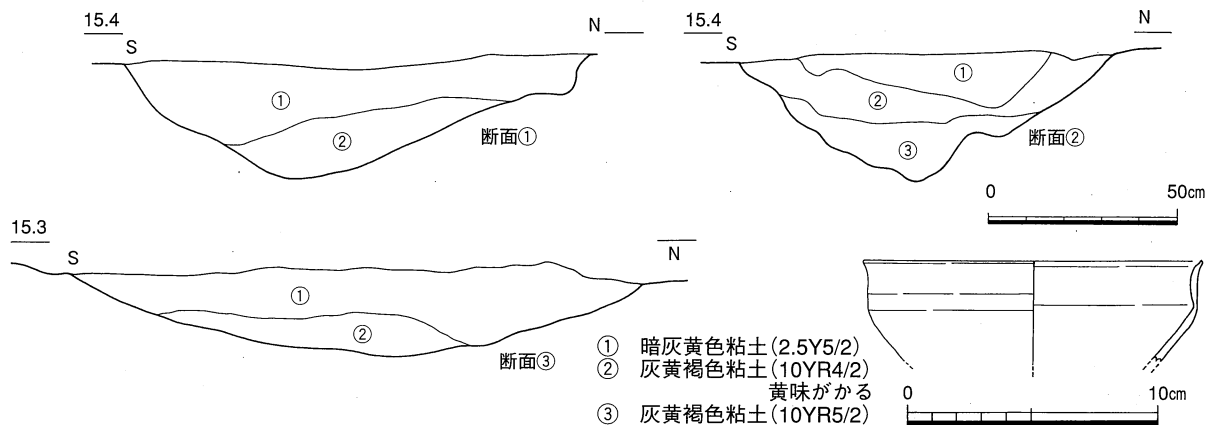
写真14 SK05～08完掘状況 (東から)

S D05 調査区中央部を西から東へ流下する溝状遺構である。規模は検出幅で70~90cm、深さは残りの良いところで約35cmを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は3ないし4層に分かれるが、大きく上層の暗褐色系粘土と下層の暗灰黄色砂に区分できる。下層の埋土は砂であるため少なくとも下層堆積期間中は流水状態にあったことが想定できる。出土遺物は28リットル入りコンテナ1箱弱程度出土している。第19図の土器は下層から出土した壺か、甕の底部である。底径が小さく、丸味を帯びる。弥生後期後半に比定される。上層でも同時期の遺物が出土しており、溝の時期をこの時期に求められる。

S D06 調査区南部を西から南東へ流下する溝状遺構である。S D05とは調査区西端で最も近接し東に行くにつれ、離れる。規模は検出幅で70~120cm、深さは30~40cmを測る。断面形は概ね逆台形を呈する。埋土は2ないし3層に分かれるが、暗褐色系粘土である。出土遺物は28リットル入りコンテナで半分弱出土している。第20図の土器は下川津B類の大型鉢である。弥生時代後期後半に比定される。

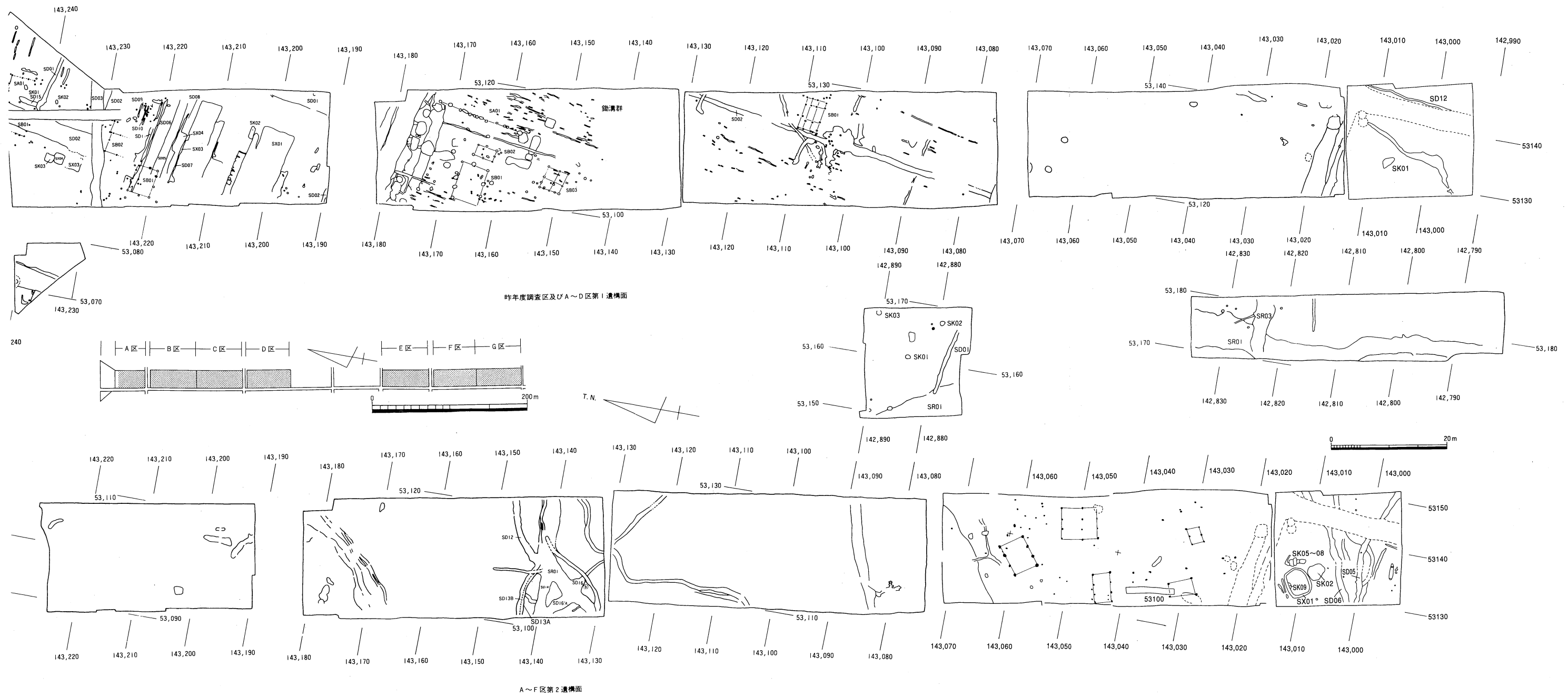


第20図 S D05断面(1/20)及び出土遺物(1/3)



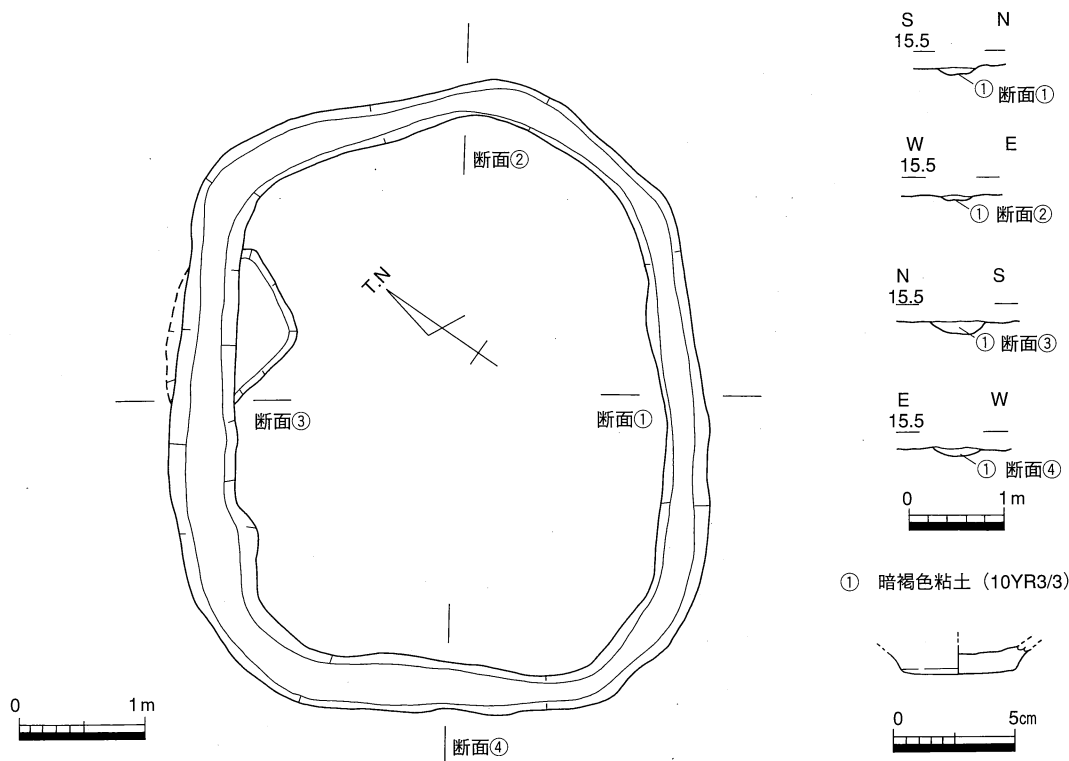
第21図 S D06断面図 (1/20) 及び出土遺物 (1/3)

S X01 調査区北西部で検出した性格不明遺構である。溝が方形に巡る。幅30~40cm、深さ5~10cmを測る。この方形プランの規模は溝の部分を含め、南北約4.4m、東西約5mを測る。規模と形状から竪穴住居跡の壁溝である可能性を考え、炉跡、柱穴の検出を目的とした精査を行ったが、確認されなかった。遺物は弥生土器小片がわずかに出土した。第22図の土器は壺か甕の底部である。平底であるが、丸味を帯びている。弥生時代後期後半に位置づけられる。なお、S X01を北側で切るS K09を含め、土坑(S K05~08)が付近にまとまって検出されている。S K02からも後期後半の壺か甕の底部が出土して



第22図 遺構配置図 (S=1/500)

おり、埋土が類似することからS X01とこれらの土坑群は近接した時期に掘削されたと考えられる。



第23図 S X01平・断面図 (1/60・1/80) 及び出土遺物 (1/3)

3. まとめ

昨年度の概報段階でD区西側で弥生後期の集落が存在することを推定していたが、H区のS D05、06から比較的多く土器が出土し、さほど摩滅していないこと、溝が東流することからやはり西側に集落域がある可能性が高い。だが、もう1つ問題としていたD区で検出した掘立柱建物群（柱穴の1基より後期の土器片がごく少数出土）が弥生後期に位置づけられるか、すなわち集落域を構成する建物群と考えてよいか、については明らかにできなかった。今年度もその確認を課題の1つとして調査を行ったが、竪穴住居壁溝の可能性を持つS X01は検出されたものの、明確な居住遺構は確認されなかった。このためD、H区を集落域に含めて捉える根拠は薄弱である。この問題に関しては遺跡周辺の旧地形の復元と合わせて本報告で再検討したい。

他の時期については埋土より中世と考えられる溝1条（S D12）、土坑1基（S K01）が検出された。溝は坪界に隣接するが、幅30cmと小規模なものである。当該期の遺構は遺跡全体でもA区で1棟掘立柱建物が検出されている他、ほとんど検出されていない。

IV. 鎌野西遺跡

1. 立地と環境

鎌野西遺跡は高松市三谷町鎌野にあり、高松平野南部に所在する。遺跡の西側には小作川、春日川の支流古川が、東側には古川が北流する。また遺跡北東部には由良山、南西部には日山、火山が位置する。周辺地域の歴史的環境は上林遺跡に譲る。

2. 調査の成果

調査対象地は県道中徳三谷高松線の拡幅部分で県道の東側に細長く広がっている。調査は平成13年6月から開始し、9月に終了した。調査対象地は南側をA区、北側をB区と二分して行った。基本層序はA区では耕作土、黒褐色粘土（弥生包含層）、黄褐色粘土の遺構面であり、B区では耕作土、床土の直下で褐灰色粘質土の遺構面となる。A区では包含層が見られるのは地形的に下る北部のSR01付近に限られる。他の部分では耕作土直下で遺構面が現れ、削平を受けている。B区では褐灰色粘質土の下に数層挟んで黄褐色粘土があり、低位部の埋没後弥生時代の遺構が掘削されている。また西端部では現道に平行するように帯状に攪乱が入っており、調査区外に延びる。

A区 検出した遺構は溝状遺構7条、土坑4基、旧河道1条などがある。遺物が出土した遺構が少ないが、SD03、05、06とSR01が弥生後期に比定される。

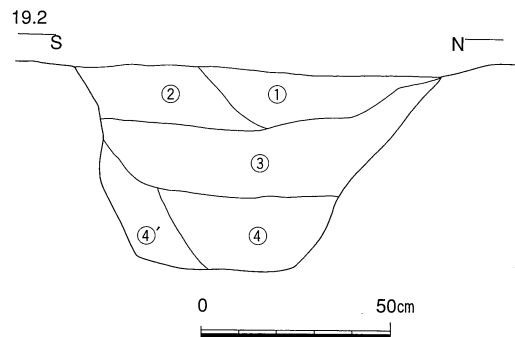
溝状遺構は底場レベルが北、東側に下り、北流ないし東流する。

SD03 調査区中央で検出した直線的に延びる溝状遺構である。幅0.3~1.2m、深さは残りのよいところで約70cmを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色系粘質土および褐灰色系粘質土である。遺物は少量出土した。第23図の土器は壺か、甕の底部であり、丸みを帯びる。弥生時代後期終末頃に属する。

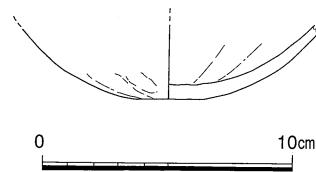
B区 検出した遺構は土坑1基、少数のピット、溝状遺構5条、旧河道1条などがある。出土遺物が極めて少なく、SK01が弥生時代に比定できるのみである。ピットも埋土の類似から弥生時代と考えられるものを含むが、建物は復元できない。溝状遺構、旧河道は北東方向へ流下する。

3. まとめ

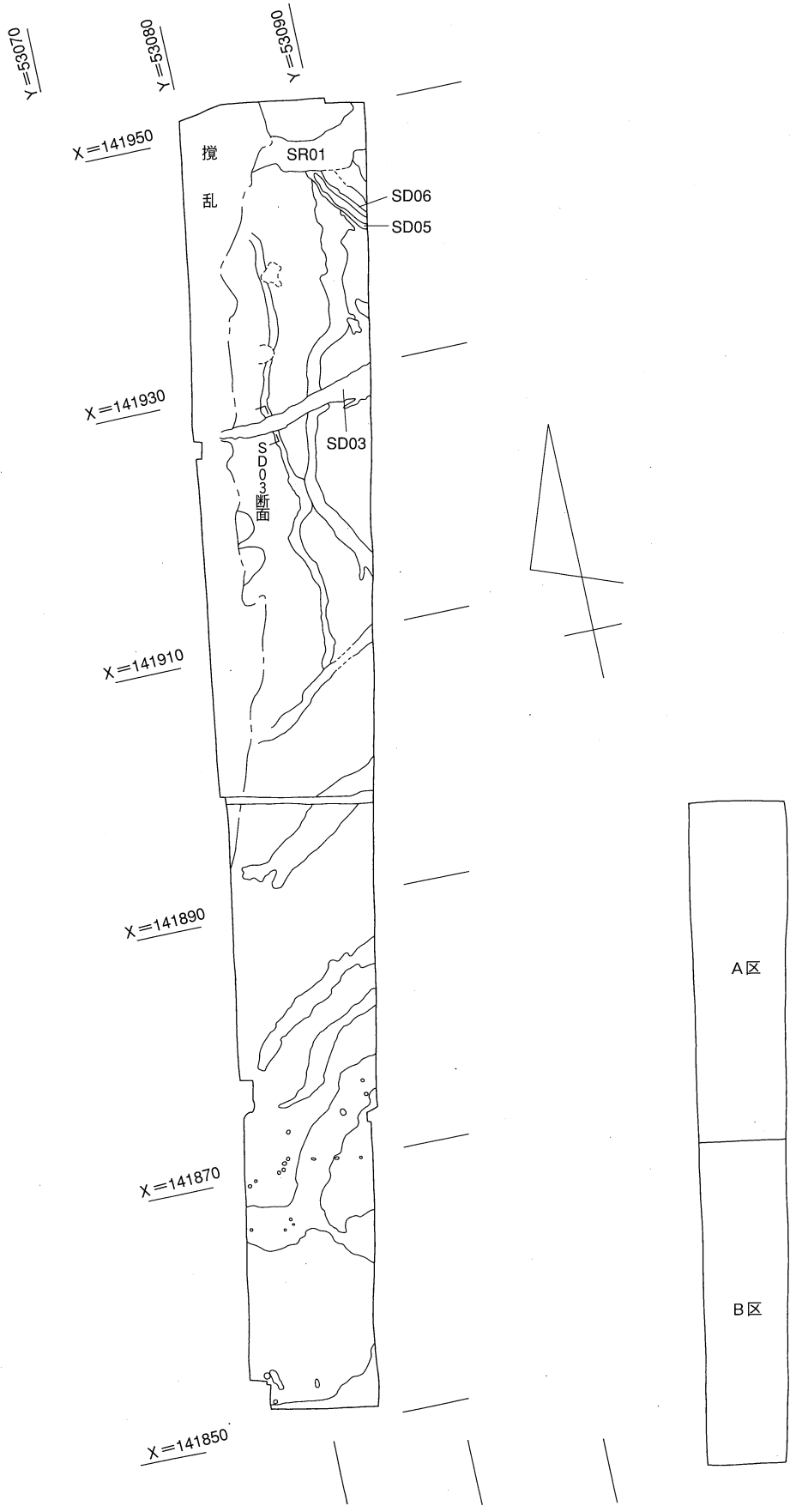
鎌野西遺跡の調査の結果、弥生時代後期の溝状遺構、土坑、旧河道などを検出した。当該期に比定できる遺構は極めて希薄であり、出土遺物も少ない。本来の遺構面がどの程度削平されているか不明であるが、生産域などに利用された可能性を考えておきたい。



- ① 黒褐色粘土 (10YR3/1)
- ② 黒褐色砂利混粘土 (10YR3/1)
- ③ 黒褐色砂混じり粘質土 (2.5Y3/2)
- ④ 黒色砂利混粘土 (10YR2/1)
- ④' 壁面からの崩落土ブロックを含む。



第24図 SD03断面図 (1/20)
及び出土遺物 (1/3)



第25図 遺構配置図 (1/500)

V. 三谷中原遺跡

1. 立地と環境

遺跡は高松市三谷町中原にあり、高松平野南部に所在する。遺跡南西部には上佐山、日山、火山が位置し、西側には小作川、春日川の支流古川が、東側には古川が北流する。調査対象地は小作川など数本の旧河道が形成した河岸段丘の内部に位置し、現在も内外で比高差約1mを測る。

周囲地域の歴史的環境は上林遺跡で述べたとおりであるが、本遺跡は古代の官道である南海道推定地を調査対象地に含む。よってここでは南海道に関する概要を述べる。高松市内の南海道推定ラインについては木田郡三木町白山南麓と高松市六つ目山北肩を結ぶ直線として想定されている。根拠は推定ライン上で東西に帯状になった地割が断続的に確認され、帯地の幅が10m前後を測ることである。この約10mが道路部分の余剰帯とされている。また余剰帯が見られない部分についても推定ラインに接する南北どちらかの坪において南北長が約10m長くなっており、道路部分を含んでいると考えられている。

南海道推定地については高松市教育委員会により上記のような帯地を含む隣接する3地点の発掘調査が行われている（高松市1999）。調査地は高松市三谷町1060番地他であり、三谷中原遺跡から西へ約100mと近接した場所である。地形的には小作川が形成した段丘付近であり、段丘上で2地点（1トレンチ、第3調査区）、内で1地点（2トレンチ）を調査している。成果として段丘に近接した内外1地点ずつ（1、2トレンチ）では道路痕跡とされる幅6mの切り通しを、段丘上のやや離れた部分（第3調査区）では道路補修痕跡とされる地山の窪みに堆積した礫混じり砂層を確認している。遺物は第3調査区の道路関連遺構内から古代の須恵器、土師器がごく少量出土している。

ただ小規模なトレンチ調査であるという制約もあり、道路側溝が見られない、路床に踏み固めによる硬化面、足跡、轍などが確認されない、検出された補修痕跡も明確なものでない、など道路遺構として不明瞭な部分がある。また出土遺物も少ないため存続期間などについても十分把握できていない。このような状況下、南海道に関する新しい調査データを得る機会として三谷中原遺跡の調査が期待された。

参考・引用文献

高松市教育委員会 「讃岐国弘福寺領の調査Ⅱ」（1999）

2. 調査の成果

調査対象地は県道中徳三谷高松線の拡幅部分で県道の東西両側にまたがり、南北に細長く広がっている。今年度の調査は対象地を7区に分け、2,180㎡を行ったが、家屋撤去等の条件によりⅢ区と他の未調査部分を来年度に継続する。地形的には調査対象地全体が段丘崖内部に位置し、南から北へ緩やかに傾斜している。付近は条里型地割が良好に残存しており、前述の通り南海道推定ラインが調査区内に含まれる。よって道路遺構の検出、時期比定と具体的構造の把握、また付近に展開する同時期遺構との関係追求を大きな目的として調査を行った。以下、調査区ごとに概要を述べる。

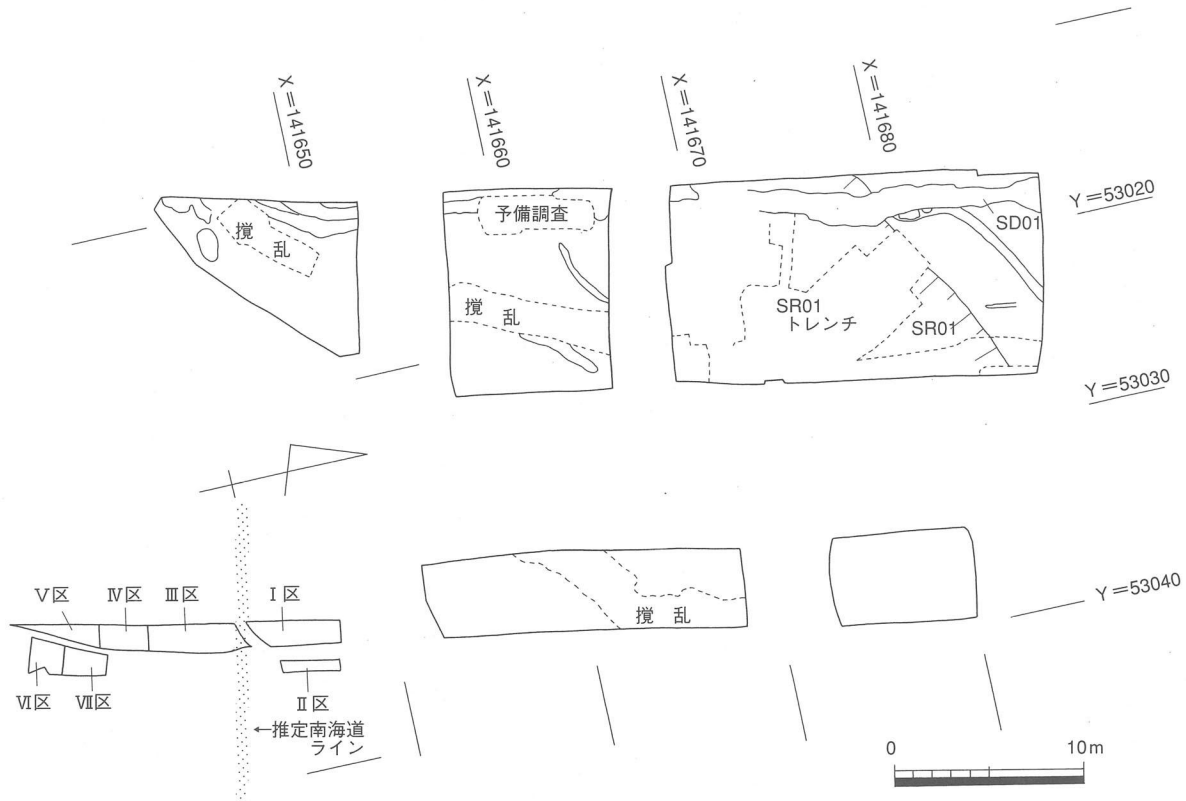
I、II区の概要

I、II区は調査区北端に位置する。基本層序については10~50cm程度の耕作土、床土直下で遺構面が現れる。包含層が見られず、平坦地化していることからある程度削平を受けていると考えられる。また著しく攪乱されている。遺構には旧河道(SR01)、溝数条、土坑などがある。SR01はI区北部以外全面で検出され、調査区外に広がる。最深部で1.5m以上あり、主に細砂~粗砂が堆積している。出土遺物はないが、15世紀代に比定されるI区SD01に切られるためこれ以前の埋没である。その他の遺構については出土遺物が乏しく、細片であるため時期比定に至っていない。



写真15 I区SR01土層断面
(I区西壁南端部、南東から)

本調査区は今年度調査対象地で南海道推定ラインに最も近接しているため道路遺構が存在する可能性を考慮し、その検出に努めた。だが、高松市による南海道推定部調査の際、検出されたような切り通しは見られなかった。また道路遺構の指標となる踏み固められた硬化面、足跡、轍痕跡、補修痕跡、道路側溝といったものも認められなかった。よってSR01が南海道に後出し、これを壊しているのなければ、来年度調査区で確認できる可能性が高い。

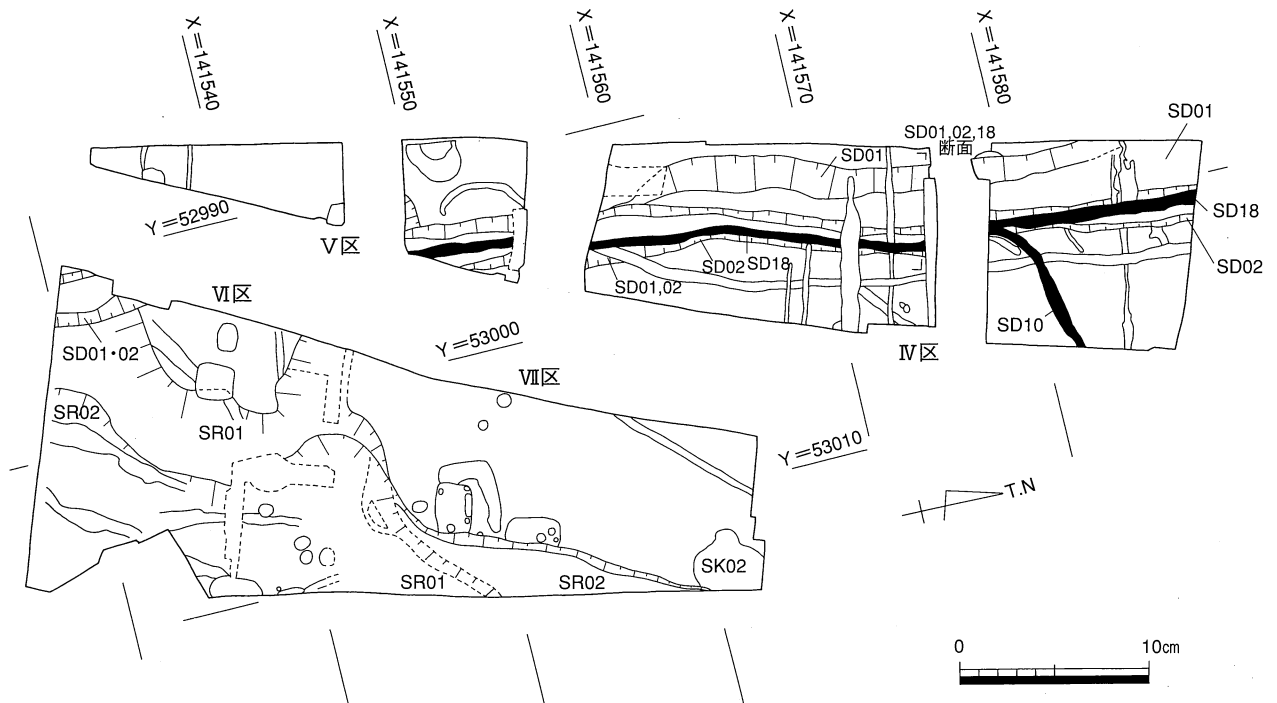


第26図 調査区割図(1/4,000)及びI、II区遺構配置図(1/400)

IV~VI区の概要

IV~VI区は調査区中央西側から南部に位置する。基本層序はVI区では上から耕作土、床土、近世以降

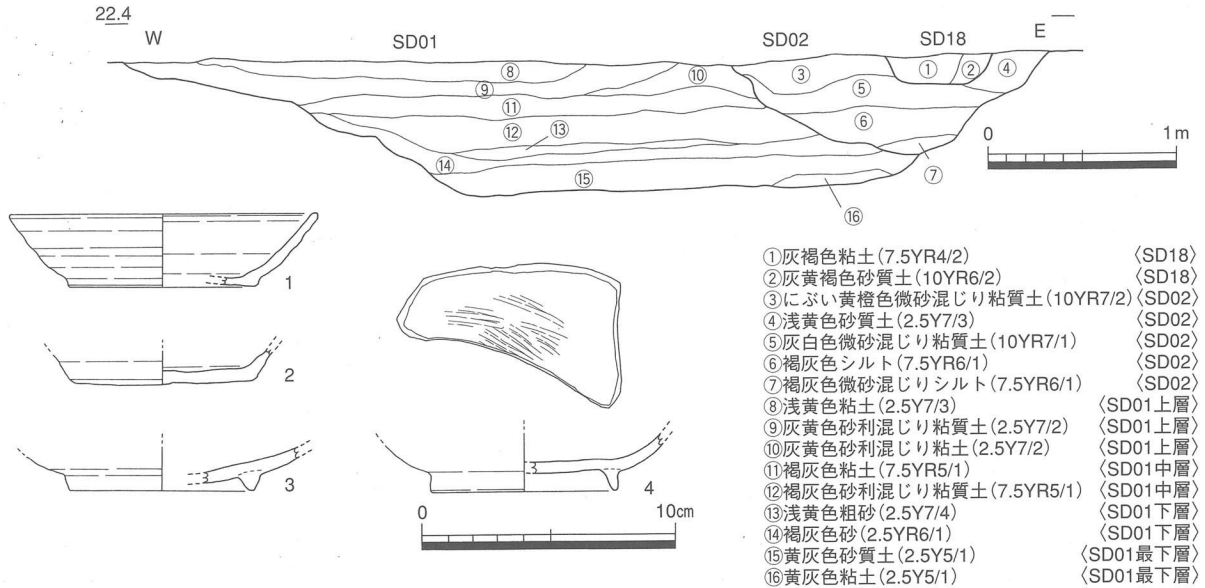
の旧耕作土、灰黄褐色粘土（中世末～近世包含層？）、にぶい黄橙色粘土があり、遺構面ベース土である褐灰色粘質土に至る。なお地形的に高いⅣ、Ⅴ区では近世以降の旧耕作土直下で遺構面ベース土となり、ある程度削平を受けているようである。検出遺構には弥生、古代、近世以降のものがある。どの時期についても遺構は希薄であるが、土坑、溝、旧河道などがある。弥生時代の土坑は散在しているが、古代の土坑はⅥ区北東部にかたまっている。



第27図 Ⅳ～Ⅶ区 遺構配置図 (1/400)

S D01 Ⅳ～Ⅵ区で検出した溝状遺構である。現道などを挟み、南北60mに渡って確認された。現状での条里坪界ラインである現道より約10m西側に位置する。S D02が東側に重複して切っているため正確な規模は不明だが、幅3.5m以上、深さ約70cmを測る。断面形は逆台形を呈する。平面形はⅣ区南部で急激に細くなり、Ⅳ区南端以南では完全にS D02と重複し、下部で深さ約40cmが残存するのみとなる。底面の標高は南端で21.80m、北端で21.35mを測り、レベル差より北流すると考えられる。溝の性格についてはⅠ区でもこの延長上に15世紀の溝（Ⅰ区S D01）を検出していること、規模がかなり大きいことから本来の条里坪界溝であると考えられる。この坪界は高松平野の条里プランで言えば、山田郡六、七条境に位置し、里界でもある。

埋土は最下層～上層の大別4層に区分される。基本的に水平堆積しており、土層断面の観察では再掘削の痕跡は見られない。最下層、下層では砂質土と砂が堆積しており、比較的速い流水状態であったのが、中層、上層では粘質土、粘土が堆積しており、緩やかな流水速度に転じたことが窺える。出土遺物は28リットル入りコンテナ半箱程度出土しているが、小片ばかりである。第27図1、2は須恵器の杯である。1は外に火だすきがかかる。9世紀に位置づけられる。2は底部をヘラ切り後なでている。10世紀に位置づけられる。3、4は黒色土器の碗である。3は11世紀に、4は10世紀に位置づけられる。2、3が最下層より、1、4が下層より出土している。提示していない最下層、下層から出土遺物は9、10世紀代の須恵器が多く、上、中層からも11世紀代以降の遺物は出土していない。以上からS D01の時期であるが、9世紀代の遺物はⅥ、Ⅶ区S R01（9世紀代に比定）を切るための混入である可能性が高い。



第28図 IV区SD01、02、18断面図 (S=1/40) 及びSD01出土遺物 (1/3)

10世紀代の遺物には底にへばりつくようなものが見られるが、11世紀代の土器は3のみであり、底からも浮いていたため10世紀代には開削されており、11世紀代以降に埋没したと考えておきたい。

なおSD01に重複するSD02は幅1.5~2.7m、深さ約50cmを測る。出土遺物は9、10世紀代の須恵器、黒色土器などの細片である。SD01は11世紀以降の埋没が想定されるためSD01を切ることによる混入であると考えられる。SD01の埋没時期より11世紀以降に比定される。廃絶時期は不明だが、下記のSD18の時期より近世までは下らない可能性がある。性格は検出位置、規模よりSD01廃絶後の条里坪界溝であると考えられる。

SD18はSD02に重複し、切っている。また、IV区北部で北東方向にも派生 (SD10) する。時期決定できる遺物は出土していないが、埋土が中世末~近世初頭? 包含層である灰黄褐色粘土と類似することより中世末~近世に比定できる可能性がある。



写真16 IV区SD01完掘状況 (北から)



写真17 V区SD01完掘状況 (北から)

Ⅶ区の概要

土坑・溝・竪穴住居状遺構・旧河道を検出した。旧河道は調査区の南東~東側部分で検出し、全体に調査区外の東側に広がる。従って調査区の大部分は安定した茶褐色系の砂混じり土が展開し、遺構面となっていた。

S K02 調査区の北東隅で検出した土坑で、調査区外に広がるため全体形は不明であるが、不整形であるが方形に近い。検出できた部分で南北3.4m、東西2.5～3.1m、深さは0.4mである。埋土は黒色系の粘土が中心で、土坑の下層を中心に土器が出土した。弥生時代後期中葉と考えられる土器が一括投棄された状態で出土し、壺・甕・高坏などがある。

S R01 調査区の南東隅で検出した旧河道で、南西―北東方向に流れⅦ区から続くものである。検出した部分での最大幅は6.1m、深さは2.3～2.5mである。そこから1mには褐色の砂～砂礫層が幾重も堆積しており、数回に及ぶ流れで攪拌を受けており層位的には不安定である。ここから多量の弥生後期の土器と少量の古墳時代～古代の土器が出土している。土器以外に斎串3本と桃種が出土しているのが注目される。これより上層では弥生時代後期～古代の土器が微量出土したにとどまる。



写真18 Ⅶ区SK02完掘状況（東から）



写真19 Ⅶ区SR01完掘状況（北から）

3. まとめ

今回の調査では弥生、古代、中世の遺構を主に検出した。以下では現時点で想定できる遺跡の評価をまとめておきたい。

弥生時代についてはⅦ区の後期中葉の土坑より一括廃棄された土器群が出土している。また古代のSR01からも多量の弥生後期～布留式の土器が出土している。これらは旧河道の時期から言えば混入であるが、下層に堆積した粗砂層内を中心にコンテナ20箱ほどが出土している。またローリングによる摩滅をあまり受けておらず、移動距離が大きいとは考えにくい。以上のように土坑、旧河道からまとめて土器が出土していること、旧河道出土資料は移動距離が短いと考えられることより付近に当該期の集落が存在したと想定される。

古代では前記のⅤ～Ⅶ区SR01最下層より斎串が出土している。SR01は9世紀には流水している。SR01埋没後、里界溝であるⅣ～Ⅵ区SD01が開削される。開削時期は10世紀と考えられ、南海道の敷設と近接した時期にはこの里界溝が設置されていないと言える。埋没時期は下層より11世紀代の黒色土器碗が出土していることよりこれより下る可能性が高い。なお南海道については道路遺構および付近に展開する集落関係遺構は確認できなかった。

中世では坪界溝であるⅠ区SD01がある。出土遺物からは15世紀に比定される。Ⅳ～Ⅵ区SD02は混入品以外の出土遺物はない。だが11世紀以降に埋没したⅣ～Ⅵ区SD01を切り、中世末～近世に属すると考えられるSD18に切られるのでこの時期に属する可能性が高い。

以上のように調査の大きな目的であった南海道については確認できなかった。だが来年度調査区では推定ラインに乗る部分が調査対象地となるため道路遺構が検出され、実態が明確になることが期待される。

VI. 北野遺跡

1. 立地と環境

遺跡は高松市三谷町字北野4912番地ほかに所在する。調査対象面積は3020m²で、遺構面は上下2面ある。平成13年4月1日より9月30日までの6ヶ月間で調査を実施した。

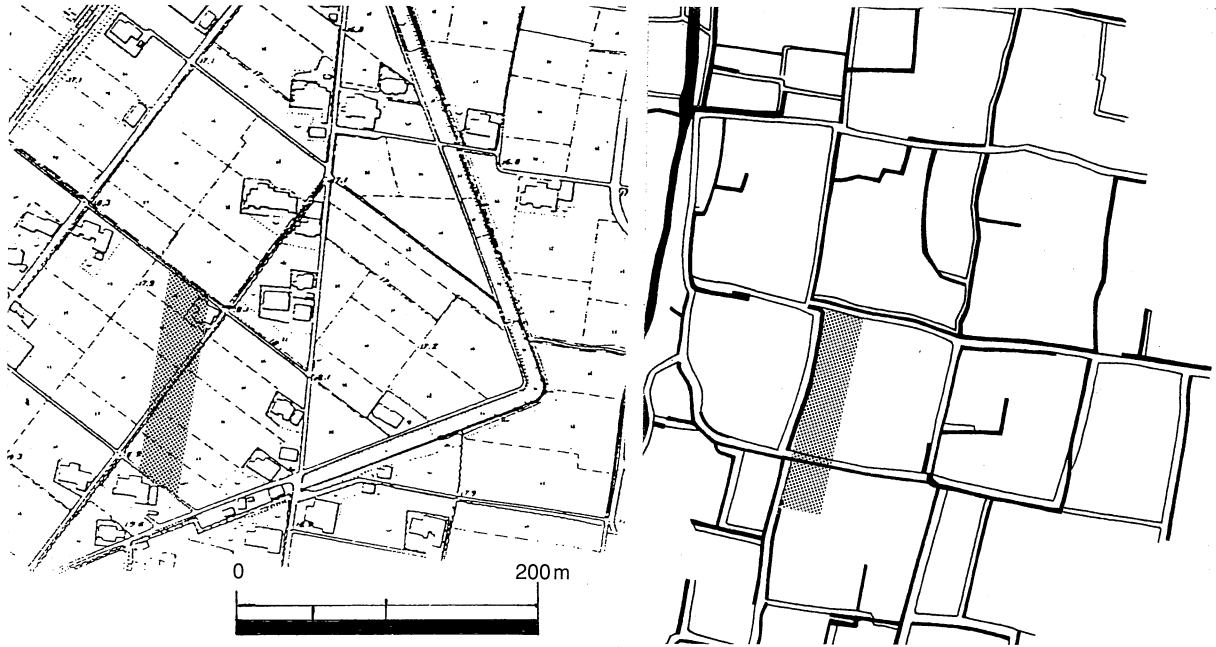
遺跡の立地について写真20によって説明する。遺跡は由良山(120m)の西側に位置する。標高は18mほどである。この地には条里型地割が遺存するが、遺跡が所在するところは大規模に地表面が造成されている。これは第2次世界大戦末期の昭和19年に陸軍が飛行場を建設するために収用したところで、戦後、地元民等に解放された経緯をもつ。このうちの北部は高松空港として利用され、平成元年に空港の移転により廃港、再開発に伴い埋蔵文化財の発掘調査が当センターによって大規模に行われている(空港跡地遺跡)。北野遺跡は、陸軍による収用範囲の東南隅付近にあたる。

造成前の地割りを明治時代の地籍図をもとに復原したのが第29図であるが、写真20の空中写真にもソイルマークとしてかつての地割りが写っている。北野遺跡付近では幅広の黒色の帯が暗示的に写っているが、これは旧河道の存在を意味している。この河道を南にたどっていくと三谷三郎池という県下有数の規模の溜め池が構築されている谷に繋がる。北野遺跡の南側には丘陵や段丘が拡がり、これを削り込



写真20 遺跡付近空中写真(昭和23年撮影)

んで谷が発達している。これらの谷水を集めて近世には由良山の南麓に由良南池が築かれていたことにも示されるように（写真20のAと記す地点が旧堤塘である）、この付近は内水型の氾濫常習地帯であった。



第29図 遺跡周辺の旧地割（左、現況 右、明治20年代）

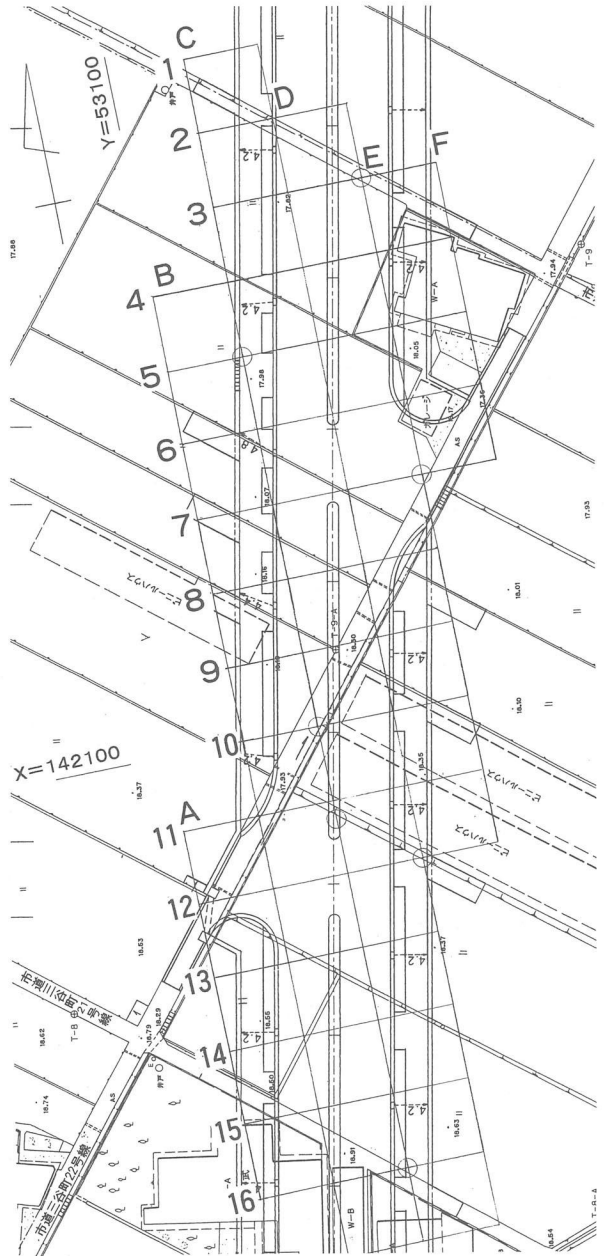
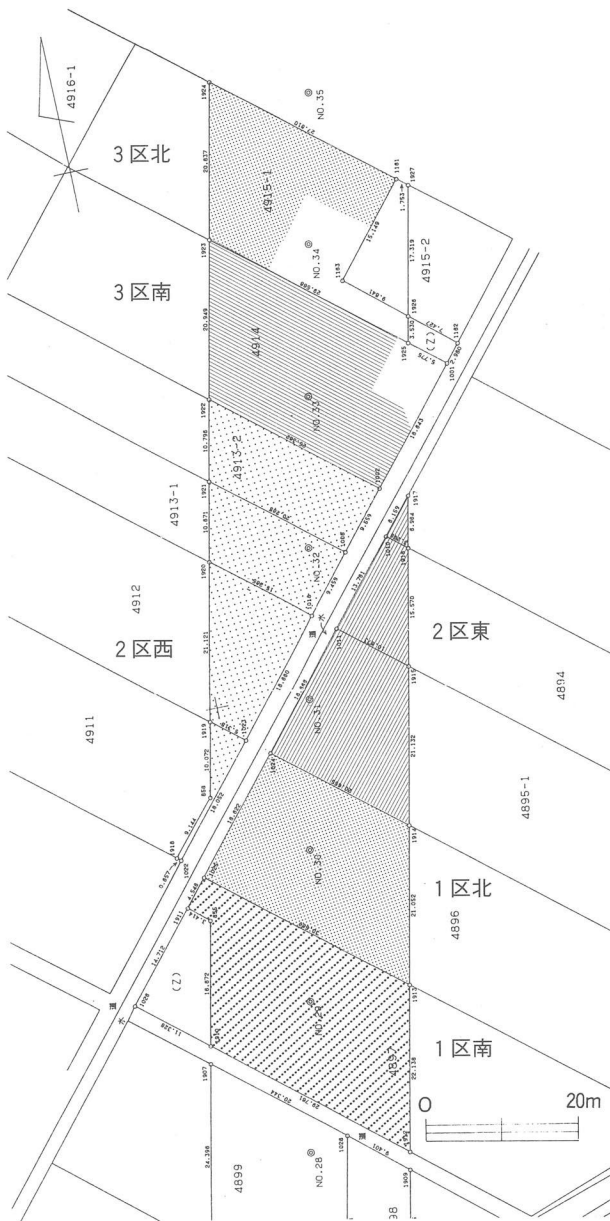
2. 調査の方法と経過

発掘調査は、平成13年4月1日より開始した。調査対象地を第30図のように3つの調査区に分け1区から調査に着手した。しかし、1区の北側の圃地には麦が植わり、2区ではビニールハウスの撤去が6月末に延びるなど、調査に支障となる案件があり、実際はそれぞれの調査区を2つに分割する形で調査を進めることとなった。調査の工程を第2表に示す。また、第30図に示すような10m四方のグリッドを設定した。グリッドは西北隅を基点（A-1、X=142190、Y=53090）とし、国土座標第IV系に方向を合致させたもので、各グリッドは西北隅の杭名で呼称している。後述するようにSD24では2mグリッドを設け、遺物の取り上げを行ったが、これは西北隅の2mグリッドを「1」とし、南に5まで、1の東側を6とし南に10というように小グリッドを設定した。

3. 層序

当遺跡は遺跡中央を横断する「市道三谷町22号線」の北側に旧河道が流れ、南側は相対的に安定した地盤が広がっていた。これらの堆積状況の模式図を第31図に示す。南側では地表面から50cmほど下に黒褐色シルト質土層があり、この層上面が上層の遺構（近世以降）検出面である。黒褐色シルト質土層中には弥生土器片が包含されており、この層を除去し、下層の黄灰色シルト質土層の上面で下層の遺構（弥生）を検出した。しかし、遺構の埋土も黒褐色シルト質土で、土層断面の観察や黒褐色シルト質土層中の遺物は下層で検出した遺構出土と考えられることから、弥生時代の遺構面は本来は黒褐色シルト質土層の上面である。

遺跡の北半には旧河道（SR02~04）が流れる。旧河道は東西方向に東流する流れが、半径20mほどの円弧を描いて西北方向に曲がり、さらに北方向に緩く曲がりながら調査区外に延びている。第31図の

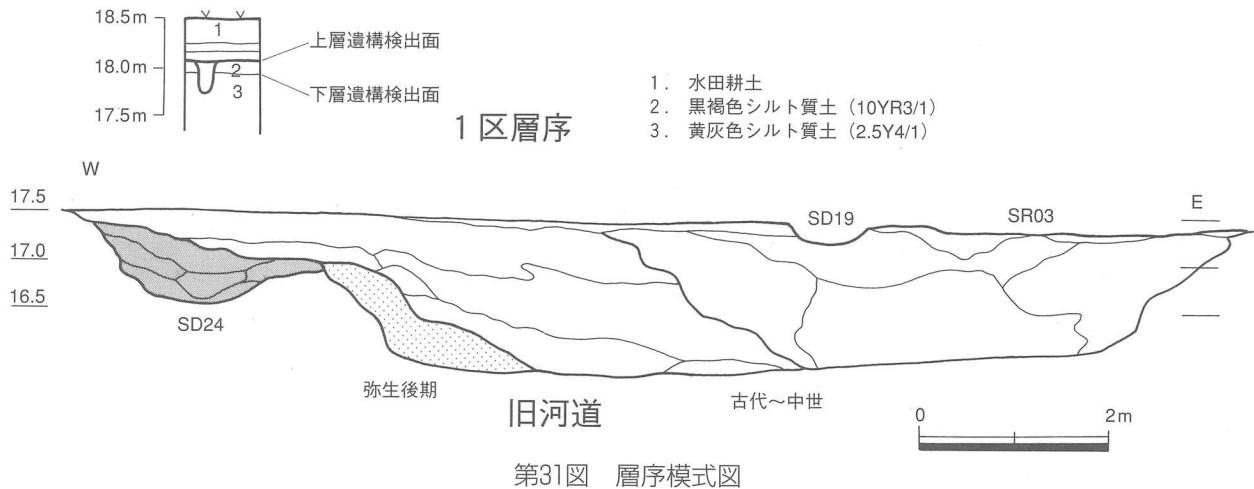


第30図 調査区割図及びグリッド配置図

調査区名	4月	5月	6月	7月	8月	9月
1区南		上層	層	下層	▲	
1区北			上層	▲	下層	▲
2区東						▲
2区西					上層	▲
3区南					上層	▲
3区北					下層	▲

▲は航空測量

第2表 調査工程表



断面図に示すように、時期の異なる流れが浸食と堆積を繰り返している。巨視的に西から東に向かって（時代の新しい流れほど）粗粒の堆積物に変化し、旧河道に合流する弥生時代前期のSD24や弥生時代後期の流路は粘質土で埋まるが、古代から中世にかけての土器片をわずかに包含する流路は小礫で短時間で埋まった堆積相をなしている。調査は、河道の西側肩から底に遺存する弥生時代後期の包含層を人力で掘削し、それ以外は遺物の包含が僅少であることと、粗粒堆積物による掘削法面の崩落の危険を考えて数本のトレンチ調査を行ったのみである。旧河道がほぼ埋没した段階で、溝状遺構（SD19）が掘られ土地利用が為された形跡が認められたため、この面を上層として調査している。なお、南半にも砂で埋まる幅3.5m、深さ1.3mの旧河道が存在する。流路延長20mにわたって精査した結果、縄文時代晩期の土器片数点を検出した。

4. 主たる遺構・遺物

遺物は弥生時代前期の土器を主体に、28リットルコンテナ90箱が出土している。以下に主たる遺構の概要を述べる。

(1) 弥生時代前期の遺構・遺物

SK07 1区北で検出した隅丸方形の土坑である。1.4×1.1m、深さ0.1mほどの規模である。弥生時代前期の甕が横倒しの状態で出土した。遺構埋土を水洗し微小遺物の検出に努めたが採集されなかった。SK07の南には同規模で、類似する埋土の遺構が点在している。このうち、SK08は周囲にSD12、13が圍繞しており、周溝墓の可能性が考えられた。このほかの土坑（SK14、15）も同様の可能性を考え精査したが、遺構の性格を特定する材料は得られず、時期の特定も困難であった。弥生時代前期もしくは

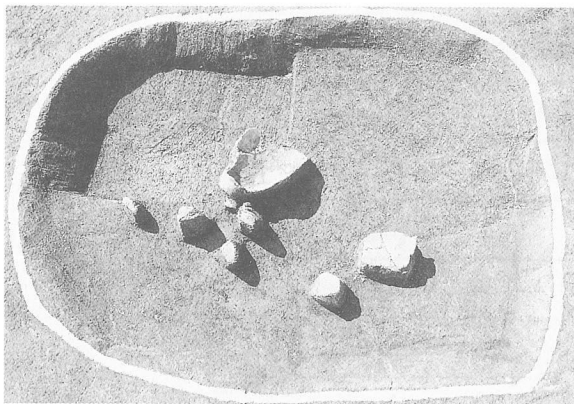
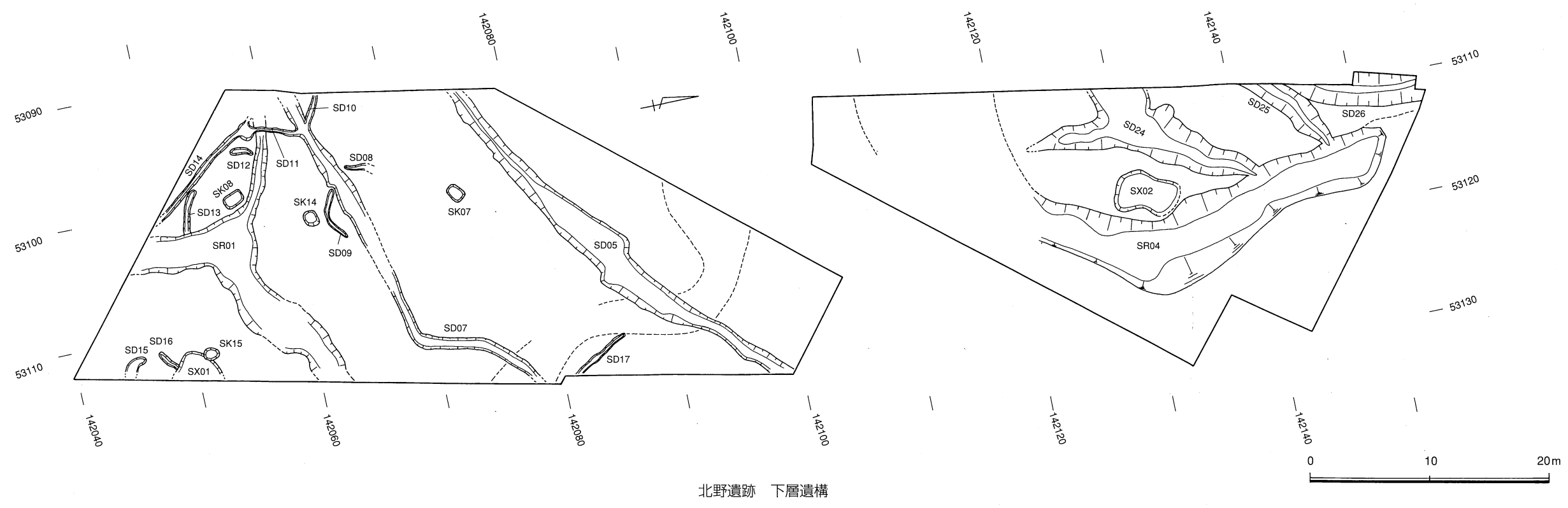
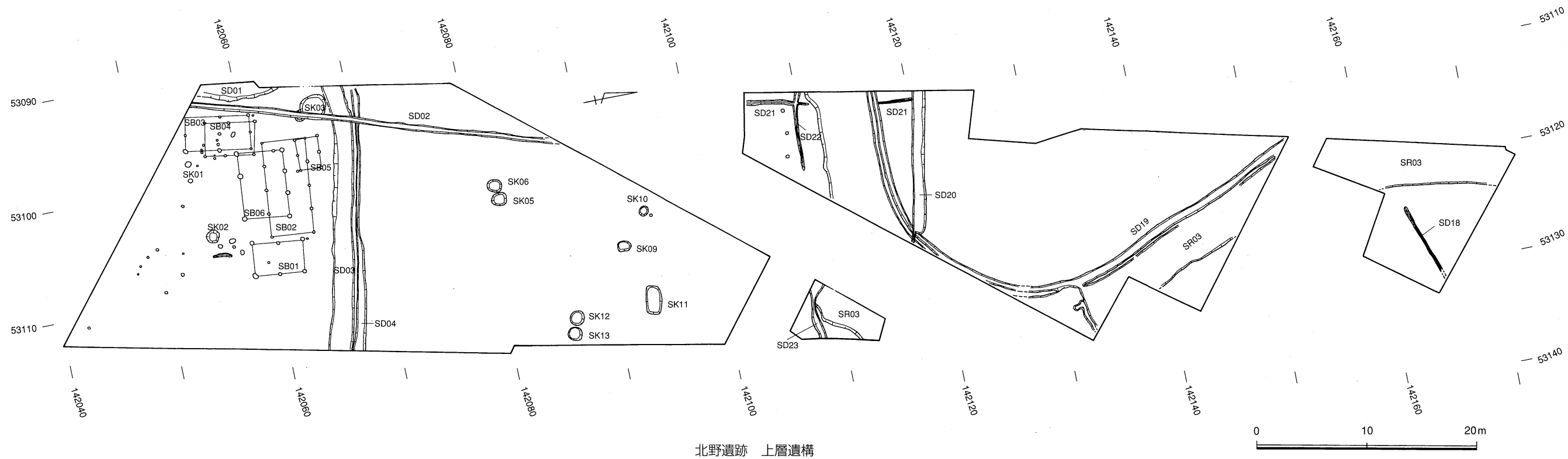


写真21 SK07遺物出土状況（東南から）



写真22 I区南 下層完掘状況（北から）



第32図 遺構配置図

は後期の遺構であろう。

S D07 1区で検出した幅1.6m、深さ0.2mほどの規模の溝状遺構である。溝底から浮いた埋土中から多量の弥生時代前期の土器片が出土している。接合作業によって完形に復原しうるような状況ではなく、摩滅した細片が散在する出土状況である。S D10、11と切り合い関係がある可能性が高いが、明確にできなかった。

S D24～26 2区西から3区南で3条の弥生時代前期の溝状の落ち込みを検出した。これらはいずれもS R04に合流すると考えられる。S D25と26には切り合いがあり、S D26が新しい。

S D24は、合流部付近では幅2.8m、深さ0.8m、断面形は深い皿状を呈するものであるが、合流点から10mほど上流で急に浅くなり、落ち込みの平面形も不明瞭なものとなる。現在のところ、もとは不定形な落ち込みがあり、深くなっている部分は合流点から谷頭侵食をおこした結果形成されたと解釈している。

S D24からはコンテナ38箱に及ぶ弥生時代前期の土器片が出土した。これらは2mのグリッド毎に深度10cm毎に遺物採集を行っている。土器の破片は、接合作業によって最終的に完形に近い状態にまで復原出来そうな出土状況であるが、発掘作業中に一個体として認識できるような出土状況のものはほとんど見られなかった。また、土器は真鍋編年I-2様式に相当すると考えられる。今後の整理作業によって、詳細な分析を行いたい。

S D25、26もS D24とほぼ同規模のものである。S D26については、官民境界近くまで調査区を拡張したが、西岸は調査区外となる。S D05からコンテナ3箱、S D26から11箱の遺物が出土している。

(2) 弥生時代後期の遺構・遺物

S D05 1区で検出した溝状遺構である。幅2m、深さ0.5mほどの規模で、西南から東北方向に直線に流れている。南に10m強ばかり離れた位置に弥生時代前期の溝状遺構(S D07)が平行して流れている。流路が旧地形の傾斜に制約されているものと思われる。S D05からは出土遺物は僅少であるが、完形に近い下川津B類の甕のほか、長頸壺の体部などが出土している。このほか弥生時代後期の遺構として、2区西のS X02があげられる。

(3) 中世の遺構・遺物

中世の遺構としてS D19があげられる。遺跡北半の旧河道の(流路としての)最終堆積物である砂層によって埋没している。幅0.9m、深さ0.2mほどの規模で、東肩には高さ5cmほどの畦をつくり、畦頂部は西肩より5cmほど低くなっている。畦東側の幅4mほどの微凹地に畦越しに灌水する構造を復原できる。3区北では、微凹地東側の粘質土層上面で人間の足跡と偶蹄目の足跡が複数検出されたほか、幅



写真23 S D24ほか完掘状況(北から)

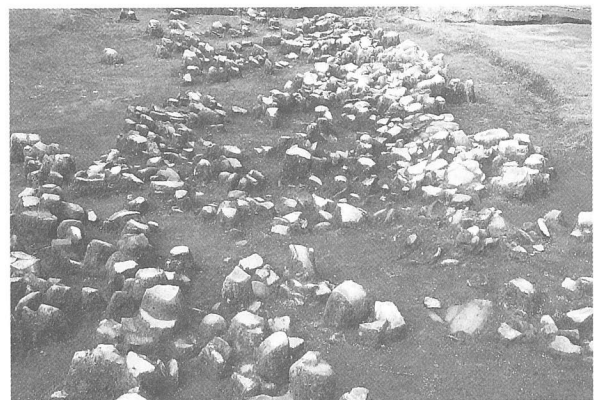


写真24 S D24上層遺物出土状況(南から)

10cm、深さ5cmの小溝（SD18）が検出されるなど、水田として土地利用されていたと考えられる。なお、出土遺物は僅少で、微凹地の埋土から黒色土器碗の底部片など数点の中世土器があるのみである。

(4)近世の遺構・遺物

SB01～06 1区南で6棟の掘立柱建物を検出した。柱通りは整然と配置されており、検出したピットのほとんどを使って建物の復原ができた。また、多くのピットで柱痕を検出できた。規模は、SB01が1×2間（2.9×4.6m）、SB02が1×4間（3.9×8.6m）、SB03が2×3間（3.1×6.0m）、SB04が1×2間（3.0×4.5m）、SB05が1×2間（2×3m）、SB06が1×3間（4.2×6.1m）である。SB02と06、02と05、03と04、04と06とが重複する位置関係にあるが、同一時期の建物のセットや前後関係は明らかにできなかった。出土遺物は僅少であるが、焙烙片などが出土しており近世のものと推定される。

SK01、02 SB01～06のピット埋土と類似する埋土の土坑であるが、出土遺物が無く、性格不明である。

(5)近現代の遺構・遺物

SK03～06、09～13 これらの土坑は、いずれも農業生産に係わるものと考えられる。SK05、06や12、13のように類似する規模のものが並列する場合がある。陶磁器片や木片が出土している。

SD01、03 第29図の明治時代の地籍図に記されている水路である。埋没年代は昭和19年、掘削年代は特定できなかった。SD01は幅約1m、深さ約0.5m、SD03は幅約1.5m、深さ約0.8mの規模で、石組みのものである。SD03は4897番地では良好に遺存していたが、4896番地では、護岸の石材がすべて抜き取られていた。SD03の石組みと裏込めは両岸で異なり、拡幅されている。

SD02 第2次世界大戦後、接収された軍用地が農地解放された際に掘られた暗渠である。軍用地は縁辺部に濠状の凹地が巡っており、この上流側から用水を導くことができなかつたために、径約30cmの土管を連ねて暗渠をつくり、4896番地付近で自噴させていたという。

5. まとめ

北野遺跡の調査成果として、第一に弥生時代前期の土器の良好な資料が出土したことがあげられる。SD24は2mグリッド、絶対高で10cm毎の遺物取り上げを行い、SD26では層位毎に遺物取り上げを行っている。また、写真24は一括資料として把握できるが、セット関係の分析などが本報告時の課題となろう。



写真25 SR03、SD19完掘状況（西北から）



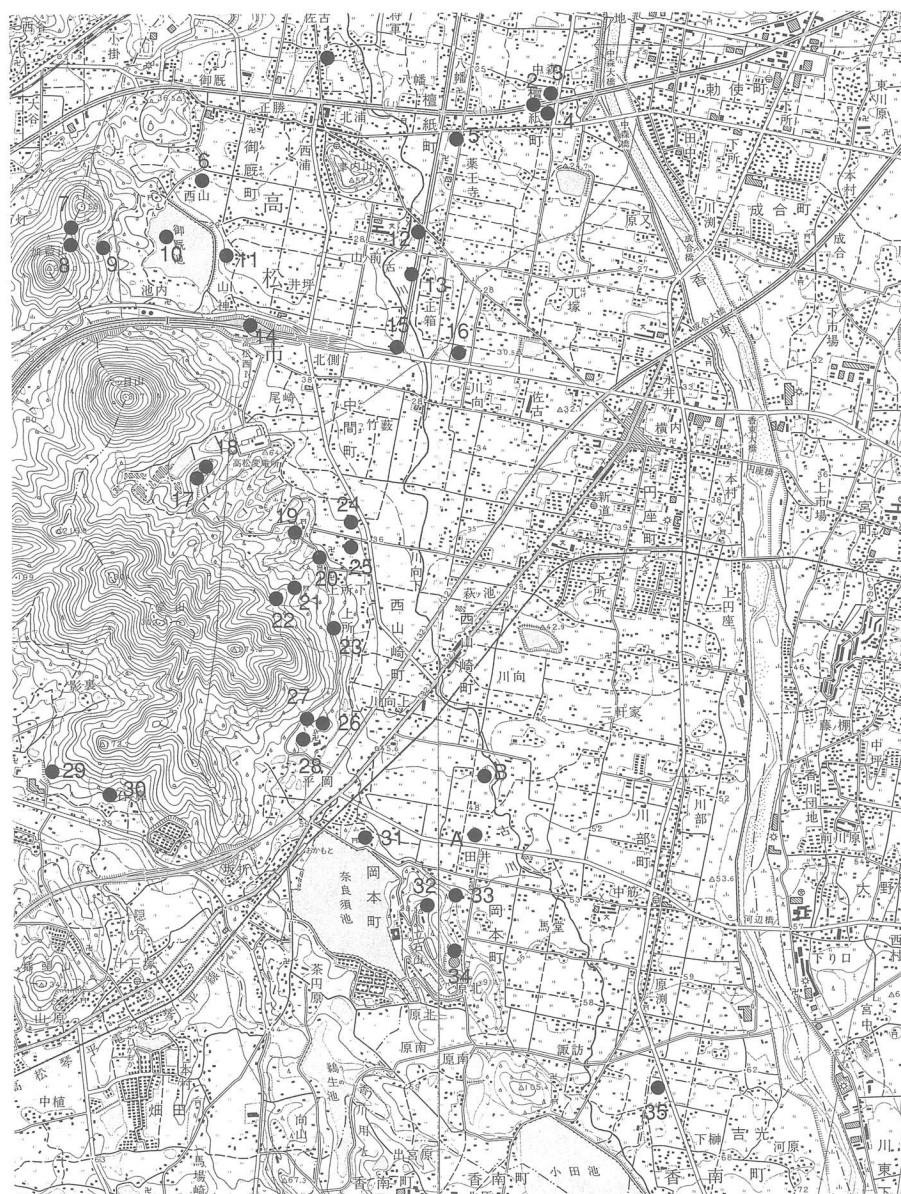
写真26 SB02・06ほか完掘状況（東から）

川岡遺跡

1. 立地と環境

川岡遺跡は香川県高松市岡本町1247-1外に所在する。遺跡西方の堂山、南方の千疋丘陵と香南台地が高松平野の西南縁をなす。当遺跡はこの南の丘陵部からのびる微高地上に立地する。遺跡の東を本津川古川が流下しており、調査地のⅡ区でその距離10数mと最も近接する。

この本津川古川流域が令制下における香川郡中間郷に比定でき、調査地周辺はその南端にあたる。条里型地割の名残と考えられる道路や地割がよく残っており、調査地のⅠ区が香川郡の八条八里二十一ノ坪に相当する。



- A 川岡遺跡Ⅰ区
- B 川岡遺跡Ⅱ区
- 1 御厩大塚古墳
- 2 中森遺跡
- 3 中森1号墳
- 4 中森2号墳
- 5 八幡遺跡
- 6 御厩天神社古墳
- 7 加藍山東麓古墳
- 8 うたい塚古墳
- 9 山王神社古墳
- 10 御厩池遺跡
- 11 三つ塚古墳
- 12 薬王寺遺跡
- 13 正箱遺跡
- 14 中間西井坪遺跡
- 15 中間東井坪遺跡
- 16 兀塚遺跡
- 17 矢塚南古墳
- 18 矢塚北古墳
- 19 西山崎1号墳
- 20 西山崎2号墳
- 21 西山崎3号墳
- 22 西山崎4号墳
- 23 西山崎古墳群
- 24 馬塚古墳
- 25 犬のくそ塚
- 26 本売寺北1号墳
- 27 本売寺北2号墳
- 28 本売寺西古墳
- 29 福家古墳
- 30 石ヶ鼻古墳
- 31 奈良須池古墳
- 32 立石神社古墳
- 33 金比羅社遺跡
- 34 岡本配水池北遺跡
- 35 若宮神社古墳

第33図 遺跡位置図及び周辺の遺跡 (S = 1/40,000)

2. 県道円座香南線川岡地区の予備調査

予備調査の対象地は高松市岡本町で、県道170号線をまたぐ南北580m、東西55mの範囲である。現状では水田地帯で、条里型地割がよく残る。対象地の東側には古川が蛇行する。予備調査は水田1筆ごとに地割に沿う南北方向または東西方向にトレンチを設定し、状況に応じてトレンチの本数を増やした。

予備調査の結果から、本調査は条里型地割の坪界線の溝が想定できる5トレンチを含む225m²と、20トレンチを中心とする、土器が出土した遺構を検出した微高地が広がる部分、及び、縄文時代の石器が出土した21トレンチを含む部分2,729m²の合計2,954m²を本調査を実施することとした。

3. 本調査の成果

本調査は、条里型地割の坪界線の溝を検出した5トレンチを含む部分をⅠ区、北側の微高地部分をⅡ区とした。Ⅱ区は調査の都合上畦畔や農道の境で①～④の小区に分けた。本調査はⅠ区およびⅡ区①・③から着手し、②④は2月中旬以降の調査の予定である。

Ⅰ区の調査

Ⅰ区は県道170号線の北側に接する調査区で、付近には条里型地割が明瞭に残る。Ⅰ区の東側と北側の地境は現地割からいずれも坪界線が想定された。予備調査の結果から、東側からは坪界線に想定される溝が検出されたが、北側では検出できなかった。本調査の結果、遺構面は北側に向かって傾斜しており、調査区の南側では耕作土・床土直下で遺構面を検出したが、北半部では灰色粘質土の包含層が堆積し、南端部では厚さ20cmに達していた。遺構は、溝は包含層の下部から、土坑・ピットは包含層の上部から検出した。検出した遺構は条里型地割に沿う南北方向の溝が4条、これらの溝に直交する溝が1条、自然地形に制約された溝が2条、埋土から弥生時代後期と考えられる溝が1条、その他、土坑、ピット等を検出した。自然地形に制約された溝は坪界線の溝よりも古く、土坑・ピットはいずれの溝より新しく、近世以降と考えられる。

S D01 調査区の東端を南から北へ流れる溝である。調査区の北端部付近で調査区外へ出る。規模は幅90cm、深さ30cm、断面形は逆台形で、埋土は灰色粘土が主体である。この溝は現地割からは若干方位が東へ振れるが、条里型地割の坪界線の溝に相当する。埋土中からは須恵器小片がわずかに出土しているが、磨滅が著しく時期を示すとは考えにくい。この溝の埋土はS D02～04に類似し、おおむね同じ時期に機能していたと考えられる。この溝は13世紀の遺物が出土したS D09に切られており、時期はそれ以前である。

S D02～03 S D01の西側約2.2m～3.7mの位置を南から北へ流れる溝である。S D03は北半部では2条に分かれるが、切り合い関係は認められなかった。幅はおおむね50cm～70cm、深さは10～15cm、断面形は半円形で埋土は灰色粘土でM n粒を含む。時期を示すような出土遺物はなかったが、流れる方向はS D01とほぼ平行しており、埋土が類似することからS D01とおおむね同時期と考えられる。S D02と03に多少の時期差があるのか同時併存なのかは不明であるが、いずれにしてもS D01と組んで通路を形成していたと考えられる。S D02・03は調査区の北端付近では溝の肩が不明瞭になり、溜まり状になって終わっていたと考えられる。この溝はS D09に切られており、時期はそれ以前である。

S D09 調査区の中央やや北寄りを東西方向に流れる溝である。おおむね条里型地割に沿い、北側の坪界線から約20mの位置にある。規模は幅70cm、深さ12cm、断面形は浅い皿状で、埋土は灰褐色粘質土である。この溝はS D01～03を切り、土坑に切られる。この溝の埋土中で、他の溝との切り合い関係のない場所から須恵器椀、白磁椀底部などが出土した。この遺物の時期から溝は13世紀代と考えられる。



第34図 予備調査トレンチ位置図及び本調査区位置図 (S=1/2000)

S D05 調査区を南東から北西へ流れる溝で、自然地形に制約されたものである。規模は東部で幅60cm、深さ25cm、断面形は逆台形で埋土は暗茶褐色粘質土である。溝の規模は削平のため北西ほど小さくなっている。この溝はS D01～03に切られる。埋土中からは遺物は出土しなかったが、Ⅱ区の溝との埋土の類似性や方位から弥生時代後期頃と考えられる。Ⅱ区の溝群と同様灌漑用水路として利用していたのだろう。この溝と同時期と考えられる溝は調査区の東端部分でも一部検出している。

Ⅱ区の調査

Ⅱ区はⅠ区から約300m北側に位置する水田である。東側には古川が蛇行して流れ、地割に若干乱れの生じる場所である。予備調査の結果から微高地が広がる場所であることがわかっていた。本調査の結果、Ⅱ区①・③にわたっておおむね弥生時代後期後半の溝群を検出した他、Ⅱ区①では土坑を、③では出水状遺構を検出した。Ⅱ区①ではおおむね耕作土・床土直下は黄色粘土のベースであるが、Ⅱ区①南西隅～Ⅱ区③北西隅にかけて、多量のMn粒を含む灰褐色粘質土層の遺物包含層が広がる。これは弥生時代後期の遺構群の遺構面に相当する。Ⅱ区③では北西部分は耕作土・床土直下で黄色粘土のベースが見られるが、南半部では旧流路の落ち込みが見られ、西半部では上位に灰色粘土系の包含層が厚く堆積している。

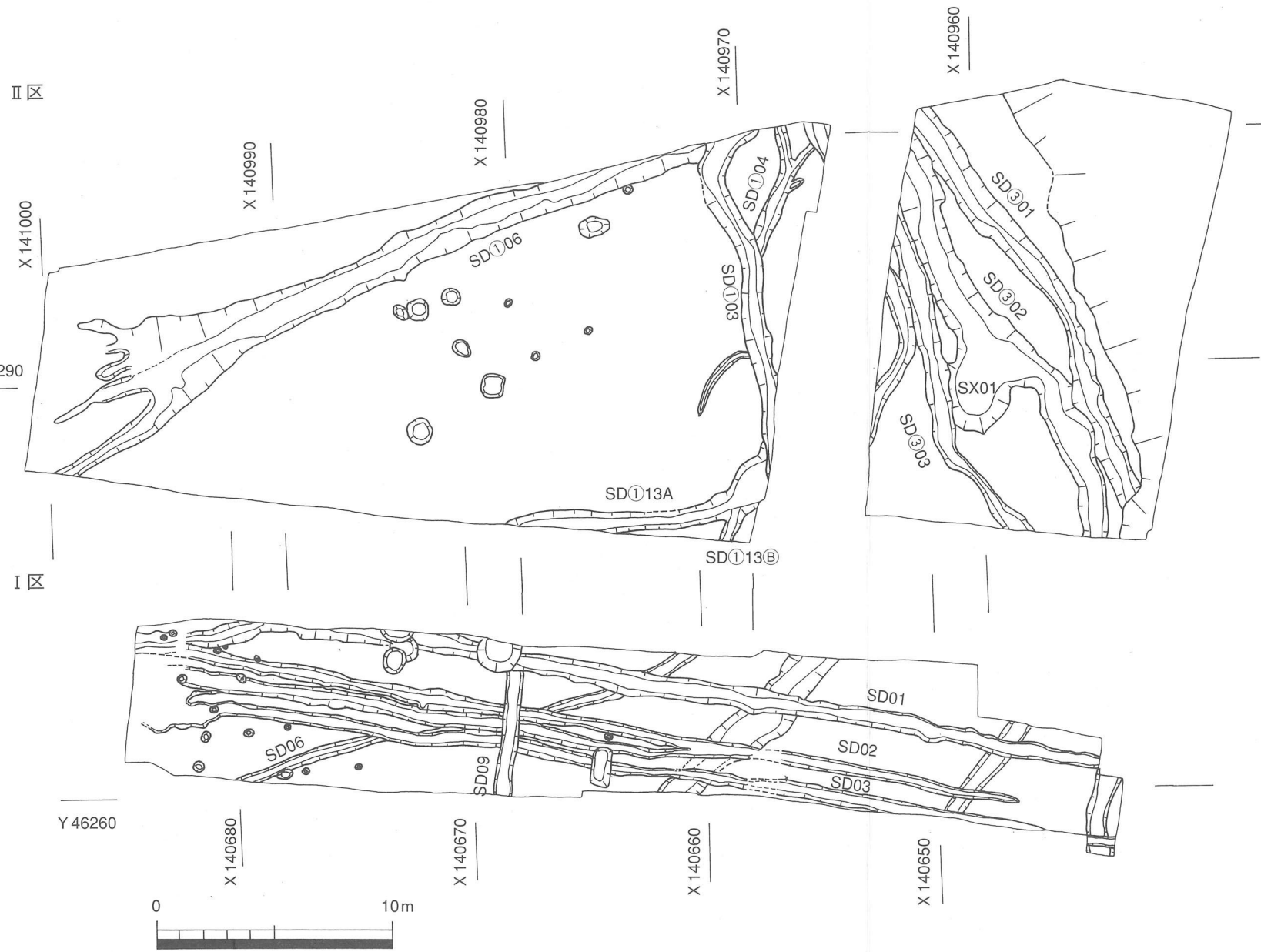
S D①03 Ⅱ区①をやや蛇行気味に東から西へ流れる溝である。Ⅱ区③では該当する溝はなく、農道の下を西へ延び、低地に至ると考えられる。幅1m、深さ32cm、断面形は逆台形で、東部では溝の南肩がかなりえぐれた状態である。埋土は上層は暗褐色粘質土、下層は砂層が堆積しており、ある程度流れがあったようである。埋土中からは弥生時代後期後半の高坏片を含む土器片、サヌカイト片が出土した。この溝はS D①04・①13・①06を切る。

S D①13A・B Ⅱ区③北端部からⅡ区①南西隅を流れる溝である。S D①03に切られ、S D③03を切る。農道の下側からⅡ区③を北東から入り、途中ほぼ直角に屈曲して北西へ抜け、Ⅱ区①を南東から北西へ抜ける。途中でS D①13Bへ枝分かれするが、これらの切り合い関係は認められなかった。溝の規模は幅90cm、深さ30cm、断面形状は逆台形に近く、埋土は褐灰色～灰色粘土で、底付近で灰色砂質土層が堆積する。埋土中からは弥生土器小片やサヌカイト片が出土した。溝の時期は弥生時代後期後半頃と考えられる。

S D①04 Ⅱ区①の南部を東側から西側へ流れる溝である。溝の東端付近で二又に分かれるが、切り合い関係は認められなかった。この溝に該当する溝はⅡ区③では認められない。溝の規模は幅85cm、深さ20cm、断面形状は逆台形に近く、埋土は黄褐色細砂混粘質土で、底付近に灰色砂質土が堆積する。他の溝に比べて規模は小さく、途中で消失する。この溝はS D①13A・S D①03に切られる。

S D①06 Ⅱ区①を南東から北西へ流れる溝である。規模は幅1.5m、深さは深い部分で45cmだが、北西ほど削平が著しく浅い。断面形状は深い部分がV字形で、北西では浅い皿状になる。埋土はおおむね灰色～褐灰色粘質土で、溝の南東端付近では砂が多く流入していた。この溝は北端部付近で数条に枝分かれし、Ⅱ区②では後世の地下げにより消失していた。Ⅱ区③ではこの溝に該当するものはない。断面観察から何回かの掘り直しがあったと想定され、一番最後のものは幅38cm、深さ20cmまで縮小した。断面形状は逆台形で埋土は暗灰褐色砂混粘質土であった。これは北西端では最も西側を走る溝へ続く。この部分からは弥生時代終末期頃の高坏が出土した。

S D③01 Ⅱ区③を北東から南西へ流れる溝である。規模は幅1.1m、深さ55cm、断面形状は逆台形状で、肩部分はかなりえぐれる場所もある。埋土は上層は黒褐色粘土層、下層は砂が多く混じり、ある程度流れがあったと考えられる。土器もそこから多く出土した。この溝はS D③02に切られ、南側の旧



第35図 遺構配置図 (1/250) および周辺地割図 (1/10,000)



写真27 I区全景 (北から)



写真28 II区全景 (南から)

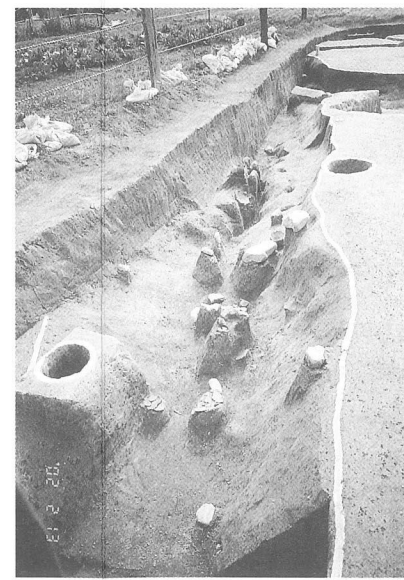


写真29 II区SD①06土器出土状況 (北から)

流路にも切られる。出土遺物から溝は弥生時代後期後半と考えられる。

S D③02 II区③を北東から南西へ流れる溝である。おおむねS D③01に北側に平行して流れる。規模は幅1.5~1.85m、深さ65cm、断面形状は逆台形で、肩部分は場所によってはかなりえぐれている。埋土はおおむね黒灰色~暗灰色粘土層であるが、底部には砂層が堆積し、遺物はおもに底付近から出土した。溝の切り合い部分はわずかしかないが、この溝はS D③01を切り、S D③03に切られる。溝の中央付近でS X01を接して検出した。調査時の不注意からS D③02との切り合い関係は明らかではないが、埋土の類似性や、上面精査では切り合い関係が明らかではなかったことから同時併存の可能性も考えられる。溝の時期は出土遺物から弥生時代後期後半頃と考えられる。

S D③03 II区③の北部を北東から南西方向へ流れる溝である。西側付近ではやや南側に屈曲する。溝の西側では削平を受けやや残りが悪い。規模は幅1m、深さ32cm、断面形状は半円形である。断面形状から、この溝はもともと調査区の北東部で2条に分かれており、北側から流れ込む方が新しい。この流路はII区①の東南端部で検出している。埋土は、北側の溝が暗褐色シルト混粘土でその上面で黄色粘土で一気に埋め戻した痕跡がある。南側は明褐色砂混じりシルトで、その両方を暗褐色~黒褐色粘土層が覆う。この溝はS D③02を切り、S D①03に切られる。溝の時期は弥生時代後期後半と考えられる。

S X01 II区③北西部で検出した楕円形の遺構である。S D③02の北側に接して検出した。長径2.8m、短径2.3m、深さは80cmで、断面形は播鉢状を呈する。埋土は上層は暗褐色粘質土でS D③02の上層と似る。下層は粘土層と砂層がラミナ状に堆積し、最下層は砂層である。遺物は上位層からはほとんど出土せず、最底部から土器・サヌカイト片が出土した。湧水層を掘り込み、調査中でも水がわき出していたことから出水のような役割を果たしていた可能性もあろう。

4. まとめ

今年度の川岡遺跡の調査は、予備調査の結果を踏まえてI区(225m²)とII区(2,829m²)の調査を実施し、ここではこれまで調査が終了したI区とII区①・II区③の概要を報告した。

I区では条里型地割の南北方向の坪界線の溝や道路状遺構を検出した。またこの溝を切る溝から13世紀代の土器が出土したことで、坪界線の溝の時期もある程度限定され、この地域の条里型地割の施行時期を知る一端となった。また、弥生時代後期後半の溝と同様の埋土を持つ、南東から北西方向の溝を2条検出した。おそらくII区と同様に東側を走る古川から取水して西側を灌漑した水路と考えられ、弥生時代後期における土地開発の歴史の一端を知る手がかりとなった。

II区①・③区においても弥生時代後期後半の溝群を検出した。これらの溝の方向は大まかに分ければ北東から南西へ向くものと南東から北西へ向くものがあり、地形に制約された土地区画を行っていたのであろう。II区①・③の北東から南西へ向く溝は、北側のものほど新しくなっており、水路を段々北側へ移していったようである。溝の切り合い関係や方向性からS D①03A・BとS D①06が同時期に機能し、区画を形成していたと思われる。

今年度は3月末日までに残りのII区②・④を終了させ、川岡遺跡の調査を終了する予定である。

VIII. 今津中原遺跡

1. 立地と環境

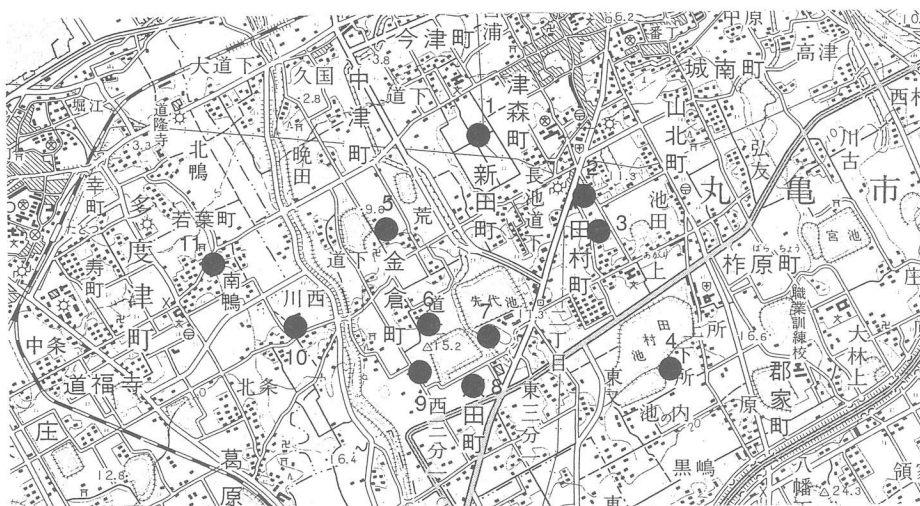
今津中原遺跡は丸亀市今津町に所在する。丸亀平野は讃岐山脈の山間に源を発する土器川が主として形成した堆積平野である。本遺跡は、丸亀平野の北西、金倉川の西岸に位置し、近くを西汐入川が流れる。調査区の標高は約5～6mを測る。調査対象地近辺は、徐々に都市化が進められている地域ではあるが、まだ水田が広がっているところである。温暖で降水量の少ない気候を反映して、水田に使用する水を蓄えた溜池が多数見られる。周辺には条里地割の名残である方格子地割が比較的良好に見られるが、当



写真30 調査区遠景（西から）

該地は後世の改変を被っているようで、方格子地割が若干ずれたものとなっている。また、当該地内には、方格子の地割が乱れる部分も認められ、小規模な埋没河川が存在する可能性を示唆している。これらは現在は存在していないが、文献などにも残り、四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査でも確認された四条川の支流の一部であろうと思われる。四条川の水量は現在では想像できないほど豊富であり、治水が容易ではなく常に氾濫を繰り返していたとされる。稲木から葛原の小塚を経て六条から東折した四条川は、多くの支流を派生し、主に旧六郷村域においてが多かったとされる。氾濫地帯の大部分は荒地として近世に至るまで開拓の鋤が入らなかったとされ、調査区周辺は、昭和30年代に大規模な圃状整備が行われている。

本遺跡の周辺には、西側には弥生から中世の集落跡である道下遺跡が、南には弥生時代の環濠集落跡の中の池遺跡や、同じく弥生時代集落跡の平池南遺跡などがある。また南東には、田村廃寺跡、田村遺跡がある。田村遺跡では、奈良時代から平安時代とされる梵鐘鑄造土坑が見つかっており、その中からは梵鐘鑄型の細片や、銅滴・銅滓などが出土している。



番号	遺跡名
1	今津中原遺跡
2	田村遺跡
3	田村廃寺跡
4	田村池遺跡
5	道下遺跡
6	中の池遺跡
7	平池東遺跡
8	平池南遺跡
9	平池西遺跡
10	金倉遺跡
11	南鴨遺跡

第36図 遺跡位置及び周辺の遺跡 (1/50,000)

2. 調査成果の概要

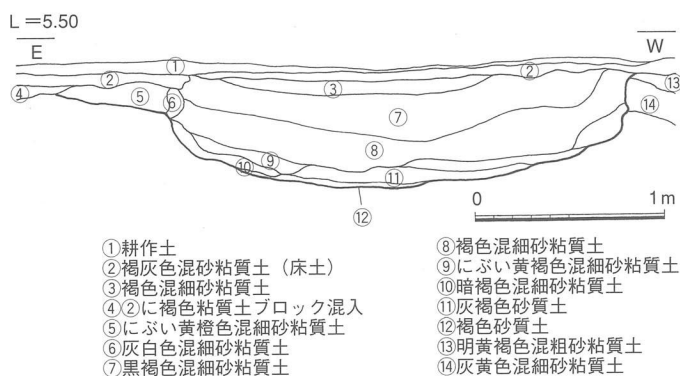
調査は、県道多度津丸亀線の建設に伴い調査面積1530m²を対象として3ヵ月間の調査期間で実施した。西側部分をⅠ区、東側部分をⅡ区とした。なお、発掘調査の人力作業部分については、社団法人仲善広域シルバー人材センターに業務委託し、調査を進めていった。以下、それぞれの調査区の主な遺構・遺物について概説する。

Ⅰ区の遺構・遺物

S D04 調査区南東から北西に向けてやや蛇行しながら流れる溝状遺構である。幅約1.80～2.00m、深さ約0.50～0.65mを測り、長さ約30mにわたって検出した。断面形は逆台形状ないしU字状を呈する。遺物の混入は少ないが、弥生時代後期の土器が出土している。上記した四条川の支流、旧流路の一部で



写真31 調査区全景（西から）



第37図 S D04断面図（1/40）

あった可能性がある。

S D05 調査区東部で幅約1.60m、深さ約0.22mを測る溝状遺構である。埋土は、黒褐色混細砂粘質土である。弥生時代前期の土器が出土しており、S D04よりも古い可能性がある。

S D06 調査区東部でS D05に切られる形で検出した幅約1.50m、深さ約0.24～0.34mを測る溝状遺構である。埋土は黄褐色砂質土である。

Ⅱ区の遺構・遺物

S D01 調査区東部を北流、幅2.5m、深さ0.5mで、逆台形上を呈する。遺物の混入は少ないが、弥生土器を数点検出した。時期としては、弥生時代後期から終末期にかけての土器片が最下層で見つかり、その頃に開削された灌漑用の幹線水路と思われる。

S D14 調査区西部で検出した。幅約0.5m、深さは15cm程度である。埋土は暗灰褐色シルトで、東端で検出したS D01より、時期は新しいと思われる。

S X08 形状は歪で、深さは0.1m～1m程度と一定ではない。風倒木痕かと思われる。遺物はなく、時期等も不明であるが、S D14に切られており、それよりも時期としては先行する。

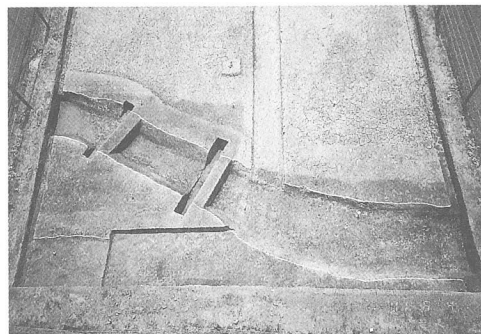
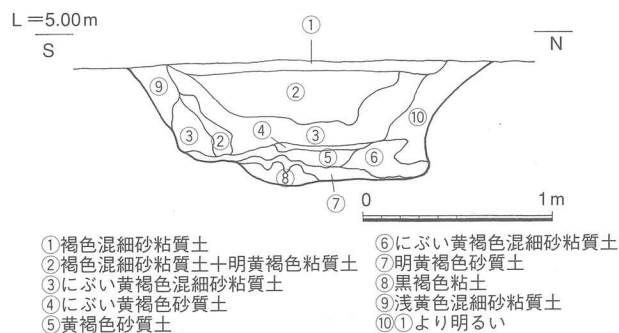


写真32 S D01全景（東より）

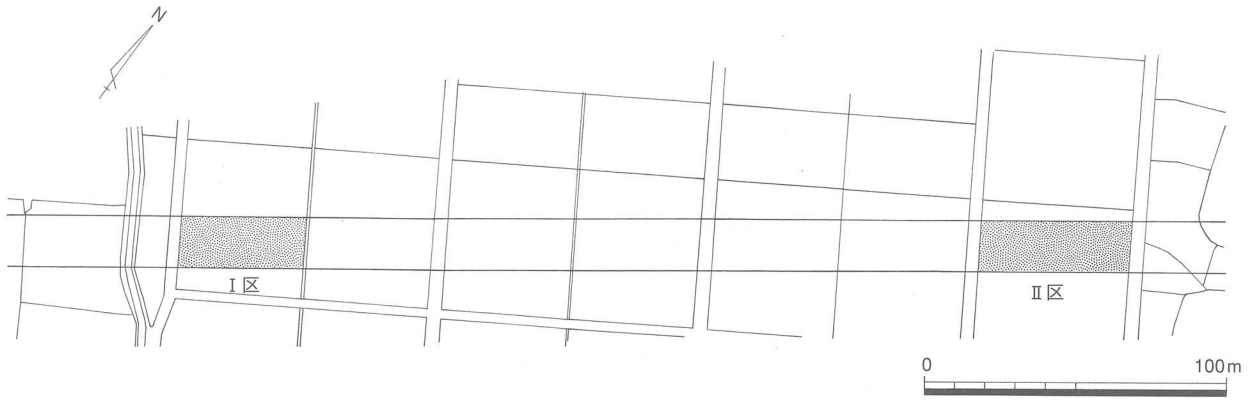


第38図 S D01断面図（1/40）

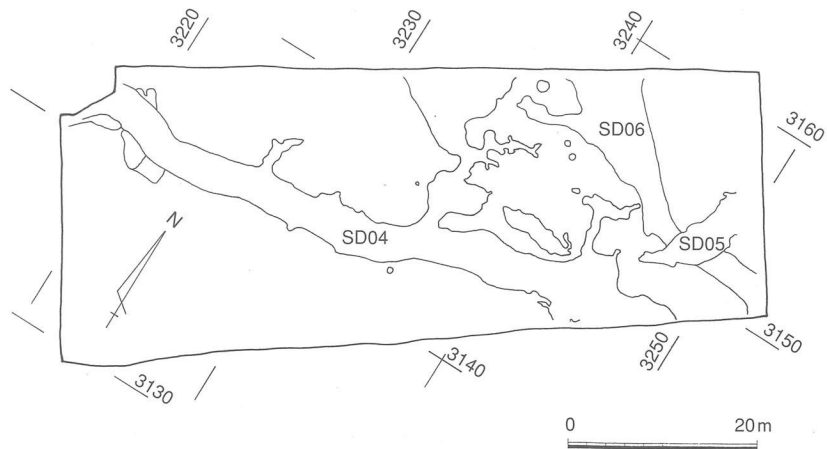
3. まとめ

耕作土直下に地山層である黄色系粘土層が見られ、遺構面とした。氾濫常習地帯であったためか、圃状整備の影響を受けてか遺構自体は希薄で、客土も多く見られた。しかし、弥生時代における灌漑用幹線水路や、流路が検出されたことは、当該期の水田開発についての新たな資料を得ることができた。

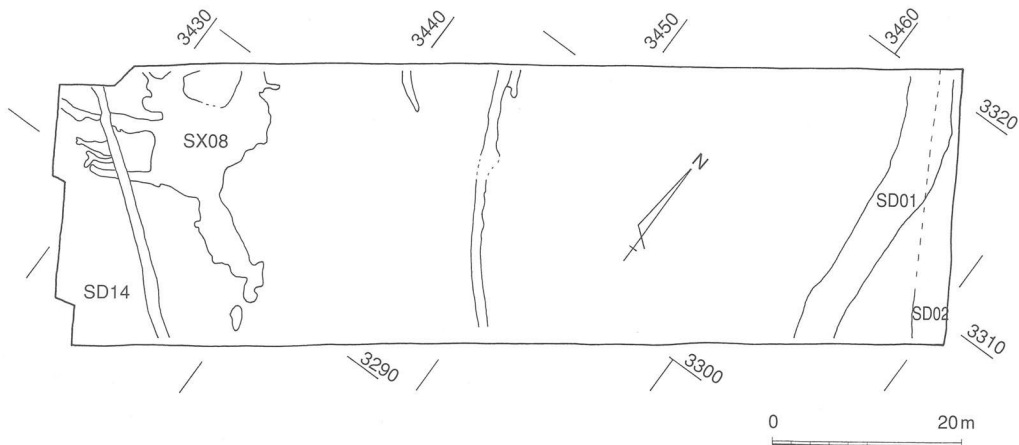
〈参考文献〉 1995 「新編丸亀市史1 自然・原始・古代・中世編」 丸亀市史編さん委員会



第39図 調査区位置図 (1/2,500)



第40図 I区遺構配置図 (1/400) (座標値は道路設計上の仮数値)



第41図 II区遺構配置図 (1/400)

Ⅸ. 北原2号墳・北原遺跡

1. 立地と環境

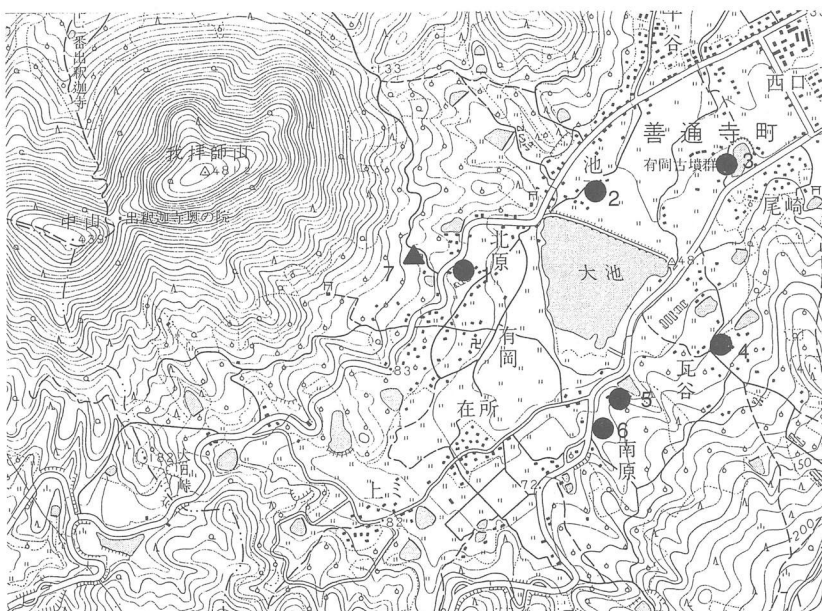
北原2号墳・北原遺跡は善通寺市善通寺町に位置し、我拝師山から南東側に派生する尾根の先端部の標高63.5m～67.0mの所に位置している。遺跡の南東から東側にかけては我拝師山山系と大麻山山系に挟まれた扇状地が展開しており、遺跡の東側はこの扇状地に向かって下ってゆく。また遺跡の南西側は山が険しくなり高瀬町との境をなす大日峠がある。

遺跡のすぐ西側で我拝師山の山裾の斜面で、弥生時代中期と考えられる銅鐸が出土したとされている。今回調査した調査区の西側に隣接して北原1号墳が、南側では北原3号墳があり、いずれも横穴式石室を埋葬施設としてもつ後期～終末期の古墳である。また北原3号墳の墳丘直下では弥生時代後期初頭の竪穴住居跡が検出されている。この北原古墳群の北東部の大池の付近に後期の前方後円墳と考えられる菊塚古墳がある。反対側の大麻山山系の山裾部にも古墳が点在している。前期古墳としては竪穴式石槨を主体部にもつ御館神社古墳がある。6世紀になると前方後円墳で初期の横穴式石室で、石室内に石屋形をもつ王墓山古墳が築かれている。須恵器とともに冠帽・大刀・馬具などの豊富な副葬品が出土している。また6世紀末から7世紀前半に築かれた宮が尾古墳では玄室の奥壁に線刻画が施されており注目される。

2. 調査の成果

(1)北原遺跡

北原2号墳を含んだ調査地全体が北原遺跡である。北原2号墳のすぐ南側は果樹園造成に伴い大きく削平されていたが、調査区の南端部で僅かであるが弥生時代中期末から後期初頭にかけての竪穴住居跡・土坑などの遺構・遺物が検出された。竪穴住居跡は1棟であるが大部分が攪乱・削平されており全体の1/6しか残っていなかったが、平面形は円形と考えられ深さは40cm前後である。柱穴と壁溝の一部を検出した。土器はほとんどが細片である。その他サヌカイト片が出土している。また包含層からは中近世土器・須恵器・弥生土器・サヌカイト片・ハリ質安山岩が出土している。



1. 北原遺跡・北原古墳群
2. 菊塚古墳
3. 王墓山古墳
4. 瓦谷古墳
5. 御館神社古墳
6. 宮が尾古墳
7. 銅鐸出土推定地

第42図 遺跡位置と周辺の遺跡 (1/25,000)

(2)北原2号墳

かつては西側に位置する北原1号墳とひとつで前方後円墳と考えられていたが、試掘調査の結果、2期の円墳が並んでいることが判明した。墳丘の上部はすでに削平を受けており、横穴式石室の天井石はすべて抜き取られていた。玄室・羨道の中には側壁の石材が転落していたが、玄室・羨道ともに床面は盗掘など受けておらず、良好な状態であった。

また調査の結果、一つの墳丘内に規模の異なる横穴式石室が2基検出された。規模が大きく中心となる石室を第1石室、小さいほうを第2石室として調査を行った。以下、概要を箇条書きでまとめる。

①墳丘

形態：円墳

規模：直径15.2m（周溝の墳丘側下端で計測）

高さ：2.41m（墳端レベルの最も低い場所と検出時の墳頂との比高差）

周溝：墳丘の南側のみで検出。（反対側は削平されたか元々なかったか不明だが検出されなかった）

幅2.2m～3.7m 深さ0.70m～0.95m

外部施設：葺石、外護列石なし

②第1石室

平面形：両袖、玄室は奥壁より玄門部が狭い羽子板形

全長：7.5m

玄室：長さ2.9m、奥壁幅2.1m、袖部幅1.7m、床面板石敷き、石組み排水溝有り

羨道：長さ4.6m、幅1.05m、玄門部石敷き、石組排水溝有り、玄室との境に梱石

主軸：N-70°-E、東側に開口

閉塞：板石と塊石

遺物：須恵器（杯蓋・杯身・高杯・提瓶・平瓶・横瓶・甕・壺）、耳環、ガラス玉、空玉

鉄器（鉄鏃・刀子・鉸具・雲珠・兵庫鎖・鏝・鞘口金具）

時期：6世紀後半（TK43）～7世紀前半（TK209）

その他：追葬あり、前庭部は調査区外のため不明

③第2石室

平面形：左片袖（奥壁から見て）、玄室は長方形

全長：4.3m



写真33 北原遺跡SH01（北西から）

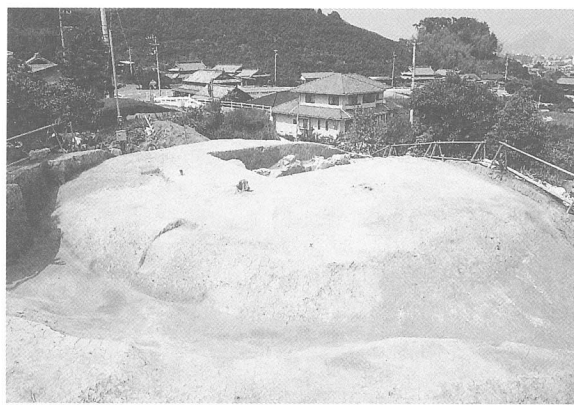


写真34 北原2号墳全景（手前は周溝）（南から）

玄室：長さ1.8m、奥壁幅0.95m、床面板石敷き

羨道：長さ2.5m、幅0.6m、玄室との境に梱石、全体に崩壊、墓道は調査区外だが東に向かって湾曲している。

主軸：N-48°-E 東側に開口

閉塞：羨道が全体に崩壊しており不明。塊石か。あるいは羨道を崩すことにより閉塞か。

遺物：須恵器（杯蓋・杯身・提瓶）、鉄器（鉄鍬）

時期：6世紀後半（TK43）

その他：第1石室と同時に構築。追葬なし。

3. まとめ

北原2号墳は周溝をもつ円墳で、一つの墳丘に大小2基の横穴式石室をもつ古墳である。6世紀後半段階に第1石室と第2石室が同時に構築され、第1石室はその後7世紀前半まで追葬されている。

北原遺跡では調査区南端で弥生時代中期末から後期初頭にかけての竪穴住居跡を検出している。今回の竪穴住居跡のすぐ南側で平成6年度に検出した弥生時代後期初頭の竪穴住居跡とあわせて、丘陵の斜面部に立地する集落が確認された。

なお、次年度に本報告書が刊行されるが、本書の記述や数値、解釈に変更があれば本報告書をもって訂正に変えるので、ご了承願いたい。



写真35 第1石室(右)と第2石室(左)(北東から)



写真36 第1石室(羨道から玄室を見る)(東から)



写真37 第1石室遺物出土状況(南から)



写真38 第2石室遺物出土状況(北から)

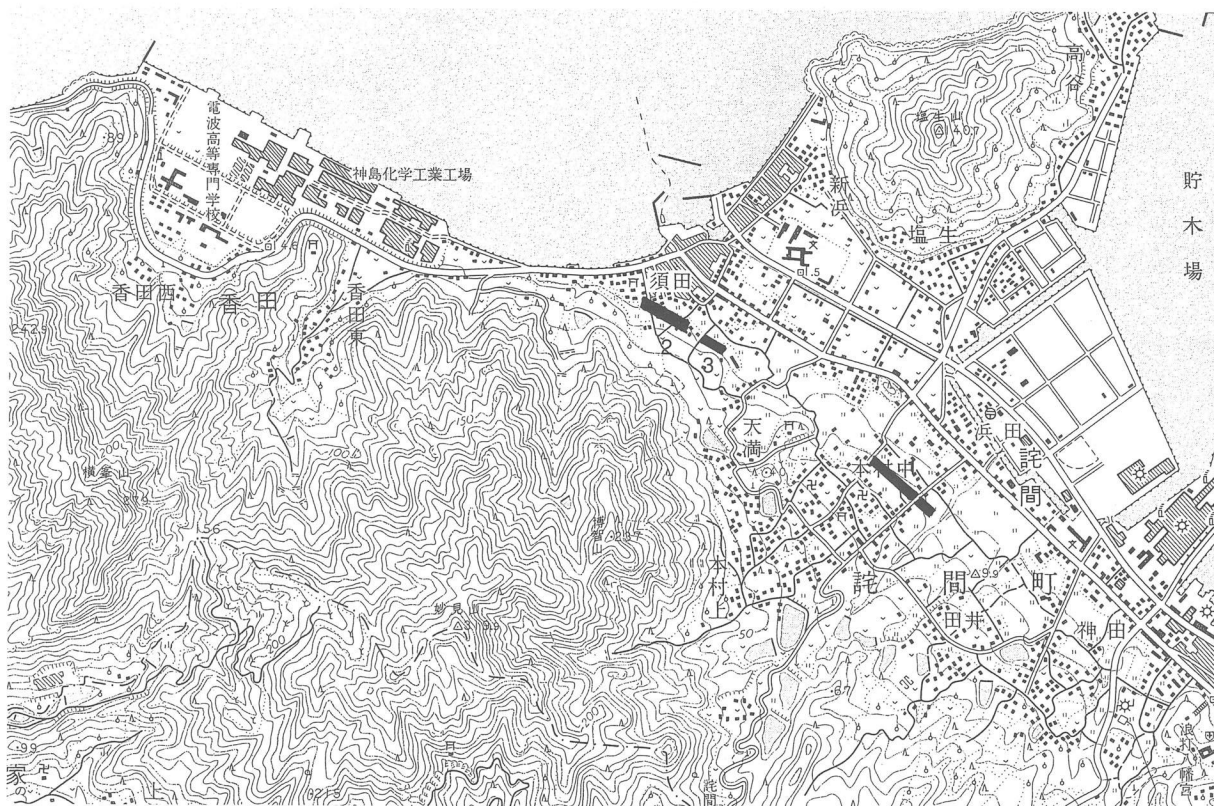
X. 本村中遺跡

1. 立地と環境

本村中遺跡は三豊郡詫間町詫間に所在し、荘内半島の付け根にある通称妙見山の東麓、丘陵の末端から距離を隔てた標高約10mの緩斜面上に立地している。海岸線からはかなり離れているが、現在の詫間町中心街の大部分が、海浜を埋め立てることによって形成されていることを考えると、かつては旧海岸線からかなり近い位置に立地していたことが推測される。

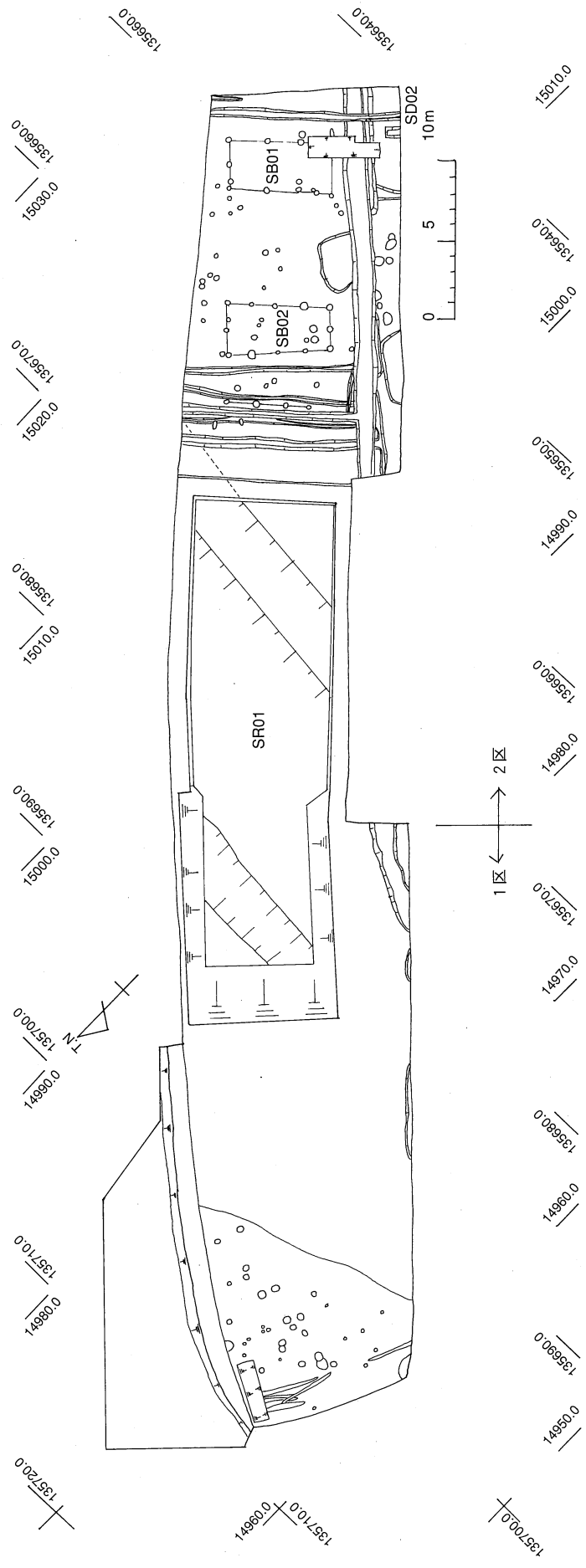
また島嶼部を含む荘内半島周辺地域は、香川県下においても、小蔦島貝塚・大浜遺跡など縄文時代の遺跡の分布密度が特に高い地域としての特徴を持ち、当該地域で平成11・12年に実施された調査においても、押型文を施文した土器片や装飾品の可能性を持つ有孔石製品など、縄文時代早期の遺物の存在が確認されている。香川県での既往の調査における縄文時代早期のまとまった資料は、小蔦島貝塚から出土している程度で未だ限られており、その意味で本村中遺跡から出土した遺物は破片資料が中心とはいえ、香川県における当該期の実態を解明するうえで、大きな役割を果たす可能性を秘めているものである。

なお、丘陵から平地へと地形が変化する急斜面上ではあるが、同様に妙見山の東麓に立地している須田・中尾瀬遺跡の自然河川跡からは、多量の縄文土器や石器、ドングリを主体とした堅果類を貯蔵していたと考えられる土坑が、尾の上遺跡の自然河川跡からは、縄文時代以降の遺物の存在が確認されている。



1 本村中遺跡 2 須田・中尾瀬遺跡 3 尾の上遺跡

第43図 遺跡位置と周辺の遺跡 (S = 1/25,000)



第44図 遺構配置図 (S = 1/400)

2. 調査の成果

1区

調査区の北西部で柱穴・溝・土坑を検出した。遺構の埋土は灰褐色粘質土と茶褐色粘質土がある。掘立柱建物跡は復元出来なかった。また調査区の大半と2区にかけて東西方向の旧河道（SR01）を検出した。

2区

調査区を南東―北西方向に直線的に伸びる幅1.0から1.5mの溝を中心に、この溝と直交する溝群を検出した。そしてこの溝群により形成された方形の区画に掘立柱建物跡と柵列が検出された。掘立柱建物跡は2間×3間のもの（SB01）と2間×4間のもの（SB02）の2棟があり、柵列は3間分あった。これらはいずれも主軸を同じくし、屋敷地を区画する溝群とも主軸が一致する。時期は溝群からの遺物から中世後半と考えられる。また調査区の南東端で検出した近世の溝（SD02）では長さ7.3mほどの木樋が出土した。木樋は一木をコ字形に刳り貫き、その上に木で蓋をして暗渠としていた。

旧河道（SR01）

1区から2区にかけて調査区のほぼ中央を東西方向に流れる旧河道である。幅は40m前後と広いが、この中で細い流路が確認できた。深さは0.8m前後で下部には黒褐色～黒灰色粘質土が堆積していた。下部を中心に縄文時代早期の押型文土器を中心とした遺物が量的に出土した。その他サヌカイト製の石鏃などの石器、剥片が出土している。また上部では弥生時代～近世の土器が出土しているが少量である。下部でも弥生時代～古墳時代の土器が少量出土しており、層位的には安定していない。なお、旧河道の

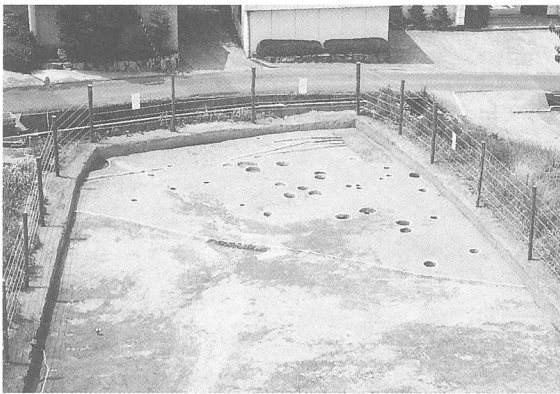


写真39 1区全景（南東から）



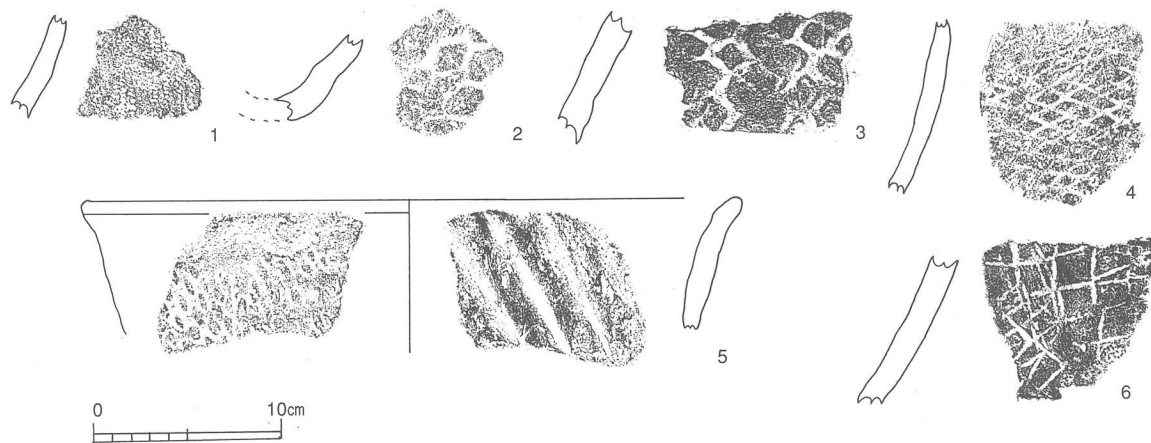
写真40 1区旧河道(SR01)土層断面(北西から)



写真41 SB01（北西から）



写真42 SA01、SB02（南東から）



第45図 2区 SR01 出土土器 (S=1/4)

底は標高10.2m前後である。

1～6まで代表的な土器を図示した。1は撚糸文土器、押型文はすべてポジティブであり、楕円形・菱形・格子などがある。2は底部の破片。5は口縁部で内面には斜め方向に太い沈線が入る。外面は細かい楕円形押型文で、高山寺式のものと考えられ、このタイプのものが多い。図示した以外に山形文、半截竹管文、沈線文などが少量ある。

3. まとめ

香川県内でもまだ出土例が少ない、縄文時代早期の押型文土器が旧河道の出土ながら量的に出土したことは特筆される。押型文土器はポジティブなもので縄文時代早期でも後半期のものである。今後、周辺地域のものと比較して分析してゆく必要がある。また2区で検出された、中世後半の溝で区画された屋敷地も詫間町の中世を考える上で興味深い。

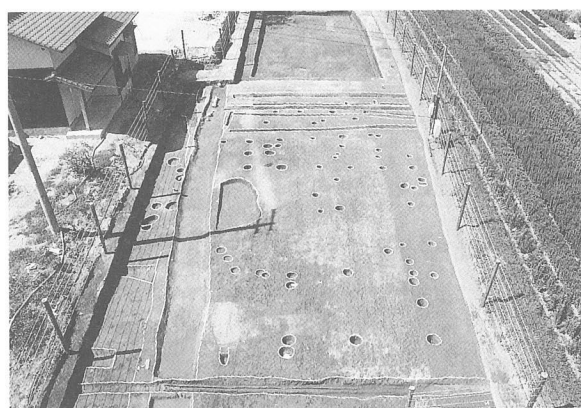


写真43 2区全景 (南東から)

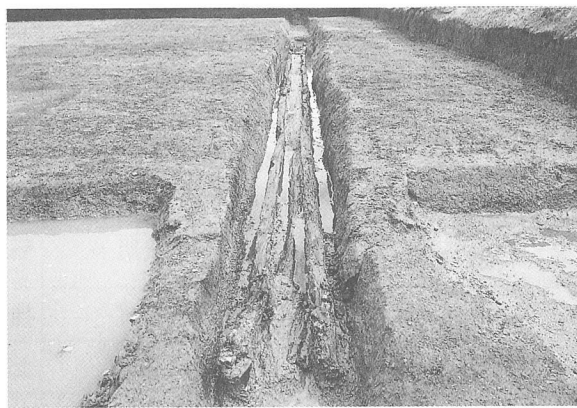


写真44 2区SD02木樋出土状況(南西から)

報告書抄録

ふりがな	けんどうかんけいまいぞうぶんかざいはくつちょうさがいほう							
書名	県道関係埋蔵文化財発掘調査概報							
副書名								
巻次	平成13年度							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	藤好史郎・森格也・木下晴一・山元素子・増井泰弘・長井博志							
編集機関	財団法人香川県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒762-0024 香川県坂出市府中町南谷 5001-4 電話 0877-48-2191							
発行機関名	香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター							
発行年月日	2002 (平成14) 年 3 月 31 日							
総ページ数	目次等 6	本文 55	観察表 1	図版 0	写真枚数 44	挿図枚数 45	付図枚数 0	
所収遺跡名	所在地	コード 市町 遺跡		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
原間遺跡	香川県大川郡大内町川東			34度 13分 38秒	134度 20分 07秒	20010701 ～ 20011130	1,680 m ²	大内白鳥 インター線
上林遺跡	香川県高松市林町			34度 17分 18秒	134度 4分 38秒	20010401 ～ 20010531	463	中徳三谷 高松線
鎌野西遺跡	香川県高松市三谷町			34度 16分 45秒	134度 4分 33秒	20010601 ～ 20010930	1,502	中徳三谷 高松線
三谷中原遺跡	香川県高松市三谷町			34度 16分 47秒	134度 4分 33秒	20010601 ～ 20010930	2,180	中徳三谷 高松線
北野遺跡	香川県高松市三谷町			34度 16分 54秒	134度 4分 33秒	20010401 ～ 20010930	3,020	中徳三谷 高松線
川岡遺跡	香川県高松市岡本町			34度 16分 05秒	134度 0分 14秒	20011220 ～ 20020331	2,954	円座香南線
今津中原遺跡	香川県丸亀市今津町			34度 16分 21秒	133度 47分 27秒	20010401 ～ 20010630	1,530	多度津丸亀線
北原2号墳 北原遺跡	香川県善通寺市善通寺町			34度 12分 26秒	133度 46分 01秒	20010401 ～ 20010630	1,260	観音寺善通寺線
本村中遺跡	香川県三豊郡詫間町			34度 13分 23秒	133度 39分 47秒	20010701 ～ 20010930	1,520	紫雲出山線
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
原間遺跡	集落跡	弥生時代後期 古墳時代	竪穴住居、掘立柱建物 土坑、土壙墓		弥生土器、土師器、石器 鉄器、管玉			
上林遺跡	集落跡	弥生時代後期	柱穴、土坑、溝		弥生土器			
鎌野西遺跡	集落跡	弥生時代後期	土坑、溝、旧河道		弥生土器			
三谷中原遺跡	集落跡	弥生時代後期 古代・中世	土坑、溝、旧河道		弥生土器、須恵器 齋串			
北野遺跡	集落跡	弥生時代前期・後期 近世	掘立柱建物、土坑、溝 旧河道		弥生土器			
川岡遺跡	集落跡	弥生時代 中世	溝、土坑		サヌカイト片、弥生土器 須恵器、白磁			
今津中原遺跡	集落跡	弥生時代	溝、旧河道					
北原2号墳 北原遺跡	古墳 集落跡	弥生時代中～後期 古墳時代	竪穴住居、土坑 横穴式石室2基		須恵器、耳環、ガラス玉 鉄器(武器、馬具)			
本村中遺跡	集落跡	縄文時代早期 中世、近世	旧河道 掘立柱建物、溝		縄文土器			